

# 伊能忠敬

研究

史料と伊能図

安藝

一〇一六年 第八十号

史料と伊能図「伊能忠敬研究」

一〇一六年 第八十号

備後

- 一番手
- 二番手
- 三番手
- 四番手
- 一番手と二番手が同じ経路を移動する

伊能忠敬研究会

伊能忠敬研究会

THE INOH TADATAKA JOURNAL  
STUDIES OF INOH'S MAP AND WRITINGS

No. 80 2016



# 伊能隊の瀬戸内測量

竹村基、渡辺一郎

伊能隊の第五次測量の福山城下を出てから毛利領につくまでは、殆ど船を使って、三手あるいは四手に手分けして測量がおこなわれた。

伊能図大全の中図の瀬戸内部分を使って測量日記に記された乗船地、下船地にしがたい手分け隊の分担地域を色分けしてみた。

中図の上で、日記の地名を特定するのは難しいので、大体の受け持ち範囲と考えて欲しい。島から島への移動は全くわからないので、最短距離を移動するものとして破線で示しました。

尾道から毛利藩領境までの広島藩領は浦島測量の図に描かれたような船団三グループを広島藩から提供されているから、表紙図の沿岸と島嶼の大部分は広島藩領と考えることが出来る。

忠敬先生は約百隻の芸州船団をどの様な気持ちで運用していたのであろうか。

.....

この地域における第五次の隊員メンバーは十九名と地元参加の窪田、平松の二名を加えて二十一名である。理由は分らないが、窪田、平松、は途中で引き上げている。名前は次のとおりである。

伊能忠敬、(同役) 高橋善助、(下役) 坂部貞兵衛、下河辺与方、(内弟子) 平山郡蔵、伊能秀蔵、尾形慶助、永沢藤治郎、小坂寛平、(供侍) 門倉隼

太、門谷清次郎、(棹取り) 利助、吉平、(下僕) 角二、半六、丈助、三治、栄治、惣兵衛、増援隊員含む。

地元応援測量師―(窪田) 浅五郎、(平松) 丈右衛門、

.....

測量班の組み分けは時々変わっており、編成は日記に書かれている。

正月二十九日 六ッ後福山城下出立。

一番 東河、坂部、下河辺、丈右衛門、(角二、栄二、丈助、半六) 川口村芦田川前より水呑村境迄測。

二番 高橋、稻生、小坂、佐藤、浅五郎、吉平、前夜徳山下より乗船、夜、八ッ頃養島へ着。

正月晦日 朝七ッ半後水呑村出立。

一番 東河、坂部、下河辺、佐藤、(丈助、角二、半六)、(栄二足痛)、水呑村界より瀬津迄測。それより平村先迄測。百官島を測。

二番 高橋、稻生、小坂、浅五郎、(吉平、総兵衛)、仙碎島、皇后島を測る。両手共当瀬津祇園へ越し七ッ半後、瀬津着。(以下省略)

(伊能中図は伊能図大全より)

(表紙題字は伊能忠敬の筆跡)

## 目次

80号

### 表紙解説

伊能隊の瀬戸内測量

竹村基・渡辺一郎

### 話題

伊能忠敬が瀬戸内海測量で使用した天文測器と「夜中測量之図」の観測地

伊能忠敬の画賛について  
連載 新説 伊能測量物語(再開)

第六話 第四次測量始まる

伊能忠敬 周辺の人⑥

桑原隆朝

品質管理的視点から

伊能測量プロジェクトを外観

高橋至時 町見図

補遺 伊能一族と宮本茶村

### 忠敬談話室

シーボルトの息子達と

オーストリア貴族との関り

伊能忠敬没後二百年記念誌発行に向けて

―各地の記念碑・標柱等紹介(九)

コラム 渡辺名誉代表の世界紀行

地球を歩く―ビクトリアの車マナー

忠敬先生没後二百年記念事業

九州支部ニュース

◆新入会員自己紹介

### 資料

◆「伊能忠敬測量隊の足跡をたどる」連載第十五回

監修 渡辺 一郎  
編集 井上 辰男

67

66

65

64

63

57

54

50

46

37

27

18

11

1



# 伊能忠敬が瀬戸内海測量で使用した

## 天文測器と「夜中測量之図」の観測地

中村 士<sup>三</sup>

この文章は、2015年に『科学史研究』に発表したものです<sup>(\*)</sup>。この度、鈴木純子さま、伊能洋さまからのお誘いで、『伊能忠敬研究』に転載させていただけることになりました。一部の用語に簡単な解説を付けたり、説明の言葉を補ったりしていますが、以下、本文と文献・注は原論文と同じです。

(\*) 元帝京平成大学教授、大東文化大学東洋研究所兼任研究員

### 1. はじめに

伊能忠敬らによる日本全国測量は、寛政12年(1800)の蝦夷地測量から文化14年(1817)まで、10回17年間にわたって実施された。江戸幕府の公式事業と位置づけられた第5次測量行(畿内・紀州及び中国地方の頃から、各藩は伊能隊への支援を幕命として対応した。伊能隊の測量は各地の人々の注目を広く集めるようになった。伊能らは地上測量用の器具だけでなく、各地の緯度測定のために天文測器も使用したから、各藩の関係者と天文・測量家は、伊能隊の測量方法にも強い関心を示し、彼らの来訪記録、見学記録が各所に残されている(1)。

それらの内、広島県呉市付近における瀬戸内海沿岸測量を絵巻図に描写した『浦島測量之図』(入船山記念館)中の「夜中測量之図」は、夜間の天文測量の実際を伝える図としてよく引用される(2)。

そこに描かれた天文測器と測量道具、伊能忠敬の測量日記、文書の大部分は、伊能忠敬記念館(千葉県佐原市、現在の香取市)に所蔵されている。しかし、「夜中測量之図」の中に描かれた子午線儀は、伊能忠敬記念館にも現存しないため(3)、その手掛かりに関する情報は江戸時代天文・測量史の上から重要である。

2003年6月に、国立科学博物館で「江戸大博覧会」と題する大規模な特別展が開催された(4)。文部科学省の特定領域科学研究費研究「江戸のモノづくり」(平成14年〜17年度)の一環として行なわれ、各分野の器物史料、文書史料が多数展示された。その中に「伊能忠敬の象限儀、子午線儀」なる物が飛入り出品された(以後、これらを省略して、新出測器と呼ぶ)。展示会開催の間際だったので、図録(4)には新出測器は収録されていない。その際、筆者は、この新出測器の出所を知らされないまま展示解説を書くことを依頼され、伊能忠敬の測量器具について記した文献の記述と取敢えず比較してみた。その結果、象限儀に関しては、伊能忠敬のいわゆる中象限儀と各部の寸法、構造・機構がウリ二つであることが分かったが、作者と製作年代に関しては何の手掛かりも得られなかった。

その後、同じ象限儀が江戸東京博物館の「からくり展」(2006年2月)に参考品として展示された。その説明に製作年が記されていたため、所蔵者の小川忠文氏にお願いして調査させていただいた。本論文の前半では、その調査と新情報によって判明した、これら新出測器の製作年号、作者名、製作地について述べ、また『伊能忠敬測量日記』と『浦島測量之図』の記載に基づき、この新出測器

の歴史的意義および製作された経緯について推定した結果を述べる。後半部分は前半部分の調査の



図1. 左は新出の象限儀。右は象限盤の対角斜線目盛と微動ネジ装置部分、及び視準用望遠鏡の接眼部(右下)



測器	伊能忠敬記念館	新出測器
象限儀	中象限儀	象限盤外半径 116cm
	象限盤外半径 3尺8寸(114cm) 目盛盤外半径 3尺6寸余(108cm余)	目盛盤外半径 105.5cm 円弧目盛部分の幅は 6cm
子午線儀	現存せず(大谷亮吉の時代から)	前柱の高さ 270cm(台座を含む) 後柱の高さ 約150cm



表1. 象限儀と子午線儀の比較

図2. 新出の子午線儀. 中央の2本の茶色の垂直の柱が子午線儀.

副産物として、『浦島測量之図』中の「夜中測量之図」について、その観測の日時、観測地などを、消去法によってほぼ一意に絞り込めることを報告する。

## 2. 新出の象限儀・子午線儀

### 2.1 新出測器の仕様と特徴

忠敬らが呉地方を測量したのは、第5次測量(文化2〜3年、1805〜6)の時で(1)、上に述べたように、この時に使用された伊能忠敬の象限儀・子午線儀と称する測器が「江戸大博覧会」で展示された。その際に撮影された写真を、図1(象限儀)と図2(子午線儀)にまず示す。

表1には、両者の主要な寸法を忠敬のものとは対比して示した。中象限儀とは、中国地方も含めて忠敬が全国測量で最も頻繁に使用した象限儀である(5)。上掲の写真と表1に基づき、伊能忠敬記念館の測器と新出測器の特徴を以下に比較する。

#### ・象限儀

まず、象限儀の寸法を比べると、表1以外の部分の寸法も両者はよく合っていることが確かめられる。箱型の視望遠鏡(4枚レンズ)の構造と寸法、1度間隔の象限盤の目盛、10分の1に分割した対角斜線副尺(※)の目盛もほとんど同じ作りである。忠敬記念館に展示されている象限儀は仮の台に載せてあるが、新出象限儀では観測用の架台も付属していた。忠敬の象限儀は象限盤などの主要部分は真鍮製で、木部は檜材を使用している(5)。それに対して、新出測器は象限盤の目盛部分も含めて象限盤全体および架台は木製である。し

かし、象限盤の円弧部分は硬質木材を二枚張り合わせ、三分割してホゾを切り、栓を入れて連結されており、他の部分も含めた全体は堅牢に製作されている。硬い材質であることは、図1(右)の対角斜線目盛の線刻が時を経た現在もはつきり残っていることから了解される(小川氏によれば、松材ではないかという)。

#### ・子午線儀

この子午線儀が象限儀と一対として製作されたことは、同種の材質、同じ木組の手法と茶色の漆塗装などから明らかである。運搬の便のためであろう、前柱が3個、後柱は2個に分割できる。前柱、後柱ともに複数のホゾ穴が穿たれ、三角形の糸を張れるように附属部品を取り付けるためであることが分る(後出の「夜中測量之図」を参照のこと)。前柱には4脚の台座が附属し、後柱は土中に直接打ち込めるように下部先端が尖っている。

後述するが、『浦島測量之図』には「夜中測量之図」とは別に、象限儀と子午線儀の詳しいスケッチ図が附属していて、新出測器はそれらと比べると非常に似ている。そのため、これら新出測器は、忠敬が瀬戸内海沿岸の測量中に、何らかの手段で象限儀・子午線儀を丁寧に計測した上で製作された復元品であろうと、この時点では想定した。なお、忠敬の子午線儀が佐原で失われた理由は容易に想像できる。三角糸が張られていない状態の子午線儀の前柱と後柱は単なる角材にしか見えず、天文知識のない者なら忠敬の測量には無関係な古材と見なして廃棄してしまったことは大いにあり得るからである。



## 2.2 新出測器の来歴

この新出測器は、忠敬の時代に呉地方の大庄屋を務めた宮尾家のご子孫が、戦後じきに古い蔵を解体し売却した品々の中から、小川氏の前の所蔵者が入手したとのことである(6)。また、小川氏によれば、「江戸大博覧会」の後、故意に汚したように黒く塗られた象限盤の枠の半径部に、かすかに文字らしいものが見えたので、黒い汚れを剥がしてみた。その結果、製作者氏名と製作年月日、及び関係者の氏名を記した銘文が現われた。さらに、山口県美祿市の長登銅山跡資料館の御好意により赤外線カメラで撮影していただき、可視光では見えなかったいくつかの文字も判読することができた。その結果を以下に示す(太文字は赤外線カメラでのみ読めた文字)。

### 測

#### 度刻(割)

武田正信

#### 目盛書入

武田鴻範

#### 塗師

景山儀兵衛

天保二年辛卯二月 日

鹿老渡辰之助直範造之

作者名に記された鹿老渡(かろうと)は通常の苗字ではなく、呉附近の島の地名だった(8)。以下に、『伊能忠敬測量日記』から、第五次測量の鹿老渡に関する記述(7)を引用する。

文化三年[1806]

三月十三日、…午後測量中大風雨…大雨ニテ測残。三手共暮ニ倉橋嶋ノ鹿老渡へ着。止宿津和野屋金石衛門、此夜モ曇天不測。  
同十四日、朝曇天、…鹿嶋一周…、三番六

ツ後帰宿。

此夜晴天測量、芸州佐伯郡御用掛五日市村庄屋弥右衛門来ル、大庄屋平田半右衛門(\*)モ来ル、伊予國松山領大庄屋杉田勇五郎来ル(\*)。

同十五日、宵ヨリ大風曇天、鹿老渡湊ヨリ下…七ツ半後倉橋嶋浦浦前屋直助止宿江着(8)。

〔\*〕平田は蒲刈嶋で九日も参加したが曇天不測だった。松山領の大庄屋が参加したのは、測量隊が次回(第六次、文化5〜6年)に四国に来るのを見越しての見学だったと推測される。』

鹿老渡には一行は2泊3日滞在したことが分る。鹿嶋の一周測量のために必要だったのだろう。



図3. 広島県呉市倉橋島と鹿老渡(矢印)

が、忠敬の測量では同所に2泊することは比較的に珍しい。

## 2.3 鹿老渡

図3の地図に見るように、鹿老渡は呉市の江田島に隣接する倉橋島にあり、最南端に位置する小さな港である。江戸時代には廻船の潮待ち・風待ちのために栄えた瀬戸内海の良港だった。上述の新出測器は、この鹿老渡の辰之助直範なる人物(士分と思われるが素性未詳)が、忠敬の鹿老渡滞在時に象限儀と子午線儀の構造を調べ、寸法を測定したのだろう。伊能隊は鹿老渡に2泊3日滞在したために、二日目の昼間測量では象限儀・子午線儀は持ち歩かず宿に残していたはずで、辰之助は昼間に詳しく計測させてもらえたと思像する『伊能忠敬測量日記』を読むと、忠敬は各所で来訪者に気軽に測量器具や天文測器を見学させたり、天文暦学書を貸し与えたりしている。その計測結果を元に辰之助は、理由は不明だが、25年後の天保2年(1831)になって新出測器を復元製作し、それらがやがて上に述べた大庄屋宮尾家に渡ったと推定されるのである。

## 2.4 和算測量家 武田正信

2.3節に紹介した象限儀の書入れから、象限盤の目盛分割の計算と目盛刻印に武田正信と武田鴻範がかかわっていたことが知れる。後者の素性は不明だが(製作の役割分担から判断して、正信の息子か一族ではないだろうか)、武田正信は広島藩の天文測量役を務めた人物だった。恐らく、鹿老渡の辰之助が上記の象限儀・子午線儀の製作立案者で、八線表(三角関数表)などを用いる専門の知識と技



術が必要な目盛り計算とその刻印を測量家武田氏に依頼したと推測される。

渡辺敏夫によれば、正信は広島の高宮郡八木村出身で、広島藩に仕えた和算家檜山義況の弟子だった(9)。檜山が間重富の紹介で麻田剛立に入門した事情など、檜山の伝記及び正信との関係は、厳島神社に奉納された文政9年(1826)の算額に詳しく述べられている(10)。なお、武田正信の末裔は現在も広島市にご存命である(11)。

### 3. 『浦島測量之図』と忠敬の瀬戸内海測量

#### 3.1 『浦島測量之図』

既に何度か言及してきた『浦島測量之図』とは、文化3年(1806)に呉地方へ忠敬が来訪した際に、芸州賀茂郡の割庄屋を務めていた宮尾家(当時は宮尾三兵衛)が藩命で伊能隊の世話をし、その時に同家が絵師に依頼して制作させた資料である。大正10年(1921)に、広島高等師範学校の先生による宮尾家の調査で発見された(2)。

現在の宮尾家ご当主宮尾昌弘氏によれば、父親の宮尾幾夫氏は戦後の昭和25年頃に呉の旧宅を整理して東京に移住したという(12)。よって、この頃に『浦島測量之図』は入船山記念館に寄託されたのだろう(寄託の正確な年は記念館の記録でも未詳(2))。また、2. 節に述べた新出測器の旧蔵者が宮尾家から鹿老渡辰之助作の象限儀、子午線儀を入手したのも、この時期だったと考えられる。

表題中の『浦島』について呉市の教育委員会等に問い合せたが、特定の地名ではなく、呉附近の瀬戸内海の浦々島々という程度の意味らしい。『浦島測量之図』は次の5部から構成される。すなわ

ち、(1)二十八宿去北極度一覽(4)、(2)『浦島測量之図』、(3)『夜中測量之図』、(4)測量器具類の図と解説、及び(5)広島藩内の測量行程(2月6日、4月4日)と関係者名簿、からなる。これらの内、(3)『夜中測量之図』(図4)が象限儀、子午線儀による観測方法の実際をよく伝える図として従来からしばしば引用されてきた。

図4の右手で、頭巾をかぶって毛せんに座り、手明かりを持って子午線儀の三角糸を照らしてい



図4. 『浦島測量之図』中の「夜中測量之図」(入船山記念館)

るのが一般には忠敬であるとされる。この子午線掛は測定すべき星が南中した瞬間を声で知らせ、それを受けて左手の象限儀の掛がその天体の高度角を測定し、机に座った記録掛がその値を記録するのである。多数の群像を描いた(2)『浦島測量之図』と同様に、図4は人物描写の素朴で生真面目な印象を与える。恐らく、宮尾家からは記録の目的で描くことを依頼されて、この絵師は創作ではなく、自分で見た情景に基づき忠実に描写をする努力をした結果がこの『夜中測量之図』になったのだろう。また、『浦島測量之図』の(4)附図中の象限儀と子午線儀は、新出測器の特徴をよく捉えている(13)。従って、(3)『夜中測量之図』は、どこかの宿所で実際に行われた天文観測に基づき描かれた可能性が高い。

#### 3.2 『浦島測量之図』の描写の客観性

事実、注記2の文献中で『浦島測量之図』について分析した解説者も、伊能隊の測量風景をかなり忠実に表現していることを一度ならず強調している。また、最近、呉市教育委員会(当時)の井垣武久氏は、『浦島測量之図』の背景に描写された山々の形状を、1930年代の油絵に描かれた実在の山の形と比較することを試みた。そして、特徴ある形を持った山の名前(白岳山)が特定できた結果、それを基準に、描かれた正確な地点が判明したとしている(14)。つまり、『浦島測量之図』は絵師が実際の測量に同行して描いた可能性が高いのである。

このことは、別な史料である『御手洗測量之図』(3月1、2日の測量)を、伊能隊の隊員の要請で絵師が随行して測量隊の作業と背景の風景を忠



実に描き、伊能隊に手渡した事実からも裏付けられよう(2)。もしこれらのことが、「夜中測量之図」にも当てはまるのなら、実際の天文観測を描いたという3.1節で述べた可能性はより高くなる。さらに、数十人の人々が動き回って測量を行なった「浦島測量之図」や『御手洗測量之図』に比較して、少人数が同じ場所に留まって天文観測を行なった「夜中測量之図」においては、忠実に情景を描写することは絵師にとつてずっと容易だったことだろう。

### 3.3 西空の参宿

「夜中測量之図」が、現実の具体的観測風景を描写したことを示す別な証拠がある。それは、同図の背景に見える、まん幕のすぐ上の西空低く描かれた星座、「参宿」(星座の場合、しん宿と読む)である(正確には、参宿と伐の2星座で、両者は一体として描かれることが多い)——今までこの事実を指摘した人を筆者は知らない。

原図では見にくいいため、図4では左上端に星座だけ切り出して示した。参宿はオリオン座の一部で、三ツ星を中心とした特徴あるつづみ型は、古来から日本でも庶民の間で広く親しまれてきた(15)。そのつづみが、図4では横倒しに描かれている。

伊能隊の全国測量は、昼間は地上測量、晴れば夜は天測を、ほぼ毎日繰り返す厳しい日程だった。翌日の測量に備えて、夜間観測は夜半前(前半夜)を重点に行なったはずである。よって、「夜中測量之図」も、夕食後の前半夜の情景を描写したと考えられる。試みに、文化3年旧暦3月中頃(西暦1806年5月3日)に天測を行なったとし

て、その夜空を、歳差を考慮したプラネタリウムソフト(16)で再現してみた。

春は夜空に目立った星座が見えないさびしい季節で、冬の名残の参宿がまだ西空に残っている。この絵師も、つづみ型の参宿だけが容易に識別できた星座だったに違いない——もし「夜中測量之図」が絵師の単なる作り絵だったら、恐らく常識的な三日月などを描いたことだろう。午後7時には西空はまだ薄明るく、星々は見えない。午後9時過には参宿は沈んでしまう。従って、参宿が西空低く見えたのは地方時で午後8時頃のはずで、事実、「夜中測量之図」には沈む前の横倒しの参宿が描かれていた。このことは、この絵師が午後8時頃の実際の天測風景を忠実に描写したと見なすのが妥当だろう。

### 3.4 「夜中測量之図」の観測地の探索

よって、本節では、「夜中測量之図」が実際に行われた天文観測を描写したという立場に立つて、その観測地の探索を試みる。『伊能忠敬測量日記』『浦島測量之図』に付された測量行程と「浦島測量之図」に描かれた背景の山々の同定(14)、などから、『浦島測量之図』に記された測量期間は、およそ3月9日から19日の間である(2)。ここでは念のため少し範囲を広げて、3月6日～22日の期間に天測が行なわれた日にちと立ち会った役人の数を、『伊能忠敬測量日記』から表2に拾い出してみた。

第3欄の「立会役人・庄屋」は、『伊能忠敬測量日記』に具体的氏名が明記されている、天測に立ち会った御用掛と大庄屋の人数である。また、「備考」欄の「☆あり」は、いわゆる「伊能大図」

中で、天測が行なわれた地点を示す朱色の「☆」マークを持つ地点である(17)。表2から、天測が行なわれても伊能大図に「☆」マークがない地点が全国ではかなりの数が存在すると推定される(伊能大図に「☆」マークのない天測地点は、信頼に足る緯度が算出できなかったのかもしれない)。

日付	止宿地	立会役人・庄屋	備考
3月6日	三津村	4名ら	☆あり(雲間に四五星測と記す)
3月7日	内海村	1名	
3月11日	三ノ瀬	記載なし	
3月14日	鹿老渡	3名	☆あり
3月18日	宮原村呉町	5名	
3月21日	江田嶋本浦	4名	☆あり

表2. 「夜中測量之図」の候補地

この表2を参考に、「夜中測量之図」が実際に天文観測が行なわれた地点を描いているという前提のもとに、候補地を絞ってみよう。「夜中測量之図」中の描写と比較する際、立会いの役人・庄屋の数



がまず参考になるだろう。鹿老渡の場合、表の3名は芸州佐伯郡御用掛五日市村庄屋弥右衛門、大庄屋平田半左衛門、および伊予国松山領大庄屋杉田勇五郎であり、忠敬日記には天測立会いのために来たと書かれている。

一方、「夜中測量之図」(図4)を見ると、観測隊員と左手にいる2名の賄係、忠敬より右手の集団を別にすれば、中央手前に後向きで座っている3名は、それらの服装・態度と刀を帯びている様子から判断して、上記表2の3名にうまく対応するように見える。特に左の袴を着ている人物は、正装していることから御用掛に相応しい。表2の他の5箇所は、立会人の数の点で「夜中測量之図」には適合しないようだ。

『大日本沿海實測録』には、鹿老渡の値として三十四度四分半という緯度を与えている<sup>(18)</sup>——信頼できる緯度を得るには、かなりの数の星の観測が必要で時間もかかる。つまり、このように緯度の算出にきちんと成功した天測だったから、「夜中測量之図」のような絵も落ち着いて描けたのだろうし、伊能大図にも「☆」マークを記すことができた。そして、そのような光景に強い感銘を受けた鹿老渡の辰之助は、忠敬の象限儀・子午線儀を計測させてもらい、後にそれらの復元品を製作することになったのだろう。

以上、この節の議論から、「夜中測量之図」の観測地としては、伊能隊が3月13〜15日に滞在した倉橋島の鹿老渡が最も可能性の高い候補と認めてよいように思う。

#### 4. 鹿老渡の現地調査

前節では、直接的な証拠はないが、「夜中測量之図」は鹿老渡での天体観測を描いた可能性が他のどの箇所よりも高いことを述べた。よって、このことを確認するために、鹿老渡の現地調査を行なった(2011年5月と2012年5月の2回)。

##### 4.1 鹿老渡の街並と歴史

鹿老渡の町は倉橋島の最南端、小さな中心街の南北が天然の入江になっており、江戸時代に廻船の潮待ち・風待ちのために頻繁に利用されたのは、この地形によるところが大きい。造船業と漁業も盛んだった<sup>(19)</sup>。元来は2つの小島に挟まれた砂州を、両側の裏山を削って埋め立てて集落が作られたが、整った街並になるのは享保15年(1730)頃からで、『倉橋町史』によれば、南北の海岸線に平行に走る4列の街並(総数百戸程度)の構成は今も昔も基本的には変わっていないという<sup>(19)</sup>。

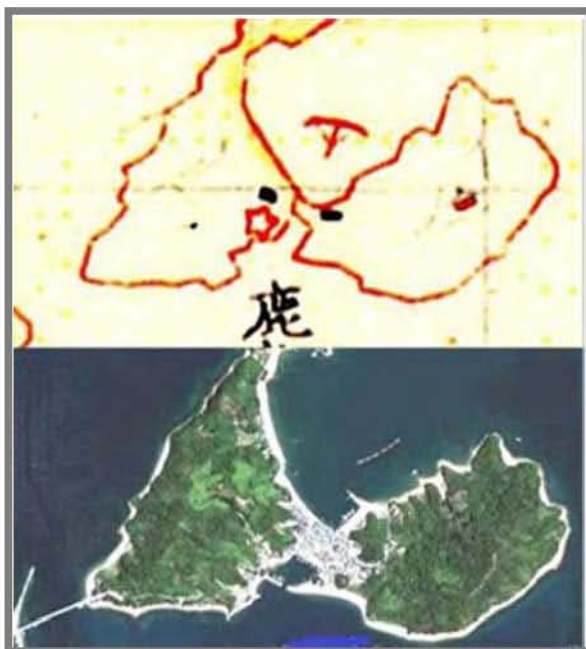


図5. 伊能大図(第167号)中の鹿老渡(上)(17)と現代の衛星写真(下)。上図で「☆」印が伊能隊の天測点。下図の中央部、2つの島の接点あたりが鹿老渡の中心街

伊能隊の天測地点の探索は、伊能図の「☆」印の場所を調べることから始めた。図5(上)の「☆」点は、図5(下)では、西側の山のふもと辺に相当し、そこには鹿老渡で最も古い、中世の時代から存続している信順寺と称する寺がある。信順寺にまず尋ねたが忠敬の測量については何も知らなかった<sup>(20)</sup>、この寺の周辺は土地が狭く地形的にも西側に山が迫っていて、「夜中測量之図」に描かれた参宿(3.3節)が見えたとはとても思えなかった。

倉橋島の古い建築に関する調査報告書<sup>(21)</sup>では、鹿老渡で寛政3年(1791)頃からの建物が残っているのは、野村家と宮林家の2軒だけと書かれている。『倉橋島志』によると、野村家は、貞享頃から文政年間まで断続的だが庄屋と地域の組頭を務めていた<sup>(22)</sup>。しかし、小川氏と私が鹿老渡を訪れた時(2011年5月14日)には、街路の東端に位置

する野村家の建物は、だいぶ以前に解体されて、古めかしい蔵一棟だけを残した無住の更地になっていた。

そこで、民宿を経営するという街路西端の角地の宮林家を、開取り調査のために訪問した。宮林家の建物は鹿老渡の中でもひととき目立ち、古い歴史を感じさせる。中庭を取り巻く堂々たる白壁土蔵造りの平屋建である。正面玄関に接した八畳間だけで6〜7部屋ある<sup>(21)</sup>。『倉橋町史』には、宮林家は本陣に使われたこともあると記されている<sup>(19)</sup>。宮林、野村の屋敷・建物は、19世紀初めから基本構成は変わっていないという<sup>(19)</sup>。



## 4.2 忠敬が止宿した宿

本節では、応対下さった宮林家の老未亡人の話をまず要約する(23)。民宿はご本人の健康上の理由から、数年前(調査当時)から止めている、宮林家の歴史と、同家が昔から伝統ある旧家だったことは、宮林家先代の舅から度々聞かされていたとのことだった(図6)。驚かされたのは、私たちが伊能忠敬の話を持ち出す前に、宮林家は野村家の分家で、両家はもとは津和野屋金右衛門という名前だったと、未亡人は、はっきり明言されたことである忠敬の測量については何もご存じなかった。この名前は、『伊能忠敬測量日記』の中に出てくる、忠敬らが鹿老渡で天測のために止宿した宿の当主の名前そのものだった(2.2節)。従って、忠敬らの天測は、野村家が宮林家かの屋敷内で行なわれたことが明白になった。

『倉橋町史』(19)や『倉橋の建築』(21)等によると、江戸時代の両家の先祖は材木商で、これは鹿老渡



図6-1. 民宿宮林家の外観 (2012年5月25日)

の造船業と関係があったと記されている。これに対して、未亡人の話では江戸時代の宮林家は鹿老渡のいわゆる網元で、漁のための網小屋をいくつも持ち、網子も多数抱えていたため、大勢が泊まれるように間取り数の多い大きな屋敷になったとのことだった。また、瀬戸内海を往来する大名や文人墨客もしばしば宿泊したため、現在も当家には頼山陽や車庵(いつあんなら有名な人の扁額がいくつも残されている。

『倉橋の建築』(21)に収録された両家の屋敷の図面を比較すると、宮林家の方が屋敷の規模は大きいから、いつの時代からか、分家である宮林家の生業の方がより盛んになったらしい。以上、述べ



図6-2. 民宿宮林の玄関内部に立つ宮林八重子氏と小川忠文氏(2011年5月14日)

てきた情報だけでは、忠敬らの天測が街路東端の野村家と西端の宮林家とのどちらで行なわれたかを確定することはできない。しかし、筆者には、宮林家の方がより可能性が高いように思われる。それは、宮林家が、江戸時代から大きな宿泊所として利用されてきたこと、天測場所に相応しい中庭が今も残っていること、宮林家の方が西に位置している、図5の天測点(☆印)により近いこと、などの理由からである。

なお、野村・宮林家が津和野屋を名乗った経緯についても簡単に触れておく。屋号から、石見国津和野藩(島根県鹿足郡津和野町)との関係が当然推定されよう。実際、津和野藩は、参勤交代や藩士の大坂・江戸への往来のために瀬戸内海航路を頻繁に利用し、廿日市などには蔵屋敷と船宿とを設けていた。また、鹿老渡は造船のための材木取引で津和野とは密接な関係があった。しかし、鹿老渡の津和野屋と津和野藩との関係はまだまだ明らかにはされていないという(24)。

## 4.3 天測点の位置精度

天測の場所が野村家か宮林家かのいずれかは確定できないにせよ、図5を見ると、天測点「☆」印と両家とは多少ずれているのが気になった。『大日本沿海実測録』には、忠敬らが測定した鹿老渡の緯度として、34度04分半を与えていた(3.4節)(18)。この数値に0.5分程度の誤差があるとする(緯度一度は約100mに相当するから)、0.9km程度の誤差が含まれることを意味する。一方、宮林家と野村家はほぼ東西に離れているため(約百数十メートル)、地図ソフトウェア Google Earth によれば、緯度差は角度で僅か1.7秒である。よって、



忠敬が求めた緯度の値から、観測地として両家を識別することはもちろん出来ない。

加えて、伊能大図における「☆」印の位置がどの程度正確かとも斟酌する必要がある。伊能大図の原図は二度にわたって焼失し、図5（上）の大図は参謀本部陸地測量部制作の写しで、米国議会図書館に所蔵される図である<sup>(1)</sup>。筆者も2012年に、別な調査のついでにこれら大図をワシントンDCで閲覧する機会があった。それらの写図は、多くの伊能原図に特徴的な、針孔で写し取るような作業で作られた訳ではなく、「☆」印も手書きのため形も大きさも揃っていない。また、例えば第28番の大図は、写図制作の時に手違いがあったためだろうか、重複した2図が存在するが、両者を比べると同じ地点の「☆」印の位置が明らかにずれている箇所が少なからず認められた（酷い場合は、「☆」印の大きさの1〜2倍ずれていた）。このことは、参謀本部陸地測量部制作の写図は、原図に比べて、その程度の位置精度しか有しないことを示唆する。

従って、図5の「☆」印も、原図の位置を正確に反映していない可能性は十分に考えられる。よって、図5において、「☆」印の地点と宮林家の地点がずれている原因が、大図の写図作成の過程で起ったとも考えられるから、両者のずれは今の場合それ程問題にしくなくてもよいのかもしれない。しかし、いずれにしても、「夜中測量之図」の候補地として、宮林家の可能性が最も高いという結論は変わらない。

最後に、『大日本沿海實測録』に記された緯度の測定値と、伊能測器との関係を簡単に考察しておく。新出測器の子午線儀が、後柱を地面に打ち込

むように作られていることは、2.1節で述べた。これに関して、「夜中測量之図」の描図と共に、筆者は当初、随分いい加減な子午線観測であるという印象を持った——従来は、子午線儀の設置は、手間と時間のかかる面倒な作業であるとされてきた

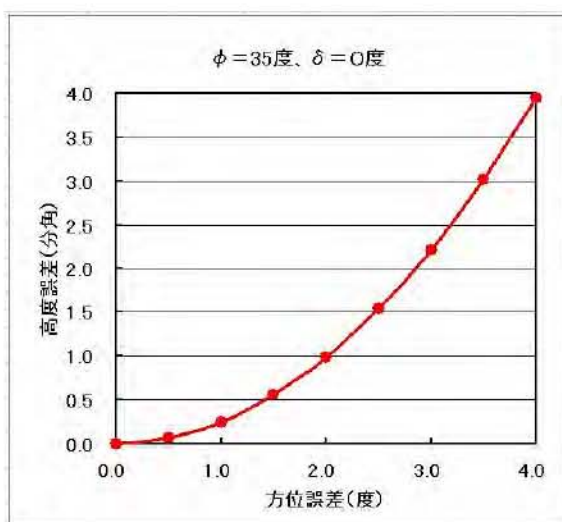


図7. 子午線儀子午面の方位設置誤差と緯度決定誤差との関係。

からである<sup>(2)</sup>、(2)。

そこで、子午線儀の東西方向の設置誤差と緯度決定の誤差との関係を調べてみた。図7は、子午線儀子午面（三角糸が作る面）の東西方向へのずれ（横軸：度）が天体の南中高度、つまり緯度の決定（縦軸：度）に与える誤差（縦軸：角度の分）を球面三角法に従って計算したものである。観測地の緯度は35度、星の赤緯は0度を仮定した。図7から、子午線儀子午面の方位設置誤差が1〜2度あっても、緯度は0.5〜1分の精度で決まることが分る。事実

『大日本沿海實測録』では、最も詳しい測定値でも0.5分までしか与えていない。よって、例えば、羅針儀で磁北を調べ、それに合わせて子午線儀の後柱を目測で土中に打込む程度で、子午線儀の設置は問題なかったと考えられる（忠敬が日本測量を行なった時代には、たまたま磁北の偏角が0に近かったことも、幸いだろう）<sup>(1)</sup>。

このことは、『大日本沿海實測録』程度の緯度観測精度では、東西方向に広がった瀬戸内海沿岸地方の測量の場合、観測緯度の値はあまり大きくは変化せず、すべての地点で緯度決定のための天測を行なう必要はなかったことを意味する。忠敬も当然このことは承知していたはずで、毎回の天測はむしろ、測定値に誤りがなかったかどうかを確認するためと、地元の立会人たちに天測という珍しい観測方法を見せることで、幕府測量の権威づけをはかることも目的だったのかもしれない。

## 5. まとめと結論

まず、小川氏所蔵の新出測器である象限儀と子午線儀は、『浦島測量之図』に記された観測装置のスケッチと説明、及び「夜中測量之図」に描かれた観測風景を裏づける存在として重要である。また、忠敬自身の子午線儀が佐原に現存しない以上、忠敬が実際に瀬戸内海測量で使用した子午線儀の姿を伝える唯一の器物史料という意味でも、鹿老渡辰之助の象限儀・子午線儀は大きな意味を持つと言ってよい。

さらに、新出象限儀に刻されていた銘文が発見されたために、『伊能忠敬測量日記』の記載と鹿老渡での現地調査を組み合わせた解釈が初めて出来るようになった結果、「夜中測量之図」は鹿老渡で



の天測を描いた可能性が最も高いことを示すことができた。故に、新出象限儀は上記の三者（銘文、日記、現地調査）を結びつける中心的役割を担ったことになる。その意味で、辰之助の象限儀・子午線儀は複製品とはいえ、極めて貴重な歴史的器物資料と位置づけることができる<sup>(26)</sup>。

本研究の一部は、文部科学省科学研究費補助金、2010～2012年度、研究課題番号：22500963の援助により行われた。

### 謝辞

新出測器の所蔵者、山口県下関市の小川忠文氏には、新出測器の調査にご協力と種々の便宜を賜り深く感謝する。また鹿老渡の調査にもご同行下さり、色々ご意見をいただけて大変有難かった。測器の隠れた銘文を赤外線カメラで見つけていただいた、山口県美祢市長登銅山跡資料館にも厚く御礼申上げる。また、『浦島測量之図』を閲覧させていただいた入船山記念館、有用な情報を提供下さり、貴重な議論と示唆とを頂戴した藤井康生氏、藤井貞雄氏、武田格昌氏、井垣武久氏、宮尾昌弘氏の皆さまにも、謝意を表したい。最後になったが、鹿老渡における忠敬の天測地を確定する証言をして下さった、故宮林八重子氏には感謝の言葉もない、ただ、ご冥福をお祈り申上げるのみである。

原論文の本誌転載をお勧め下さった、鈴木純子さま、伊能洋さまに厚く御礼申し上げます。また、快く転載許可を承諾された『科学史研究』の編集委員会にも感謝します。

### 文献と注

- (1) 例えば、東京地学会編『伊能図に学ぶ』、巻末資料一覧と附表、朝倉書店、1998年。
- (2) 呉市入船山記念館、絵巻物『浦島測量之図』（復刻版）、『館報入船山』、第7号、1995年。所蔵者宮尾家の寄託史料、元々は折本だったがある時期に巻物に仕立て直された。
- (3) 水郷佐原観光協会編『伊能忠敬』中の巻末所蔵資料一覧、1998年。伊能忠敬に関する大部分の文書・器物史料は、2011年に国宝として一括指定を受けた。
- (4) 国立科学博物館編、『江戸大博覧会——モノづくり日本』、毎日新聞社、2003年、175頁。
- (5) 大谷亮吉、『伊能忠敬』、第2編第2章、帝国学術院蔵版、1917年。
- (6) 小川氏に依頼して旧蔵者に入手先を確認していただいた。
- (7) 伊能忠敬著、佐久間辰夫校訂、『伊能忠敬測量日記』、紀伊半島・瀬戸内海の島々・中国地方（第五次）測量篇、103頁、大空社、1998年。
- (8) 鹿老渡での止宿は、注記2の『浦島測量之図』の記載でも次のように確認できる。右測量就御用諸国御廻浦、文化三丙寅春二月六日備後国鞆津ヨリ尾道へ御移、夫ヨリ御領分御測量御泊所左之通、……三月十三日 鹿老渡御泊 津和野屋金右衛門。同十四日 鹿老渡御泊 同家。同十五日 倉橋島御泊 備前屋直助。
- (9) 渡辺敏夫、『近世日本天文学史（上）』、恒星社厚生閣、1986年、211-2頁。
- (10) 渡辺敏夫、『近世日本科学史と麻田剛立』、雄山閣出版、1983年、171-2頁。本書には、厳島神社の算額の全文が収録されている。武田正信が間重富に直接学んだかどうかは不明だが、羽間文庫の史料には正信が文化12年（1825）乙亥11月16日に測定した月食の観測報告書や、六分儀の設計図が残されている（注記2参照）。特に後者の史料は、正信が象限儀目盛を設計できる能力を持っていたことを裏付けるものだろう。
- (11) 武田正信の「子孫で広島市在住の武田格昌氏の話によれば、鹿老渡の象限儀・子午線儀に関する史料は見つからないが、和算書の外に『暦象考成』などの天文暦算書は現在でも相当数が武田家に所蔵されているとのことである。なお、『広島県先賢伝』（手島益男著、東京芸備社、1949年）を見ると、天保期前後に活動した、高宮郡下四日市村出身の武田正弘という人物がいる。間重富に測量を学び、芸藩内測量方になったという。名前から判断して、あるいは武田正信の一族であろうか<sup>(26)</sup>。
- (12) 2010年3月頃の宮尾昌弘氏私信による。
- (13) この附図には、象限儀・子午線儀のほかに、望遠鏡、羅針（方位磁石）、梵天も描かれ、皆それらには寸法が記入されている。しかし、象限儀・子午線儀の図には、構造・機能の説明はなく、各部の寸法の記入もない。このことは、新出測器の関係者と『浦島測量之図』を描いた人々とは、別だったことを示唆する。
- (14) 読売新聞、2009年11月27日の広島地方版、伊能忠敬の測量風景「浦島測量之図」。
- (15) 例えば、野尻抱影、『日本の星：星の方言集』、中央文庫ワイド版、2004年、261-2頁。オリ



オン座の全形を「つづみ(鼓)星」と呼ぶ習慣は関東から関西まで昔からあるという。

- (16) ステラ・ナビゲータ、Ver. 6、アストロアーツ、2006年

- (17) 伊能忠敬作、渡辺一郎 監修、日本地図センター 編著、『伊能大図総覧』、河出書房新社、2006年、第167図。

- (18) 伊能忠敬測定、大学南校編、『大日本沿海實測録』、巻9、大学南校、1870年、127頁。

- (19) 倉橋町編『倉橋町史』、通史編、2001年、310-317頁。同じシリーズの『倉橋町史』、別編(海と人々のくらし)、2000年にも同様な記述が見られる。

- (20) 私たちが訪問する以前に、鹿老渡辰之助直範について信順寺に問合せをしていたが、信順寺の過去帳には名前は見つからなかったという答えだった。

- (21) 倉橋町編『倉橋の建築』、1989年、47-65頁。

- (22) 野村直助編纂、『倉橋島志』、非売品、1999年(原著は明治42年)、28-9頁。

- (23) 未亡人の名は宮林八重子さん(訪問当時84歳、昭和27年に呉市から、宮林家八代目の御当主(敏氏、船乗り)のもとに嫁いでいられた)2010年に「当主の七回忌法要を行なった」。なお、追加の質問のため2012年3月に電話を差し上げたところ、親族の方から亡くなられたと告げられた。

- (24) 津和野町、『津和野町史』、巻3、1989年、112-113頁。

- (25) 例えば、保柳睦美編著：『伊能忠敬の科学的業績、日本地図作製の近代化への道』、古今書院、1974年、60頁。

- (26) 小川氏によれば、小川氏の天文・測量機器を含む3200点余りのコレクションは、山口県萩市が建設中の新たな博物館に収蔵され、2017年春には公開される予定とのことである。

- (21) 原論文は同じ表題で、日本科学史学会の『科学史研究』、第273号(2015年4月)、3-15に掲載された。

- (22) 対角斜線目盛とは、測定器の最小目盛以下の端数を読み取るために工夫された「副尺」の一種である。西洋で発明された副尺で、中国に渡ったヨーロッパ人宣教師が著わした漢訳天文書を通じて日本に伝わり、伊能忠敬を含む、いわゆる麻田派天文学者によって広く使用された。

- (23) 鹿老渡(かろうと)という地名の由来は、百済の時代から江戸時代の朝鮮通信使まで、大陸の使節が瀬戸内海の往復時に宿泊したため、唐泊り(からどまり)、唐門(からと)などと呼ばれ、それが後に「かろうと」に転化したという説があるが、正確なことはわからない。二十八宿は、ほぼ赤道に沿って配置された、28個の古代中国からの伝統的星座で、星占いや月・惑星の位置を示す目印に利用された。

- (24) 去北極度は、これら星座の星が天の北極からどのくらい離れているかを表す数値で、90度から赤緯の数値を引いた値に等しい。星の南中高度(φ)、星の赤緯(δ)と、観測地の緯度(φ)との間には、

- (25) φ = 90度 - δ の関係がある。  
和算小説家、鳴海風氏の最近の「ご教示によれば、正弘は正信の息子である」とのこと。

国立国会図書館 (HPより抜粋)

平成28年度企画展示のお知らせ

「続 あの人々の直筆」

10月15日(土)～11月12日(土) 入場無料  
10時～19時(但し18:00まで)

(日・祝・第三水曜日は休館)

国立国会図書館 東京本館 新館展示室

所蔵資料の中から、有名人の直筆約120点を集めた展示会「続・あの人々の直筆」を開催します。

これは、平成26年度に東京本館で開催した展示会「あの人々の直筆」の第2弾となります。

※関西会場では、東京本館出展資料の一部(約30点)と直筆博士論文を展示します。(詳細はお問い合わせ)

主なあの人… 将軍・武将、伝称筆者：豊臣秀吉、足利義政、西行。近世：小野蘭山、渋川春海、伊能忠敬、司馬江漢。近世から近現代へ… 歌川豊国、市川団十郎、佐久間象山、井伊直弼、勝海舟、高橋泥舟、山岡鉄舟、西郷隆盛、吉田松陰、坂本龍馬。近現代：政治家 高橋是清、後藤新平、幣原喜重郎、石橋湛山、福田赳夫、大平正芳。社会運動家 北一輝、幸徳秋水、賀川豊彦。実業家 五代友厚、広岡浅子、御木本幸吉、根津嘉一郎、小林一三、出光佐三。教育家 新島襄、新渡戸稲造。学者 伊藤圭介、北里柴三郎、西田幾多郎、柳田國男、金田一京助。文学者 幸田露伴、尾崎紅葉、中里介山、柳原白蓮。芸術家 朝倉文夫、柳宗悦、棟方志功。棋士・力士等々

電子展示会：こちらでもご覧ください。

あの人々の直筆 <http://www.ndl.go.jp/jikinhitsu/>  
2016年8月30日、国立国会図書館(NDL)は電子展示会「あの人々の直筆」を公開しました。



## 伊能忠敬像の画賛について

玉造 功

### 一 はじめに

佐原の伊能忠敬記念館に入っすぐ正面には、伊能忠敬の有名な肖像画と、ランドサットの衛星写真と伊能図を重ね合わせた画面が展示してあり、入館者を迎えてくれます。ところが、この二つが、私たち佐原の町並みボランティアガイド泣かせの難物なのです。

難物その一の「伊能図のズレ」の理由については、会報第三二号と五一号の吉田正人氏の論考などをもとに説明してきました。しかし、難物その二の肖像画の画賛の意味を問われると立ち往生してしまいます。かつて、佐久間達夫氏が画賛について解説しておられますが、やや意味が取りづらく、そこが、観光客を納得させることが出来ません。そこで浅学非才を顧みず、自分なりに解説を試みましたのでご笑覧下さい。

### 二 画賛の書き方について

この「伊能忠敬像」は、「絹本着色掛幅装」の肖像画に久保木清淵が七言絶句の賛を記したものである。

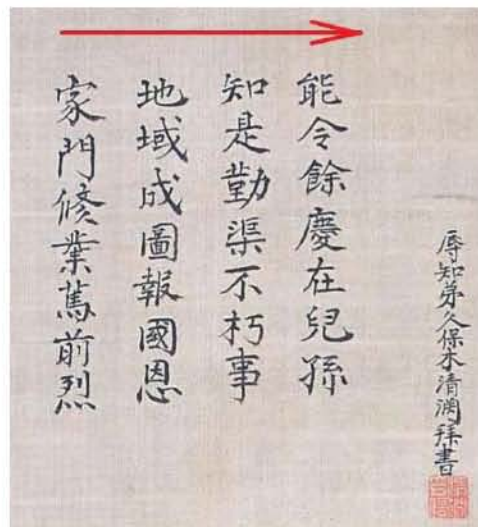


図2 左図「伊能忠敬像」から画賛の部分を拡大・加工



図1 国宝「伊能忠敬像」(千葉県香取市 伊能忠敬記念館所蔵)

この画賛は、図2の矢印のように、左側から右側の方へ行が移るといふ特異な縦書きで記されている。

屋名池誠<sup>②</sup>によると、中世から近代初期にかけて、肖像画の画賛において「画賛は描かれた人物の顔の向いている方が先頭行になる」という規則が存在していたという。つまり、顔が左向きの場合、左側の行から右へ書いてゆく。顔が右向きの場合は、右から左へ書いて行くのである。確かにこの「伊能忠敬像」も顔が左向きで、画賛は左から右に向かつて行が移っていく。

こうした画賛の書き方は、禅宗の「頂相(ちんぞう)」に書かれた画賛を通して、日本に定着したとのことである。「頂相」とは、禅宗において修行僧が師僧のもとで修行を終えたときに、悟りを開いたことを師が証明認可するものとして与えられる師僧の肖像画であり、頭上には師僧の賛が書かれている。中国の北宋時代から行われ、日本では鎌倉時代以降に盛んに行われた。もともと、このような画賛の書き方は、一般的ではなかったとのことである。

ちなみに、左向きの顔に合わせて、左から右に画賛を書いている有名な肖像画を二点紹介する。



図3 「千利休像」部分 長谷川等伯筆、春屋宗圓賛 (京都・表千家不審菴蔵、桃山時代、重要文化財)





図4 「蒲庵淨英像」 伊藤若冲筆、蒲庵淨英自賛

(京都・萬福寺蔵、江戸時代)

このほか、同様な画賛があるもので国の重要文化財の指定を受けているものを二点あげる。

・「夢窓疎石像」無等周位筆、夢窓疎石自賛

(京都・妙智院蔵 南北朝時代)

・「紙本著色足利義教像」 瑞溪周鳳賛

(愛知県一宮市・妙興寺蔵 室町時代)

この四例のように、左から右に画賛を書いた人物の多くは禅僧である。

しかし、頂相が盛行した中国の南宋王朝で儒学を朱子学として再構築した朱子(朱熹)もまた「画賛は描かれた人物の顔の向いている方が先頭行になる」という考え方を示している。屋名池誠によると、朱子は「方伯謨への返書」という書簡③のなかで、肖像画の賛の書き方について、次のように指示している。

此賛就畫象上寫一本須依今寫去本首尾

図5 朱子「答方伯謨」の八通目の該当部分

(国立国会図書館デジタルコレクション)

「首尾向背蓋隨二面所レ向也」

「首尾向背は蓋し面の向くところに随うなり」

(画賛の首尾前後は、像の顔の向いている方向に、随ってください)

久保木清淵は、朱子学に精しい松永北溟(呑舟)に学び、朱子が「呂氏郷約」を補訂した「朱文公増損郷約」を自家出版④したこともあり、このようなことを知っていたとしても不思議ではない。

### 三 画賛の訓読・語釈・構成・脚韻・大意について

#### ○ 訓読について

家門 業を修め、前烈に篤し。

地域 図を成し、国恩に報いる。

知る これ 勤渠不朽のこと。

よく餘慶をして児孫に在らしむ。

辱知の弟 久保木清淵 拝書す

#### ○ 語釈について

・「家門」… 一家一門。(『字通』)

・「修業」… 家業を治め営む。(『大漢和辞典』)

典拠は、『史記』の貨殖列伝所載の范蠡(ハンレイ)の故事「子孫修業而息之。遂至巨万」である。

・「篤」… 原文には、クサカンムリで「薦」とあるが、これは『康熙字典』には収録されていない、

「篤」の異体字である。(『日本難字異体字大字典』)

・「前烈」… 前代の功績、先人の事業。(『大字源』)

「篤前烈」とは、前代の先人の功績や事業を、誠実によく守り、さらに厚くし、発展させたの意。

典拠は、『書経』の「武成」篇の「公劉克篤前烈」である。

・「地域成図」… 「地域の図を成し」と訓読することは出来ない。「家門」に対する対句としての「地域」として理解すべきである。

・「勤渠(キンキョ)」… 丁寧(テイネイ)に事に勤めること。委曲を尽くすこと。(『日本国語大辞典』)

典拠は、『資治通鑑』の魏紀二・文帝黃初四年の記事「幼宰之勤渠、有忠於国、則亮可以少過矣。」である。諸葛亮孔明が同僚であった董和(字は幼宰)の仕事ぶりを「勤渠」と讃えたという故事。

・「餘慶」… 先祖の善行の報いとして子孫に及ぶ幸せ。(『漢語林』)

典拠は、『易経』の坤にある「積善之家、必有餘慶」である。

・「辱知弟」… 「辱知」とは、知り合いであることをへりくだっていう語であり、あえて訳す必要は無い。「弟」は、門人、門弟、弟子の意。

・「拝書」… 拝見、拝借、拝読の拝と同じで、自分の行為に冠して相手に敬意を示したもの。

○ 第一句と第二句の構成について  
伊能忠敬は

「家門」においては「修業」し、その結果、「篤前烈」になったのであり



「地域」においては「成図」し、  
その結果、「報国恩」になったのである  
という対句の構造になっている。

第一句では佐原村伊能三郎右衛門家での忠敬第一の人生が、第二句では日本全土の実測地図を作製した第二の人生が表現されている。

ただ、「地域」の意味が取りにくい。この場合佐原や下総という「地域」では意味が通じない。

「地域」については、『漢語大辞典』には「本土」という語釈が、『大漢和辞典』には「疆域」という語釈が示されている。この場合は「本邦、邦家、海内、吾邦、天下」といった意味合いでとらえたい。

忠敬の家門レベルでの業績と、国家レベルでの業績を並置したのが第一句と第二句の構造ではないか。

#### ○脚韻について

七言絶句では第一句、第二句、第四句で押韻するのが正格である。この画賛では、第二句末の「恩」と第四句末の「孫」が韻字で上平声の元韻である。第一句末に押韻していないが、これは「踏み落とし」といって許容されるものである。

とりわけ、第一句と第二句が対句となっている場合には、第一句末に押韻しないことは少なからず見られるものである。

#### ○画賛の大意について

忠敬翁は

伊能三郎右衛門家においては、

代々の家業を受け継いで、さらに発展させ、本邦においては、地図をつくることで、幕府から受けた恩に報いた。

その地図は誠に丁寧な仕事であり、

不朽の価値を持つ。

忠敬翁の偉業のおかげで、

幸せが子孫にまで及ぶであろう。

弟子の久保木清淵が謹んで書す

#### 四 画賛の作成経緯について

忠敬の嫡孫による「伊能忠誨日記」の文政四年の記事から関連事項を抜粋してみる。

・三月二日

「伊能七左衛門、津ノ宮先生<sup>⑧</sup>入来。」

・三月一三日

「伯母高橋侯へ行く。予、元服二十七日の由。」

・三月一五日

「青木勝次郎来る。祖父の画像を持参。東土川の祖母<sup>⑨</sup>来る。」

・三月二〇日

「予、三宅<sup>⑩</sup>へ祖父の画像の表具を頼みに行く。」

・三月二七日

「予、伯母、高橋侯へ行く。昼時後、予、元服。」

直に源空寺、足立左内へ行く。予、高橋侯へ鮮鯛一折、樽代百疋上る。高橋侯、予に御持服の裏を給う。予、前髪をする人、高橋侯のサムライ久蔵也。予又、高橋侯へ帰る。布施の御隠居入来。酒宴。六時半後帰る。予、今日熨斗目<sup>⑪</sup>麻上下也。」

・四月朔日

「予、加冠の祝儀、下役衆へ酒肴を出す。」

時系列的にみると忠誨の元服にあわせて忠敬の肖像画を制作した感がある。出来あがった肖像画に、忠誨の元服に出席するために出府した「津ノ宮先生」こと久保木清淵が画賛を添え、集まった親族や関係者にお披露目したところか。

その後、七月一〇日には「大日本沿海輿地全図」と「大日本沿海実測録」を上呈し、九月四日に忠敬の喪を公表することになる。

#### 五 青木勝次郎について

この肖像画の作者とされる青木勝次郎については、不明なところが多い。大谷亮吉の『伊能忠敬』でも、「青木勝雄、通称を勝次郎と云ふ。高橋景保の手附下役として忠敬に随ひ」第六次(四国・大和路)測量と第七次(九州一丈)測量に参加したと、「絵画を能くするを以て：沿道の地勢の描写に従事」したこと、「地図製作の際には：測図の形容に得意の彩筆を揮ひたる」こと以外については、「詳細なる履歴に至りてはこれを明にする能はず」としている。

伊能忠敬に関連して青木の名が初めて登場するのは第六次測量を前にした「伊能忠敬江戸日記」



文化四年三月一四日の記事で、「此日、駒込四軒寺町大観音前組屋敷 青木勝治郎方へ画紙を遣す。」とある。

「駒込四軒寺町 大観音前組屋敷」を江戸切絵図の「駒込絵図」で調べてみると、この「組屋敷」



図6 尾張屋版「駒込絵図」から四軒寺町付近

(国立国会図書館デジタルコレクション)

とは御先手組屋敷のことである。また、柴山傳左衛門による第六次測量の隊員名簿<sup>⑥</sup>によると、「御先手 能勢市十郎組同心」として坂部貞兵衛と青木勝次郎が並記されている。能勢市十郎は武鑑によると二千石の旗本で、御先手御鉄砲頭をつとめ、与力六騎と同心三〇人を配下に置き、その組屋敷は駒込である。

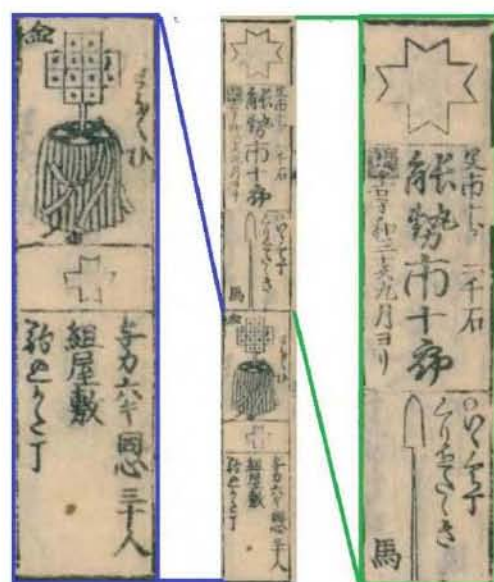


図7 『文化武鑑』(文化二年 須原屋茂兵衛刊)

(国立国会図書館デジタルコレクション)

のちに測量に出立する際<sup>⑦</sup>、忠敬一行は偶然にも駒込大観音前で坂部貞兵衛と出会い、同道して青木勝治郎方に立寄って、一緒に出発地点の王子村に向かった。

このことから分かるように、坂部貞兵衛と青木勝治郎は同じ組屋敷のご近所同士だったのである。

第五次測量では天文方下役と忠敬の内弟子の確執によりトラブルが生じただけに、第六次測量隊の天文方下役の隊員選定には気を遣ったことである。忠敬が信頼する坂部貞兵衛が同じ組屋敷に住む同僚の青木を紹介し、忠敬が画紙を遣してその能力を試したのだろうか。結果として、青木は坂部と同様に御先手鉄砲組から天文方に下役として出向して第六次測量隊のメンバーとなり、江戸日記に「青木勝二郎来る」という記事が見られるようになる。

文化四年八月一九日の富岡八幡の祭礼<sup>⑧</sup>では、忠敬は白木屋蔵店の棧敷に間重富、高橋景保、会田三左衛門を招いたが、坂部貞兵衛、下河辺政五郎等とともに青木も参加しており、天文方の一員となっている。



図8

『東都歳時記』から富岡八幡宮祭礼

国立国会図書館デジタルコレクション



一方、同年九月四日の江戸日記には「此夜坂部青木止宿。彗星を測る」とあり、坂部の指導の下で泊まり込みで天体観測に取組んでいる。また、第六次測量中の塩飽本島での日食観測<sup>⑧</sup>では、太陽の正中時間、日食の開始や終了時間をカウントする垂揺球儀を担当している。このように、測量隊員としての通常業務も行なっている。青木を「絵師」と記す例があるが、青木は「町絵師」でもなければ、幕府の「御絵師」でもない。絵の得意な御先手組同心が天文方下役として測量隊に加わったのである。

青木は第八次以降の測量には参加しなかったが、江戸での地図仕立の御用をつとめている。江戸日記には、「青木勝次郎 御用勤む」とあると、数日から一ヶ月ほど後に「青木勝次郎 御用済駒込に帰る」というようなことが繰返し繰返し記録されている。その間は亀島地図御用所に泊まり込みである。

文化一四年九月二九日の江戸日記に「青木勝次郎来り御用地図板借用帰宿」、同年十二月一八日には「青木勝次郎来る。地図二十二枚持参」とある。駒込の組屋敷での地図仕立が認められたようである。

なお、幕臣となった忠敬は第五次測量以降は「遠国出立」のたびに万が一に備えて、仮養子願の心願書を所属長の小普請組頭に提出することになる。第八次測量出発の直前の文化八年十一月四日の江戸日記には「組頭渋谷新之助へ罷越、出立の儀申談、心願書を渡し跡引請青木勝治郎に相究」とある。青木勝次郎は忠敬の心願書の「跡引請」に選ばれるほどの信頼を得ているのである。

## 六 久保木清淵について

久保木清淵は、伊能忠敬の友人にして、伊能図作製の献身的協力者として知られる<sup>⑨</sup>。



図9 国宝「御用旗」

(千葉県香取市 伊能忠敬記念館所蔵)

「御用旗」の文字を書き、文政四年に幕府に上呈した「大日本沿海実測録」の伊能忠敬の序文の下書きを起草したのも久保木清淵であり、この伊能忠敬像の画賛もまた二人の交友の証しである。

しかし、久保木清淵は伊能忠敬の協力者にとどまる人物ではない<sup>⑩</sup>。

久保木清淵<sup>⑪</sup>は、宝暦十二年に佐原の隣村である津宮村に生まれた。号が竹窓、字が蟠龍、仲黙、通称は太郎右衛門という。文政十二年に歿した。

代々、久保木家は新田開発から地主経営、さらに舟運業、酒造業、金融業などを営んできた。

また、名主としての久保木清淵は、天明以降の飢饉や洪水、村方騒動という地域社会の危機的状況にあつて、旗本領主と小前農民層との間に立つて奔走し、双方からの信頼をえた地域指導者であつた。

その一方で、漢学を主軸としつつも和学、仏教、洋学、地誌など幅広い分野に関心をもちながら、

地域に根ざした実学を志向する文人であつた。『補訂鄭註孝経』<sup>⑫</sup>が代表的著作である。また私塾「息耕堂」や小宮山楓軒<sup>⑬</sup>の「延方学校」で、地域の子弟の教育にあたつたことでも知られる。

宝暦・天明期には、伊能忠敬が二十歳の折、小野川の対岸に住む伊能茂左衛門家の当主の景良が四三歳で隠居し、江戸に居を構え、楫取魚彦(カトリナヒコ)の号で賀茂真淵門下の高弟として活躍した。寛政・文化期には、忠敬もまた五〇歳で江戸に居を構え、全国測量を果たした。彼らは、佐原での地域指導者としての第一の人生と、江戸での専門的な文人としての第二の人生と、「人生を二度生きる」生き方をした。

しかし、忠敬の一七歳年下である久保木清淵の場合は「人生を二度生きる」生き方を選ばなかった。江戸に出身することはあつても、江戸に居を構えることは無く、地域指導者、地域文人として生涯を全うした。



図10 久保木清淵の墓 (千葉県香取市津宮)





図 11. 久保木清淵墓地の解説板

久保木清淵に師事した清宮秀堅もまた天保・幕末期の佐原村の指導者として、地域のインフラ整備、破綻寸前の領主津田家の財政建直しと佐原の地域財産の保全、忠誨の死後当主不在であった伊能三郎右衛門家の再興など、地域の課題に取組んだ。「下総国旧事考」を著し、地域に根ざして学問を深めた事で知られる。

楫取魚彦・伊能忠敬の時代から久保木清淵・清宮秀堅の時代へと、幕藩体制の崩壊に向かって地域社会は動きつつあった。地域の指導層が「人生を二度生きた」ことができた時代は終焉を迎えた。

## 【注】

- ① 佐久間達夫「伊能忠敬と久保木清淵との契」  
（『伊能忠敬研究』第四十二号 二〇〇五年）

## 【意味】

家業をおえ、前々からの家の事を守ってやったのである。その仕事は、地域の図を作り、国恩に報えたことである。よく勤めたことが、不朽の事であった。よく仕事をして、喜びが、子孫に伝わる。おろかな弟である久保木清淵拝書

- ② 屋名池誠「縦書きの奇妙な世界」  
（『図書』第六三九号 二〇〇二年）

- ③ 『晦庵先生朱文公文集』第四十四卷

- ④ 杉仁「在村における孝経」  
（『近世在村文化と書物出版』所収 二〇〇九年）

- ⑤ 国語の教科書などでもお馴染みの張継の七言絶句「楓橋夜泊」の場合には、  
「月落烏啼霜滿天  
江楓漁火對愁眠  
姑蘇城外寒山寺  
夜半鐘聲到客船」

と第一句、第二句、第四句で押韻している。  
富士川英郎の『江戸後期の詩人たち』の冒頭に登場する六如上人の場合は、七言絶句十首を載せているが、そのうちの二首が「踏み落とす」である。その一つ「残春野外」と題した七絶を紹介する。

「緑草茸茸水滿塘  
久陰初作一番晴  
群蛙閣閣無情極  
催送徂春不住鳴」

- ⑦ 「伊能忠敬研究」第三十四号 二〇〇三年

- ⑧ 「津ノ宮先生」とは久保木清淵のことである。忠敬が鹿児島城下から佐原の娘の妙薫、嫁のリテに宛てた書状の一節に、「三治郎儀手習」津宮近道わし候よし大「宜候」（『伊能忠敬書状 千葉縣史料』二）とあるように、津宮の久保木清淵は忠誨の手習いや素読の先生であった。三治郎とは忠誨の幼名である。

- ⑨ 「東士川の祖母」とは、忠誨の母親リテの実母の武津（ムツ）のこと。上総国東士川（現在の東金市）の小川省義の妻。文政四年十月七日歿。

- ⑩ 忠敬像の表具を依頼した「三宅」とは三宅八郎右衛門あるいは三宅八郎左衛門のことである。「伊能忠敬江戸日記」では、記述のある三個所とも三宅八郎右衛門と表記し、「伊能忠誨日記」では、一個所で三宅八郎右衛門、三個所で三宅八郎左衛門と表記している。日記原文の問題なのか、翻刻上の問題なのか原文を見ないと確定し難い。

- 「伊能忠敬江戸日記」文化十四年六月十七日の記事「小浜長五郎様家中 大沢勝右衛門門人 三宅八郎右衛門来る。砂糖一曲送る」が初出である。小浜長五郎は寄合席の六千石の大名旗本であることが武鑑で確認できる。しかし、家臣である大沢勝右衛門や、その門人である三宅八郎右衛門については不明である。

- 「伊能忠誨日記」の文政四年一月二十日の記事に「予三宅へ行く。稽古初め也。」とある。忠誨は一体何の稽古をしていたのだろうか。文政三年の一年間で、「三宅来る」が七回、「三宅へ行く」が五回記録されている。

- ⑪ 忠誨が元服にあたって着用した御焚斗（のしめ）は文政二年に、妙薫が普請方として京都にいた渡



辺慎（尾形謙二郎）に調達を依頼したもの。渡辺から妙薫宛てた書簡には、御焚斗目御落手、お気に入りの由、大悦と記されていることである。

『世田谷伊能家伝存 伊能忠敬関係文書目録』

二二頁〇二三四、二三頁〇二三六

（国宝・書状類番号二八二、二八四）

⑫ 安永純子「伊能測量隊員柴山傳左衛門について

（一）

（『伊能忠敬研究』第四四号 二〇〇六年）

⑬ 『伊能忠敬測量日記』文化六年八月二七日

⑭ 斎藤月岑の『武江年表』によると、文化四年八月一五日の祭礼は、雨天のため十九日に延期とな

った。今回の祭礼では、十二年前に喧嘩騒ぎで中止されてきた氏子各町内の踊りや練物が久しぶりに復活することになり、「江戸中はいふに及ば

ず、近在より見物出て」という大変な人気となった。そんな中で、棧敷席を確保して、天文方関係者を招待するとは、忠敬の面目躍如たるところである。なお、その雑踏の中で、永代橋が崩落する

という惨事が起こったことでも知られる。

⑮ 『伊能忠敬測量日記』文化五年十月朔日

⑯ 佐久間達夫「伊能忠敬と久保木清淵との契」

「伊能忠敬研究」第四二・四三号 二〇〇五、六年

⑰ 久保木清淵に師事した清宮秀堅は、小宮山楓軒（昌秀）が久保木清淵の墓碑銘に、伊能図作製に

対する功績を記したことについて批判している。清宮秀堅の稿本「久保木竹窓先生伝」の後文の

注記において、「与『地図之旁』、無『関係』也。故除之」と断じている。忠敬の地図作製の芳に

寄与したことは、久保木清淵の本来の業績とはな

らん関係がない。故に記載する必要がないという

のである。

「忠敬の友にして伊能図作製の献身的協力者」という側面だけが注目されることで、久保木清淵の全体像を見えづらくしてきたようである。

稿本「久保木竹窓先生伝」については酒井右二氏から御教示を得た。記して謝する。

⑱ 久保木清淵については次の文献を参考にした。

・『佐原市史』三三九〜三四二頁

・『地域に根ざした久保木清淵』

（『千葉県の歴史』通史編近世二 九二八〜九三一頁）

・酒井右二「在方町佐原からみた近世地域文化試論」

（『地方史研究』三四六号 二〇一〇年）

・酒井右二「久保木清淵の文化活動」

（『民衆史研究』第八八号 二〇一四年）

⑲ 杉仁「在村における孝経」

『近世在村文化と書物出版』所収 二〇〇九年

⑳ 前田幸子「小宮山楓軒『懷宝日札』を読む」

（『伊能忠敬研究』第七十六号 二〇一五年）

## 企画展の紹介 （香取市HPより抜粋）

伊能忠敬没後200年記念プレ企画

平成28年度特別展

地図とアートの境界

——伊能図とパノラマ風景画の200年——

平成28年10月25日（火曜日）から

12月18日（日曜日）

伊能図は、近代的な実測地図である一方で、地形描写の面では伝統的な日本画や洋風画などにみられた絵画的手法が用いられています。そのひとつが、空から見下ろしたように描く鳥瞰図法です。本格的な近代地図では、このような製作者の主観やデフォルメの入った鳥瞰図法が用いられることはなく、それはむしろ、幕末・明治に活躍した五雲亭貞秀、大正・昭和の吉田初三郎や松井天山などの絵師たちの手になる風景画・パノラマ図に受け継がれていきました。本展では、伊能図の景観や地形の描写に着目して、忠敬と親交の深かった司馬江漢や亜欧堂田善など同時代の画家たちの風景画とともに、伊能図から幕末・明治・大正時代の鳥瞰図へと続く、風景画の「もうひとつの歴史」を紹介いたします。

お出かけの折はお電話かHPで確認ください。

伊能忠敬記念館

〒287-0003 千葉県香取市佐原イ1722 番地1

電話：0478-54-1118 ファクス：0478-54-3649

<https://www.city.katori.lg.jp/sightseeing/museum/>

<https://www.city.katori.lg.jp/index.html>



連載 新説 伊能測量物語（再開）  
第六話 第四次測量始まる

渡辺 一郎

東海道、北陸道の波打ち際を測る

東海道沿いの海岸浪打際を測る 享和三年（1803）三月二〇日、御前崎を出発、海岸浪打際を横須賀領に向かう。諸準備は、忠敬が所持する老中発行の御証文の写を添え、宿泊予定を示す数日分ごとの先触れで依頼した。

村境の海岸には、長さ三間（5.4m）ほどの竹の先に白紙一・二枚結びつけた棹（梵天）を、波打ち際から一五間（27m）から二〇間（36m）くらい岡側に寄った場所に、目標として立てて置くよう指示する。荷物は海岸でも、街道でも都合良い場所で村々の順送りを希望する。

器具運搬と測量手伝い人足は、責任者をつけて海岸で交代するようにして欲しい。また、河川では川尻の波打ち際を渡れるよう船・人の用意を求め、村々は忠実に実行した。横須賀領に近づく、領境に普請奉行名倉太左衛門が足輕を従えて出迎えた。宿舎の成行村名主宅には、横須賀代官松本弥助が挨拶に出る。横須賀町（家数六五〇）では町奉行長谷川浅右衛門が挨拶に出たので、浅草厩局への書状送達を依頼した。このようにして御前崎から浜名湖へと遠州灘の海岸線に梵天を立て、間縄または鉄鎖を張って測られた。

沿道諸役人の丁寧な応対 享和三年四月一六

日朝六つ、西浦村（温泉）を出立した。「手分け測量、両手とも海岸に岩石が多く長縄を用い、また船を使って測る」と作業困難な模様を記している。半島部の地勢は厳しく、測量予定地域の後半を測る先手と、前半を測る後手に分けたが、両方とも岩石が多く、岩の上に延々と長縄を張ったり、場所によつては船を出してもらつて縄を引いた。

西浦村（千七百五十三石）、西幡豆村（八千五百三十石）は大きな村で、領主の陣屋は海から一里くらい内陸だったが、海岸に家臣の成瀬丹藏が挨拶に出て、村人たちを指図したから全く問題はなかった。

お隣の宮崎村は、いま吉良町というが、上総小滝の領主・松平弾正忠の領分だった。二里ほど北にある陣屋から、代官・判治英藏が槍を立て、供を従えて海岸へ挨拶に出た。判治代官は、宿舎到着後、宿舎にも挨拶に出る。さらに夜の天測場にも顔を出した。そのあと領分の村々を測量中、伊能隊に付いて廻り、生田村の汐よけ堤では、昼食の用意まで面倒をみた。

領境での引き継ぎ 四月一九日大浜湊（碧南）発。松江、高浜、小垣江村を経て元刈谷村に入る。村境に刈谷領の代官・山田文左衛門が村役人と人足多数を従えて出迎える。先頭の忠敬に近寄り、

代官「これはこれは伊能様。お役目ご苦労様です。こちらから元刈谷村で、刈谷領でございます。領主・土井伊予守の代官山田文左衛門です。何なりと御用の向きを承ります」

忠敬、手を上げて作業の一時中断を命じる。一同休息。

代官「引きつれました者どもは、測量手伝いと荷物運搬の人足ですが、ここで継ぎ替えますので、ご指示ください」「まずは、そちらへ」と床机を勧める。

忠敬「忝い。お役目ご苦労様です」「郡蔵。継ぎ換えを」

郡蔵「かしこまりました」

内弟子筆頭の平山郡蔵は村役人に向かって、「御用でいただいている荷物運搬は、人足五人、馬三匹、ただし馬一匹は人足二人に振り替えるから、人足は七人、それから長持ち運搬に四人計十一人です。隣村から馳走で三人ばかり付けてもらっているが、よろしいかな」村役人「どうぞ、どうぞ、気になさらないでお使いください」

郡蔵「荷物持ちは、隊列の後方に続いている。これからいつて、交代しよう」

荷物掛村役人「かしこまりました」「みんな、それーッ」

郡蔵と荷物掛の役人・人足は一斉に隊列の後方へ。

忠敬「荷物の引継ぎは、都合により、海岸の測量現場でも、街道上の便利な場所でも構いません」

代官「かしこまりました。途中で荷物を明けることはありませんか」

忠敬「ありません。宿では必ず開きますが。運搬方法はお任せします」

代官「作業応援の交代をお願いします」

忠敬「これは熟練がいるので、気の利いた者。できたら領内を通して、お願いしたい」

代官「承知しました。そのように用意しており



ます」

忠敬「慶助、村役人衆と相談して測量応援の手伝いの人選を」内弟子尾形慶助は村役人と相談しながら休息している作業隊員の交代を進めてゆく。引継ぎが終わると、大浜村の役人、人足にお礼を述べ、お引取りを願う。大浜の村役人は忠敬に挨拶して、人足をまとめて引き上げる。

測量日記には「領境に出る」と簡単に書いてあるが、継ぎ替えは、なかなか大変な作業である。どんな人間を何人用意すればよいか、事前に測量の済んだ地域へ問い合わせて準備をする。そして当日は、確実に出発したことを知らせる「お発ち見立て」の見張り番を、前泊地に配置して出発を急報させ、進行ルート上にも複数の見張りを置いて、刻々状況を把握していないと、多数の人足をつれて、領分境でうまく合流することなどではしなない。

刈谷城下の宿舎は、本町の医師杉浦義庵宅だった。これも深い配慮である。伊能隊が宿泊すると決まったとき、大抵のところでは医師を村に待機させた。高齢の忠敬に、もし何かあったら困るからである。医師の家に宿泊できたのは好都合だった。宿舎に町奉行三宅藤右衛門と山田代官が揃って挨拶出る。

「お疲れさまでした」「何なりと他に御用があればお申しつけください」

忠敬「良くやっていただいているので、他には何もありません。お世話になります」と会釈を返す。

町方は町奉行の管轄だから、代官と並んで挨拶したのである。

先手と後手 昔の旅は早立ち早着きというが、

伊能隊の測量旅行では、徹底して励行された。朝は夜明けと共に作業を始め、遅くとも昼過ぎには宿に入って、当日のデータ整理と明日の段取りを打ち合わせ、夕飯後晴れていれば天体観測をおこなった。

第四次測量では、先手は平山郡蔵、尾形慶助、伊能秀蔵、下僕・七兵衛の四人、後手は忠敬と小野良助、津村大兄、下僕・久兵衛の四人。当日の予定地域の後半を担当する先手は、夜明け前に朝飯を済ませて出発し、後手の部分を測量しないで通過し、夜明けに自分たちの受け持ち場所について作業を始める。後手は夜明けに、宿舎近くにある昨日の打ち止め杭から作業を始める。高齢の忠敬は後手を率いることが多かった。

伊能隊の見送り 翌朝の出立を町奉行が見送ったと記録にある。先手は夜明け一刻前に提灯をつけて出発、後手は夜明けとともに出発した。町奉行一人だけ見送るなどということは考えられない。槍を立て、同心、若党、草履取を従え、町役人をとめない、夜明け前の先手の出発と、一刻くらい後の忠敬本隊出発まで、宿舎で待ったろう。

藩の現場責任者として、「苦労様です」「御気をつけて」をいう為の大変な作業である。まさに日本的な儀礼であるが、責任者がこれだけ丁寧な気を使ったことが、伊能隊への作業協力をスムーズならしめたと思う。

尾張藩の扱い 四月二〇日。尾張領に入り、緒川、石浜、生路、藤江、有脇村と測り亀崎村に午後到着する。御三家・尾張徳川領の初日

だったが、村々は海辺に茶処を設けて茶を出した。藤江村では昼飯を用意し茶菓子も出したという。

これらの用意は、尾張藩の鳴海代官酒井七左衛門組下の同心（尾張藩の同心は江戸の同心と違って騎乗もできる身分）富田藤四郎という者が出張って指図をした。四月二二日 知多半島大井村に着く。ここまでは鳴海代官の支配地なので、亀崎に出た富田同心が先回りして、諸事をとり仕切った。

四月二四日 師崎湊着。同じ尾張領であるが、横須賀代官の管轄なので、代官所から手附の吉田藤蔵、鳥居友八の両名が前日から詰めて指図をした。尾張領では、藩の役人は表には出ないが、行く先々に先行して、必要な指示を与えている。藩ごとにやり方は異なるが、協力体制は同じであった。

五月五日 熱田宿に到着。東海道は熱田宿から船で桑名に渡る。熱田神宮領の熱田の繁盛に忠敬は目を奪われた。神領四千三百七十八石、無年貢、家数二千五百五十六軒、湊の長さ五百十間、渡海場七十間と日記に記す。宿舎に尾張藩から使者として、町方吟味役西村源兵衛が特で挨拶に出る。これは公用の幕府役人への定例の使者だった。

五月六日 熱田を出て名古屋城下に向かう。この間の測量は量程車を使った。量程車とは引いて歩けば動輪の回転数により距離が読める距離測定器具である。御三家の城下に、間縄を張るのを遠慮したのである。

岐阜は交通の要衝 五月一五日 大垣城下。養老の滝を見学、関が原を経て北陸に向かう。



岐阜は交通の要衝で、西国測量を含めると七回通っている。第七次測量の帰路には小牧山の古戦場に態々測線を伸ばし、第八次の帰路では西国観音札所の谷汲山に詣っている。

＊

以上は、個人の受託作業であつた第四次測量の待遇である。第五次以降の幕府事業になつてからは、さらに強力な援助がなされている。これだけのバックがあつて伊能測量は完成したのである。

## 北陸へ、加賀領での測量問答

三国湊逗留 第四次測量の途上、享和三（1803）年六月一四日、石橋村（福井市）に宿泊した一行は海岸沿いを測つて一五日昼前に三国湊に到着。宿は今町の布目屋であつた。翌日は福井城下に向かつて測りはじめる。船着場まで湊の取締役本篠小助、笠松勘右衛門が見送つた。

一六日は天菅生村泊。一七日福井城下着、松屋嘉右衛門方に宿泊、天測をおこなう。一八日、町役人の見送りを受け、町外から乗船して三国湊に戻り四泊し、二二日に出立した。

一九日は逗留、二〇・二一日は病氣逗留とあり、二〇日には支配の金津奉行から医者を派遣され病状を尋ねられている。三国湊は北前船で繁栄した湊町で花街もあった。一部病人があつたかも知れないが、実態は慰労休暇だったろう。ご馳走はたつて辞退した。村人は領主から指示を受けていたので、困つて、勝手にやつてもらふことにした。

伊能隊の日課は、朝は夜明け前に食事を済ま

せ、夜明けまでに作業現場に進出し、夜明けとともに作業を始める決まりだった。これが守られないと忠敬は一日中機嫌が悪かつたという。そして、宿舎には早く付くが、データ整理作業と、明日以降の打ち合わせがあり、夕食後は晴れていれば天測がある。

天測終了が課業の終わりであるが、日程は残業を前提に組まれているハードな予定だった。休日はないのだろうか。日記をよく見ると、大体十日に一度くらい、逗留という日が出てくる。これが恐らく休日だった。逗留は山の中の村には無くて大体賑やかな市街地である。

手当もあつて隊員はお金を持っていたから、息抜きを与えられたとおもわれる。三国湊は休養地の条件をすべて揃えていた。慰労に違いないと思う。気が引けた隊員が病氣などというから、地元は放つておけなくて、医者を見舞いに出した。様子が分かつて安心した筈である。

加賀領を測る 加賀領では伊能測量に対しあまり協力的でなかったとよくいわれる。しかし正確に言えば、そうではなかった。加賀を測つたのは第四次測量の一回だけで、敦賀から海岸線を北上して、能登半島を一周し、越中を経て越後へ抜けた。忠敬の身分は高橋作左衛門弟子、つまり幕命を受けた師匠・高橋が派遣した手先だったにも拘わらず、幕府勘定奉行から御用先触れが出され、七人の隊員に対し無賃で、旅行と測器運搬に必要な馬三頭、人足五人、長持ちの持ち人足四人が与えられた。加賀藩はこれに応えるとともに、測量手伝いの要員を三〇数名も出し、十村（とむら）という他領の大庄屋にあたる者の手代を派遣して案内と応対にあたら

せている。

つまり幕府から命じられたことには、きちんと対応しているのである。ただ、伊能忠敬は自分の触れで、測量する村々に、家数、人別（人口）の提出を指示した。地理調査であれば当然かも知れないが、地図作成に必須とはいえないであろう。幕命の範囲を超えていたかも知れない。人口、家数は国力の根幹と考えた藩は村々に提出を禁じた。他が差し出しても、大藩・加賀としては応じ難かつたのである。これとともに、村々の境界を明示することも避けている。そのため、何を聞いても答えがないと、測量隊員が憤慨して、評判が悪くなつた。しかし、忠敬が幕臣となり幕府直轄事業となつた第五次測量でも、御三家の一つである紀州藩は、家数、人別を答えるな、と指導しているから加賀藩の対応は無理もなかつたと思う。

そういうわけで、加賀領の伊能大図には書き込みが少ない。宮腰村は現在の金石であるが、ここから一直線に金沢に伸びる測線の両脇には地名がない。異様であるが、「ここはどこか」「〇〇村です」「何処まで〇〇村か」「分かります」「分らないことはないだろう」「私等是他村のものです」などという問答をしていては、「やめておけ」となつたのかも知れない。

加賀領は一度しか測られていないので、日本東半分を測量後提出された伊能大図（自江戸歴尾州赴北国到奥州沿海図第十三という難しい名前がついている）とアメリカ議会図書館に残っている最終版大図模写図も殆ど同じである。

加賀藩の態度は、幕府勘定所の役人が不用意にもらした「伊能は公儀に召抱えられた者ではない



から、重い扱いの必要は無い」という言葉が原因かも知れない。

そのため、次のような馬鹿ばかしい問答がおこなわれた。

享和三年七月五日、昨日は郡境まで伊能隊が来たというので、手代二人と案内の村役人四人に、人足一五人が郡境まで出迎える。朝六つごろ、弟子たち四人（平山郡蔵を長とする先手組）が郡境へやって来た。挨拶して「これより河北郡です」と伝え、手代、村役人が手分けして、弟子たちに付き添って出かけたところに、忠敬がやって来る。手代らがていねいに挨拶する。忠敬「ご苦労です」

手代「これより河北郡です」

と伝えて作業に付き添う。忠敬班の隊員が、郡境から金くさり（測量用の鉄鎖）を引こうとしたので、

手代「お見受けするところ、金くさりのようなものをお引きになるのは、郡境から郡境、村境から村境の丁間（距離）をお調べになるためですか。もし郡中の距離をお測りになるのなら、差し支えがあるので困ります」

忠敬「まったくそういうことではない。このたびは測量御用として巡行しているのであって、測天量地といい、地を測り天を観する作業のみをおこなっている。国郡、村々、領から領の距離を調べているのではない」

手代「測量の儀は公儀からも仰せがあり、御用に差し支えないようにせよ、と重役から申し渡されています。どんなことでもおっしゃる通りにします。領境から領境まで連続でなく、ところどころで測量されるぶんには差し支

えありません」

忠敬「そのとおり」といって、荒屋村まで金くさりを引かれたが、磁石を立てて方位を測ることはしなかった。

「先に立っている案内人はこの村の役人か。先触れで知らせたように村々の境にその村の役人が出ているか」

手代「そうではありません。四郡を通して先立ちしているので、お尋ねのことがあれば私共にお願います。」

石黒信由に出会う 師匠・高橋至時と同門の測量家西村太冲から手伝いの申し出があり、自分から言いにくいので、忠敬から藩に要請してほしいと依頼される。ところが藩は反対し、本人に病氣引き籠もりを申し出させる。地理情報の流出を恐れたものである。代わりに門人の石黒信由が出て、放生津で忠敬と測量談義を交わし、しばらく随従する。しかし測量日記に記載はない。藩に迷惑をかけることを恐れたのであろう。

石黒への影響は大きかった。のちに、越中の精細な地図をこしらえ、いまも伝えられている。また、石黒の資料を伝存する新湊の高樹文庫には、手書きの伊能小図がありこれは大きな謎である。忘れてはならないのは、忠敬に直接できなかったが、西村が研究史にはたした役割は大変大きいことである。

糸魚川事件 加賀領をじっと我慢してきた忠敬であるが、お隣の譜代の糸魚川藩（二万石）での扱いに腹をたてた。聞き合いの糸魚川町の役人に、糸魚川の川口に船をだして縄を張りたいと申し出たのに対し、大河で危ないから上流の

街道を測って呉れと云い張られた。

ところが現場を見るとたいしたことはない。船を出させて押し渡る。労を惜しんだことが分かったので、後刻、宿に挨拶に出た町役人に伊能測量の意義を説き非協力を叱りつけた。謝ったので許したのだが、最後に藩庁にも伝えておけ、と付けくわえたらしい。

これを聞いた小藩の陣屋侍は驚いて「言う通りにしているのに、怒られて江戸で申し上げる、といわれた」と在府の藩主に申し立てる。藩主から勘定奉行中川飛騨守にクレームが入り、天文方高橋に廻ってきた。

師匠高橋は「大事な事の前の小事。分からない奴が何いってもほっておけ。江戸で申し上げるなどと、権柄づくなくことをいってはいけない」御用状を出して叱責した。忠敬は弁明状を書いて謝る。

第十一代将軍・徳川家斉、東日本図を台覧

第四次測量で東日本の測量を終ったあと、文化元年九月六日、天文方高橋作左衛門弟子、下総国佐原村元百姓で津田山城守浪人・伊能勘解由は、日本東三十三カ国図の大図六九枚、中図三枚、小図一枚、合わせて七三枚を幕府に上呈した。

江戸城の大広間は五百畳敷

忠敬は、内弟子たちを指図して江戸城大広間に東日本の大図、中図、小図を展開した。多分、上段の間の直前を名古屋とし、ここに半円方位盤を据えて忠敬が座り込み、弟子が間縄を引いて、伊豆、江戸、房総、仙台、下北半島、津軽、男鹿、越後、能登、など大図の遠辺の諸図の配置をきめていつ



たのであろう。そして空きスペースに中図、小図を配置したに違いない。

終わって一休みしているところに、若年寄・堀田摂津守が勘定奉行・中川飛騨守、奥祐筆・秋山松之丞らを従えて登場。天文方・高橋景保、吉田勇太郎兩名も従う。伊能等一同平伏。隅の方にかしこまる。

景保「摂津守様。亡父・高橋至時が台命を蒙り、門人・伊能勘解由に完成させました東日本三十三カ国の地図を、仰せのように大広間に展開いたしました。」

堀田「お役目大儀である。伊能勘解由、本当にご苦労であった。よくここまで地図を仕上げてくれた。先月の内見の際にも驚いたが、すべてを日本国の地形に合わせて眺めると、一段と迫力を感じる。中川飛騨守いかがかな」中川「まことにあって、伊能が申すとおり、神武以来の大業でござる。勘解由、その感慨を述べてみよ」

忠敬「恐れ入ります。これまでに四回の測量旅行をおこないましたが、最初の蝦夷地測量では、始めてみたもののどうなることかと、ほんとうに心配いたしました。」

第二回目的の本州東海岸測量からは御勘定奉行様のお先触れをいただきましたので、地元の方々から手厚いご援助を受けて順調に測量が進みました。

第三回の羽越測量、第四回の東海道・北陸道の沿岸測量では、多額のお手当てと、多数の無料の測量用人馬を賜りましたので、余裕をもって作業することができました」

「ひとえに、お上の御威光によるもので有

難き次第です。道筋の諸藩のお役人、村方や町方にも大変お世話になり、感謝致しております。これに控えます平山郡蔵以下の面々もよく頑張りました」

堀田「まことにのう。大儀であった。ついては、これから上様がご覧になることになつてゐる。間もなく御出座になる。地図の説明は天文方・高橋景保、そちが勤めよ。若年につき（景保はこのとき一九歳）、同じく天文方・吉田勇太郎、そちに指し添えを命じる。景保を補佐して滞りなく説明役を相勤めるよう」

景保、吉田「かしこまりました」

堀田「勘解由と郡蔵は、隅の方に控えておれ。ほかの者は外で控えているように」

忠敬「有難き仕合せに存じます」

若い第十一代將軍・徳川家斉は、老中首座・戸田采女正以下の老中、若年寄衆を従えて登場する。

堀田「これに広げましたのは、天文方に命じて制作いたしました日本東半分の沿海地図でございます。日本東三十三カ国の精細な絵図であります。これまで幕府では諸藩に命じて慶長、元禄、正保期の3回、国絵図を調製致しましたが、こたびの絵図は、あれなる伊能勘解由と申す測量師がすべて直接間縄を引き、また遠山の方位を測り、天文観測も併用して制作致しました。確かな出来栄と存じます。上様の御高覧を願ひ上げ奉ります。」

將軍は伊能の方を、チラットみてから家斉「相わかった」と大図の周囲を回りはじめ

る。

景保、勇太郎、將軍に近づいて

「天文方・高橋景保にござります。こたびの東日本地図は分間を3万6千分の1とした大図六九枚と分間21万6千分の1の中図三枚、それから43万2千分の1の小図一枚でございます」

家斉「ふうーん」と感にたえぬ趣で、大図を眺め込む。

景保「朱の線が測量いたしました測線で、東日本海岸線と主要街道を網羅しております。測線の近くに地名を記し、地名の上にはその場所の領主の名を記します。宿場には○印をつけます。国、郡の境界はその旨を記載します。御料については御料と明記しました。国、郡の境界はその旨を記載します。御料については御料と明記しました」

吉田「測線沿いの風景は、家並み、田畑、山景、立木、並木などを記し、社寺も描きます。諸侯の城下はお城を美しく書き加えました」

家斉「美しい。大変見事だ。居ながらにして日本国を一望できるようだな。采女。そちの居城はどのように描かれているかな」

采女「大垣城。ここにございます」（將軍、采女に近づく）

家斉「オ——あつたあつた。石垣や櫓が丁寧に描かれているぞ」

采女「恐れ入ります」第一回目的の蝦夷地測量図を内見いたしました際、伊能なる者の地図がが他の者の絵図と異なり、実情に即しているやに感じ、楽翁殿（松平定信、前に將軍補佐役だった）の御意見も聞いて、海防の要地の伊



豆、房総を含めた東海岸の地図をまとめさせましたが、これまた、なかなかの出来でした。よって東日本全域の地図づくりを命じましたが、これほど見事な仕上がりになるとは思いませんでした」

家斉「まこと、その通りだ」

景保「上様。こちらが中図でございます。朱の測線、地名、宿場の○印は大図と同じですが、そのほかは、地図合印で記しました。城下は□、国境は太い赤線、郡の境は朱の●です。そして経度、緯度を入れました」

家斉「富士山や筑波山に集中する赤線は何を表すのか？」

景保「遠山の方位を測った見通し線でございます。地上を幾ら正確に測っても、長い距離になると誤差が積もります。とどこころで、どこからでも見える遠い山の方位を測って測量下図の上に描かれた方位と突き合せて修正をおこないました。富士山を例にしますと、約二百箇所から方位を測り地図を補正しました。中図・小図に書き込んだ方位線はその一部でございます」「方位線は完成した地図には要らないものですが、正確さを印象づけ、美観を添えるため書き加えました」

堀田「八代將軍吉宗公が国絵図に描かれた富士山や筑波山の位置に不審を感じ、実測させるところ、まったく実態と合わなかったそうです。そこで絵図方に命じて各地で遠山を測らせ、国絵図を補正したといわれています。この故事を伊能は知っており、忠実に実行したようです」

家斉「(動きながら) 相わかった。この☆印は何

か」

堀田「天文観測をおこなって、地上の位置を確定した場所と聞いております」

家斉「(感心しながら) なかなか大変な物を作ってくれたな。これなら、オランダ国の地図と較べてもそう引けはとるまい」「ところで

采女正、西国はどうする？」采女「作らせたいと存じます。あれなる伊能を与力格に取り立て、天文方の同心を配属し、西国諸侯に応援を命じれば、約三年くらいで全日本沿海図ができ上がる見込みとのことです」

家斉「そうか。よきに計らえ」

采女「お許しをいただき、有難き仕合せに存じます」

＊

天文方の役宅 お目付から高橋景保にあてた書状を、お目付が浅草蔵前の天文屋敷内・高橋の役宅に持参する。高橋は受領書を渡し中を開く。

隣に補佐役の間重富が座っていた。内容は「伊能勘解由を伴い、九月一〇日、四つ半に登城せよ」との差紙であった。高橋は間と相談してすぐに書状を認め、従者をよび、「この書状を勘解由殿に至急届けて、すぐこちらにくるよう伝えてくれ」と命じる。

＊

隠宅で文面を読んだ忠敬、

「すぐに伺う。先に帰って景保殿に知らせておくれ」「かしこまりました」従者は駆け戻る。忠敬「お栄、天文屋敷に向かう。着替えた。急ぐから船を用意してくれ」

お栄は下僕を船宿に走らせ、着物を用意。忠

敬は着替えをはじめ。終わった忠敬は家の前から船に乗り込む。

「天文屋敷まで急いでくれ」

「へい、かしこまりました」

大川(隅田川)を船で蔵前の天文方に急ぐ。

＊

天文方の役宅で忠敬は高橋景保と対面。間も同席する。

忠敬「お呼び出しをいただいて駆けつけました」

目付の呼び出し状を示しながら、

景保「堀田摂津守様が御用があるそうです。この間から間氏と三人で相談していた西国測量のことだろう。良い知らせだと思う」

間「伊能殿、おめでとう」

忠敬「まだ何も伺っていませんよ」

景保「私も同道する」

忠敬「着用はいかがいたしますか」

景保「麻袴でよい。ここで落ち合って登城しよう」

＊

江戸城内、お目付の詰め所

景保「天文方・高橋景保です。お差紙をいただいて登城しました」

お目付「堀田摂津守様がお会いくださいます。焼火の間に御案内します」

お目付が先導して案内し、忠敬と景保が江戸城「焼火の間」で待っている。徒目付け入室。

徒目付「摂津守様がお出ましです」

堀田摂津守、目付とともに登場。兩人平伏。

堀田「兩人、面を上げなさい。これより申し渡す」「下総国佐原村 津田山城守知行所 元

百姓 浪人 伊能勘解由」



「其の方儀、これまで国々海辺測量御用並びに地  
図骨折り相勤め候、以後も右筋御用仰せ付けられ  
候に付き拾人扶持下し置かれ、小普請組仰せ付け  
らる」

辞令を勘解由に見せたのち、本人に手渡す。  
堀田「くだけた調子で」よかつたな勘解由。お  
めでとう。これからも精出すように。天文

方に配属されることになっているが、明日  
小普請支配小笠原若狭守のもとへ出頭して  
指示を受けよ。これで少しは仕事やりや  
すくなるだろう」

忠敬「ありがたき幸せに存じます。これま  
での摂津守様の数々の御高配に心から御礼  
を申しあげます」

堀田「所属は佐藤修理の組下である。諸事、修  
理の指図を受けるように」「そして、天文方へ  
の出仕を命じられることになっている」

忠敬「ハハ」

堀田「以上だ」

兩人平伏。摂津守、目付退座。兩人下城。

\*

翌日、小普請組頭 佐藤修理大夫宅に向う。  
組世話役2名控える。

忠敬「このたび小普請方を拝命し、組下に仰せ  
つけられました伊能勘解由にございます。お  
引き廻しの程をお願い申し上げます」

修理「お役目大儀です」「お聞きおよびでしょう  
が、あなたは私の組下ですが、天文方に出向  
して、高橋景保殿の手付け手伝を勤めるよう  
命じられました。与力格の待遇です。このた  
び、素晴らしい業績を上げられましたが、今  
後も、高橋殿を補佐して御出精ください」

修理「こちらは世話役の岡村半平殿です。仕事  
の指図は高橋殿から受けていただきますが、  
旅行の出発、帰着など諸届けは世話役を通じ  
て、こちらに提出してください。幕臣ですか  
ら公儀の忌服、祝儀などの連絡を世話役から  
致します」

お守り下さい。また、逢対日には私も出席し  
ますが、小普請支配・小笠原若狭守殿宅まで  
お越しを願います」

修理「早速ですが、身上書、親類書、屋敷図を  
なるべく早く御提出ください」

「役目のお話は以上です。茶でも飲みながら、  
地図づくりのお話を伺いたいものです」

忠敬「かしこまりました。御丁寧なお指図恐れ  
入ります」「蝦夷地は広大無辺な天地でした。  
行けども行けども人家に至らず、途方に暮れ  
たこともあります。また、別海ではニシベツ  
川を埋めて鮭が産卵のため遡上する勢いは  
まことに壮观でした。人々は天の恵みを捕獲  
して塩蔵し、暮らしの糧としています」

「また二回目の測量の南部領では、強風で笠  
や駕籠を吹き飛ばされ、一寸先が見えなくな  
り閉口したことがありました」

「しかしながら、お上のお計らいで村々の手  
厚い御協力を賜って、なんとかお役目を果た  
すことができ、お褒めもいただきまして、あ  
りがたい幸せです」

忠敬「これはこれは、長居をいたしました。ま  
た御礼にまかり出ますが、ひとまず失礼いた  
します」

修理「お役目大儀でした」  
忠敬は佐藤修理宅を引き上げ、高橋役所に向

かう。幕臣となったメリットは大きいが、儀  
礼的な手続きは煩瑣となった。

\*

天文方・高橋役所で高橋景保と正式に対面。  
間重富、下役一同も居並ぶ。

間「推歩先生、こちらへどうぞ」

忠敬「先程、佐藤修理大夫殿から天文方手付け  
手伝いを命じる旨、御下知を受けました。あ  
らためて、お引き回しの程をお願い申し上げ  
ます」

景保「お目出とうございます。こちらこそよろ  
しく願います。我が家は父の代から大変  
お世話になっております。これから益々大変  
ですが、御成功を祈ります」

景保「仕事はこれまでと変わりませんが、同心  
の下役も配属しますので、仕事は楽になるで  
しょう」

忠敬「ありがたうございます」「ではひとまず、  
引き上げましてお礼参りの仕度をいたしま  
す。お礼は堀田摂津守様、佐原村領主の津田  
山城守様、小普請支配の小笠原若狭守様、小  
普請組頭の佐藤修理大夫様、天文方 吉田勇  
太郎様、奥祐筆組頭 秋山松之丞様でよろし  
いでしょうか」

景保「そんなところでしょう」「若党、挟み箱、  
草履取りなど与力の格式による供が要りま  
すね。槍は立てなくてもいいでしょう」

間「口入屋で世話してくれそうですよ」

忠敬「ではまた。失礼します」

\*

深川黒江町の隠宅へ忠敬帰宅。お栄出迎え。  
着替えを手伝い、忠敬座る。



お栄「この2日間、ほんとうにお疲れ様でした。

天文方手付け手伝いで四〇俵。お前さん、立派な幕府のお役人様だね。与力格というじゃない。槍を立てることも出来るし、乗馬もできるとか」

忠敬「そんなことを、何処から聞いた？」

お栄「留守中に間さんが見えましたよ。祝宴の打ち合わせに」

忠敬「そうかい。御家人という、上様にお目通りもできない小役人だよ。四〇俵くらいもらっても、佐原の伊能屋の商いに比べれば、話にもならないが、測量に出かけるときは便利だな」「町方や村方の人たちが丁寧に扱ってくれるから」

忠敬「槍を立てたり、馬に乗る気はないよ」

お栄「(いたづらっぽく)幕臣・伊能勘解由、騎乗して槍を立て、同心衆を従えた颯爽たる旅立ちを見たいと思っていたのに」

忠敬「馬鹿なこと言うもんじゃない」「形だけ作っても仕事が出来なければ話にならない」

幕府測量隊として西国へ

箱根関所 晴れて幕臣に取り立てられた第五次測量(1805)では老中より箱根関所あてに伊能隊が通行するのでよろしく。また、諸国の関所に通知するようにとの指示が出されていた。(箱根関所日記)小田原藩では浦方支配役平田領蔵が同手代松熊和太蔵を伴い領界に出迎え、箱根宿を経て三島領境まで案内した。

畑宿で昼食。関所に着くと木戸口に責任者の

七井幹右衛門が定番人を従えて出迎える。

平田「藩命により伊能勘解由様御一行を御案内しました」

七井「これはこれは伊能様、関所番の七井です。お役目ご苦労様です。御老中よりの指示を伺っています。どうぞお通りください」

忠敬「忝い。関所前を測ります。また、測量御用のため、見晴らしのよいこの場所から諸方の方位を測りたいがよろしいかな」

七井「結構です。どうぞ、どうぞ。旅人溜りをお使いください」

忠敬「旅人の流れを少し変えていただければ、眺めていただいても構いません」

伊能隊は二隊に別れ、望遠鏡を据えつけて遠山の方位を測る。あと箱根権現門前まで測り参詣して箱根宿泊。根府川関所とは雲泥の差だった。

街道では大名・公卿のお通りに困惑 沼津以遠の東海道を測ったのは第五次測量が初めてだった。幕府直轄の測量隊だから、宿舎は原則として本陣に泊まる。ただ東海道は天下の大道色々測量の障害が多かった。文化二年三月二日は東海道・原の本陣だった。三日、四日は雨、逗留となる。四日の午前である。宿役人が顔を出した。

宿役人「伊能様、雨で御逗留のところ、誠に申し上げにくいのですが、五日に本陣で三宝院門跡が御休憩になります。ついては今日、休み所を下見の役人が来るそうです」

「まことに恐れいりますが、宿替えをお願いできないでしょうか」

忠敬「この雨中を宿替えか。しかも二軒に分

宿？」

宿役人「御門跡の御機嫌を損ずると、あとあと面倒です。お助け下さるようお願いします」

忠敬「——？」「仕方がないかな」宿役人「ありがとうございます」

六日由比泊。到着は八つ後(二時過ぎ)だったが、到着後勅使・千種前中納言、広橋前大納言が通行。ニアミスだった。七日由比宿を六つ半(七時頃)に出立。その直前に院使・平松宰相が通行した。宿場役人が調整したのか、偶然かは分からないが、何れにしても、きわどい話だった。

この日は江尻(清水)泊。八日は紀州公が通行と聞いて逗留する。大名行列が通つては測れない。仕方がないので、清水湊から三保を測る。九日江尻から始めて府中(静岡)まで測る。途中安部川で細川侯に出会う。これもニアミスだった。鞠子泊。

熱田宿本陣で宿替え 四月五日、池鯉鮒宿発、熱田に向かう。熱田の手前、鳴海付近では先手、後手のそれぞれに対し、同心が案内に立ち、本隊には鳴海代官の吟味方が袴で挨拶に出た。ところが、熱田宿本陣に着いたら、天測場が全く無い宿だった。忠敬は即刻、宿替えを要求する。いつも泊触れで伝えてあるのに、こういうことも起こっている。

これが田舎だったたら大問題である。測量日記には簡単に記しているから、さすがは熱田宿、宿屋はいくらでもあつて、替わるのは難しくなかったらしい。

あと、尾州藩士が天文談義に來たとか、熱田の町方吟味役が使者に出たとあるから、悶着は





分間延絵図にみる忠敬先生も驚いた熱田（宮）宿の繁栄

なかった。宿舎に天測のための条件が整わなければ、御三家のお膝元でも忠敬は宿替えを求めたということである。

**桑名では往来を板囲いして天測場**に 四月八日、尾張の鳥ヶ池新田から、田代新田を経て桑名城下に入り二泊する。藩の六人役と代官が挨拶に出た。天文方への御用状を依頼する。初日は雨の中を鰻川の川幅を測り、別手は田代新田の渡しを測ったが、宿舎での天測は雨のためできなかった。

二日目には成功。連泊なので象限儀、子午線儀は到着と同時に準備し、雨覆いの桐油紙をかけておいた。また、宿の裏では場所がとれず、往来に板囲いして天測場を作る。城下町ながら狭い町並みだった。十一日四日市、一二日神戸城下、一三日上野宿（三泊）、一六日津城下と、街道と海岸を手分けしながら測量が進む。

**四日市宿から心得触れ** 四日市に泊まったのは一泊だけだったが、宿場では準備のため、八日に鳥ヶ池新田まで開合いに出た。応対は下役・市野金助だったらしい。役割別の測量手伝い三〇人ばかりの準備を依頼し、

先々の宿へも連絡するように命じた。

毎晩入れ替わり立ち代り、次々に現れる開合いの村役人たちに、同じことを説明するのが煩わしかったのであろう。下役の一存でも四日市宿では、直接いわれたことなので、伊能隊の指示と受け取った。

「廻状を以ってお知らせします。当宿より御用伺いに出たところ、次のような準備を心得触れとして出すよう指示されたので、大坂までの浦々村々に御順達ください」という「心得触れ」を流した。

心得触れは、刻付け（至急報）で次々に順送りされ、伊能隊よりも遥かに早く村々に連絡されていた。控えが現在でも浜島町、尾鷲市に保存されている。この触れは村々にとっては、貴重な情報源だったと思う。

幕府の触れは遥か以前に届いていた。しかし、それだけでは実際にどう準備していいか、わからないのである。だから測量済みの地域へ開合いにゆき、伊能隊を訪問して情報収集をしている。

伊能隊発の準備指令があれば、その通り用意すればいいのだから、分かりやすかった。しかし、「心得触れ」が流れていることを忠敬は全く知らなかった。（尾鷲町大庄屋土井家文書）そして、測量手伝いの人数は「お証文」の数量を超えていた。ここがあとで大問題となる。



伊能忠敬 周辺の人⑥

## 桑原隆朝純

前田幸子

純

はじめに

桑原隆朝純は伊能忠敬の全国測量にあたり、忠敬と幕閣との間に立つて助言や連絡調整をおこなった二代目桑原隆朝のことである。忠敬の三番目の妻「お信」の父という関係から忠敬の事業を支援した「伊能測量のキーマン」であるとも言われているが、これまで資料がなく、実像が明らかではなかった。大谷亮吉の名著『伊能忠敬』も「桑原氏の履歴詳らかならず」としてこの人物についてほとんど何も述べていない。しかし現在には只野真葛の随筆『むかしばなし』等が刊行され、桑原家の人々についてかなり具体的に知ることができるよう。只野真葛は本名を工藤あや子といい、『赤蝦夷風説考』の著者工藤平助と初代桑原隆朝の長女との間に生まれた女性である。『むかしばなし』は工藤家と母の実家・桑原家の人々を近親者の視点から率直に描いており、桑原氏に関心がある者にとつては大変興味深い読み物となっている。この随筆から桑原氏に関係する部分を抜粋し、該当頁を付して稿末に掲載した。本稿では『むかしばなし』からの引用に代えて、その該当頁の数字を文中に表示した。煩わしいが、稿末の抜粋を参照しながらお読みいただきたい。

## 桑原氏の系譜

桑原氏については『伊達世臣家譜』『伊達世臣家譜続篇』および四代目桑原如弘著『自家記録』等で以下のようにたどることができる。

そもそも桑原氏は武蔵国埼玉郡の忍（おし）城主・阿部豊後守の家臣だった桑原五郎太夫親福を祖とする。親福―常右衛門親斯と続き、その子如璋は仙台藩医となつて桑原隆朝を名乗った。ここから桑原氏の医家としての系譜が始まる。初代隆朝如璋―二代目隆朝純―三代目隆朝如則―四代目隆朝如弘（明治維新）―如宣―如則と六代にわたって続いた。このうち「桑原隆朝」は江戸期の四代、約一〇年間の名跡であるが、伊能忠敬の測量事業に関与した桑原隆朝は、年代的に見て二代目の純であろうと推定されている。以下、伊能忠敬とのかかわりに着目しながら歴代の桑原氏を見ていきたい。

## 初代桑原隆朝如璋（一七〇〇頃―一七七五）

『むかしばなし』によると、初代桑原隆朝如璋は43)「桑原のじじ様は何人の胤なるやしれず」すなわち親の分からない孤児であつたが、橋隆庵（幕府奥医）に養われて医師になったという。このことから桑原氏の血筋は妻のやよ子のほうで、如璋は婿養子であろうと推定されている。44)橋隆庵は仙台侯から藩医として然るべき人物の推薦を頼まれ、如璋を推挙した。如璋は「隆朝」という名前を隆庵から譲られ、元文五年（一七四〇）に藩医となったという。如璋には長女と長男・純（一七四四年生）があるが、如璋が一七四〇年に入夫してまもなく長女が生まれ、一七四四年に純が生まれたとすると話が合う。ただし、如璋は入夫当時すでに四十歳位だった。10) 44) 如璋は仙台藩邸の長屋に住み、参勤交代にも従っていたが、五十代の頃、奉養から番医となり、江戸常駐となった。医師としても優秀だったが、「この人博学にして最も抄書

（抜き書きすること）を好み、其書類五百卷余に及ぶ」といわれ、文筆家でもあつたという。現在、新井白石と佐久間洞巖（仙台藩儒者）の往復書簡をまとめた『新佐手簡』と、息子・純との共著である医学書『唐後方』の二書が存在している。安永四年に七十歳で没した。

## ○桑原やよ子（一七〇〇頃？―一七八〇頃？）

如璋の妻やよ子は『宇津保（うつほ）物語』の研究書『うつほ物語考』の著者として我が国文学史上に名を残す女性である。『宇津保物語』は主人公が漂流して遠くペルシャまで行く気宇壮大な長編物語で、『源氏物語』の成立にも影響を与えたと言われる。11) 当時の著名な国学者村田春海が『うつほ物語考』を読んで称賛したことで、やよ子の名は当時から知られていた。『うつほ物語考』は小冊子ながら、今日でも高い評価を受けている。村田春海の識語に「著者は桑原隆朝の母」とあることから、如璋の晩年か没後に成立したと推定される。



『宇津保物語』 国立公文書館蔵  
波斯国（ペルシャ）で阿修羅と出会う主人公



## 二代目桑原隆朝純（一七四四—一八一〇）

二代目桑原隆朝は純、純明、養純といい、如春とも称した。延享元年、如璋とやよ子の長男として生まれた。忠敬より一歳年長、三番目の妻お信の父親であると推定されている。

9) 10) 純は姉と二人兄弟（妹は早世）で病弱だった。両親に毎日大量の手習いと読書を強いられ、姉弟で蜘蛛の巣を眺めるのが唯一の楽しみという厳しい子供時代を過ごした。

## ○義兄・工藤平助

純が十五、六歳の時、姉が『赤蝦夷風説考』で有名な工藤平助に嫁ぎ、純は平助の義理の弟となった。工藤平助（一七三四—一八〇〇）は仙台藩医工藤家の養子で純より十歳年長、多芸多才ぶりを発揮してこの頃からすでに有名であり、三十歳頃には時代の寵児となった。蘭学を青木昆陽に学び、阿蘭陀医学も修め、政治・経済・法律にも詳しくあった。訴訟の達人としても有名だったので、平助の漢学の師だった服部栗斎は万一に備えて工藤家の隣に引越して来たというほどであった。蓄財の才もあり、公事沙汰や賄賂・請託をおこなない、また阿蘭陀通詞・吉雄耕牛と結託して舶来商品の取引を行なうなどして巨利を博したといわれる。医者としては患者が門前市をなす盛況ぶりで、居室には大名から博徒まで千客万来であったという豪放磊落、世話好きで、進歩的・開明的な人柄であった。義弟純の面倒もよくみたようである。『むかしばなし』には5) 平助が熱心に医術を指導し、病弱な純を丹精込めて療治し、流行病にかかった時も昼夜添い寝して快復させたこと、如璋没後、桑原家が困窮した折には経済的援助をしたことが

語られている。しかし純はある時、工藤に内証で謀判（にせはん）をして借金をし、その後も患者宅で平助のことを讒言してまわっていることが露見、平助は妻に「弟の側につくなら離縁する」というて騒ぎになったという。結局、「隆朝は大悪党」で縁続きなのが災難だ、と堪忍して落着いたとある。しかし実は『よしの冊子』当時の風聞書の中で、平助も「工藤平助ほどの姦悪」と評されているのだが、いずれ工藤家と桑原家との間には、純の時代を起点として長く確執が続いたようである。

## ○鬱屈の時代

安永四年、父如璋が死去し、純は三十二歳で家督を継いだ。10) 両親はお金など見たことも触ったこともないという人だったので、蓄財もなかったらしい。父が没した後は暮しも難しくなり、工藤家から内々に世話を受けたという。工藤邸は玄関の間口が二間もある豪邸で、普請開きには堀田正敦も訪れた。一方、9) 「桑原のおじ様は同じ築地に住みながら、庭も家も狭く貧しげで、心の底ではくやしく思っていて、いつもいつもふさいでばかり。内心では人生の内には時流に乗って時めいてみせようと思っていて、実際、そのように言ってもいた」という。工藤平助は並外れた才覚を多方面に開花させ、世間の信頼を得て豪奢な生活を享受していた。そんな義兄に純はひそかに対抗心を燃やしていたと『むかしばなし』はいう。

## ○工桑二名手

純は病弱だったが優秀だった。三十八歳で近習となり、五十歳で藩主斉村公の侍医に昇進した。多病ゆえ藩邸内で興に乗ることを許され、また負



『救瘟袖摺』大槻玄沢序 早稲田大学図書館蔵

担軽減のため江戸常詔となる特恩を受けた。やがて諸大名家にも「俺が出入りしない大名はない」と言いきるほどの名医となった。大槻玄沢は、「工藤平助と桑原純は医術において優劣つけがたく、大いに名声を振るい『工桑二名手』と称された。実に我が藩の光輝であった」と『救瘟袖摺』の序文で述べている。

## ○大工町の先生

桑原純は築地の小さな家に住んでいたが、名医の評判をとって医業がはやり、四十代前半で日本橋に進出したらしい。大槻玄沢『官途要録』の天明末期の藩医名簿に「本道（内科）常詔 日本橋大工町 桑原隆朝」とある。日本橋は江戸の中心



で賑わっていたうえ、薬種問屋が集中していた界限も近く、医業には格好の場所だった。忠敬と隆朝との最初の出会いがここかどうかは確認できない。しかし忠敬が出府以前から「大工町の先生」の患者だったことは、数通の書簡から読み取ることができる。次の書簡はその中の一通である。

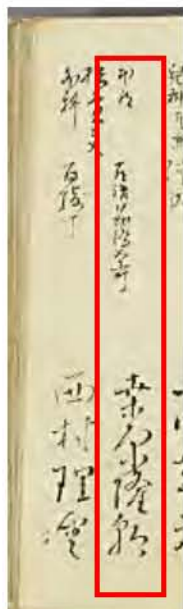
一四七【伊能忠敬書状】千葉県史料・近世篇

(江戸店 景敬宛) (不詳) 年八月二十日

「(前略)桑原大先生の御療治は古今未曾有、和漢の医書にも無いものです。二度と受けられないほどのものですから、よくお考えになり、先生を信頼して、日数かまわずお通いなさい。あなたの体は私から見ても骨組み甚だ宜しからず、先生もお直しにお困りと思います。(中略)店へ往診していただいた上に、またまた毎晩でも一晩おきでも、気軽に伺って大先生の御伝授も受け、その上養治様の御按摩もお願ひしなくては、八、九分通にも直すことは出来ません。(後略)」

この書簡によると、「大工町の桑原先生」は「骨格の矯正や按摩」など外科的な療治を「和漢の医書にもない」手法で行っている。桑原隆朝は内科医だったので、やや違和感を感じるが、仙台藩士で桑原という医家が一軒あったので『伊達世

『官途要録』早稲田大学図書館蔵



臣家譜』、別の桑原先生だった可能性もある。あるいは隆朝純が、伝家の治療法(桑原家には相伝の医術があった)に阿蘭陀流などを取り入れて独自の治療法を開発したのであろうか。もし、そうだとすると、このような才能が10「才人」と評された理由なのであろう。

### ○時代の転換

桑原純が四十代に入った頃、工藤平助は『赤蝦夷風説考』を著して老中田沼意次に献上した。この献策により蝦夷地の調査が行われ、大規模な蝦夷地開発計画が立案されたが、田沼の失脚とともに中止となり、蝦夷奉行になるという平助の夢は断たれた。その頃、工藤家の築地の邸宅が火災に遭って全焼、やがて平助自身も病気を患うに至り、工藤家は豪勢な暮らしからしだいに生活に困窮するようになった。世の中も田沼時代のバブル景気から松平定信の緊縮財政へと一変した。『むかしはなし』は、59築地で火事の類焼をうけた時分までは田沼世界(田沼の時代)だったので人も陽気で金廻りも良かった。60)とかくするうち白川様御世(松平定信の時代)に変わって金廻りが悪くなり、時代が移っていった、と嘆いている。寛政十二年十二月十日、田沼時代の寵児・工藤平助は貧窮のうちに六十七歳で没した。この時、忠敬は深川の隠宅で内妻お栄らと第一次(蝦夷地)測量の地図を仕立てている最中だった。平助の死から十日後、地図は完成して堀田摂津守へ献上された。

### ○測量事業への支援

忠敬の蝦夷地測量に対する桑原隆朝の支援については、第一次測量の幕府への交渉記録『蝦夷于

役志 啓行策略』に寛政十二年三月三十一日と四月二十八日の二回、第二次測量の『沿岸日記 啓行策略』に寛政十三年正月五日、二月十五日の二回の記録があり、それぞれ文書の添削や助言を受けたことが記されている。交渉記録を読むと、桑原隆朝は幕閣の意向をきわめて正確に把握しているのみならず、「測器持運人足の件は浅草先生にも申し上げておきなさい」とか「第二次測量については、関東とクナシリ、エトロフまでの希望を書面にしておくように」と言う具合に、きわめて具体的に助言、というより指示している。一方、桑原に対する忠敬の態度は、桑原翁はわざわざ隠宅へも御越し下さり・私をお招きになられ、相談の上、よくご理解なり下されました」と、長年、親子関係にあるとは思えないほど鄭重である。しかも桑原の仲介は忠敬以外の人々にも及んでいる。「先月十三日のお手紙は、二十七日に桑原翁から受け取り、拝見致しました(享和元年七月二日 忠敬宛 高橋至時書簡)」、「桑原によつて御内命をいただきました(文化六年六月二十七日 足立信頭宛 間重富書簡)」と、桑原は内命まで与えていたことが分かる。これらのことからみて、桑原隆朝の測量事業への支援は忠敬との個人的関係に起因するというよりも、堀田正敦の配下として幕府事業へ参与した、すなわち正敦の秘書官的な立場で書類の事前審査や情報伝達を行っていたと考えのが妥当ではないだろうか。そのように考えれば、年始回りや暑気見舞等の儀礼訪問が、堀田摂津守や林大学頭らと全く同時同列に桑原へも行われていた理由が理解できるのではないだろうか。

### ○「桑原隆朝」の住所



前述のように桑原隆朝の住所は日本橋大工町であった。ところが『江戸日記』では、忠敬は大工町と八丁堀亀嶋の二か所の「桑原隆朝」を訪ねていて混乱する。しかし、精読すると大工町は父親・純の居宅で、亀嶋は息子・如則の居宅兼診療所だったことが分かる。すなわち、日記では忠敬が「桑原」へ行く場合と「桑原隆朝」へ行く場合と二通りある。年礼など儀礼的訪問や亀嶋を訪問するときは「桑原隆朝へ行く」であり、それ以外は「桑原へ行く」である。「桑原へ行く」は純の存命中に限られ、純の没後は全て「桑原隆朝へ行く」となっている。このことから「桑原へ行く」は「桑原純」個人を訪ねることを意味し、「桑原隆朝へ行く」は「医家・桑原家」を訪ねることを意味すると理解される。おそらく純は当時すでに開業医を引退していたので「桑原」という表記になったのである。現役で医家・桑原隆朝の看板を背負っていた如則は常に「桑原隆朝」と表記されている。なお、出立や帰着の挨拶には亀嶋に行っている。年礼や寒中見舞も大工町の純ではなく亀嶋の「桑原隆朝」が対象だったようである。

ちなみに、大工町の家は純が没した後は如則が使用し、文政九年になって大工町から木挽町二丁目に転居した。亀嶋の家については後述する。

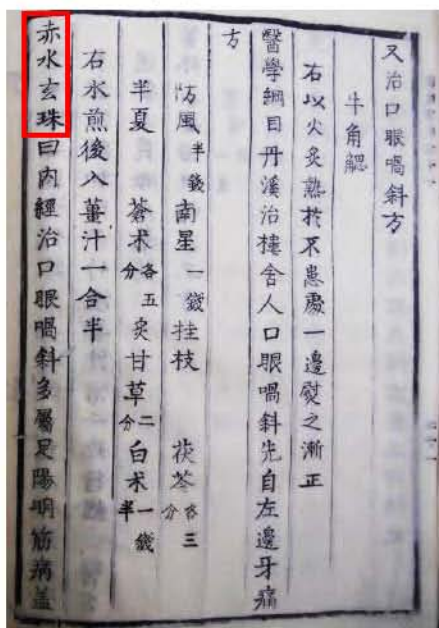
### ○著書『唐後方』と長久保赤水

桑原純の著作として現在唯一知られる『唐後方』七十八巻が国立公文書館に所蔵されている。巻頭に「仙台医官 桑原隆朝璋輯、男 純続輯、工藤周菴球卿閱」とあり、如璋と純が編集著述し、工藤平助が校閲した漢方医学書である。興味深いのは随所に「赤水玄珠曰：云々」とあり、この書物

が赤水玄珠なる人物の示教をうけて書いたような体裁になっていることである。赤水玄珠は如璋もしくは純の師ということであろう。赤水玄珠とは誰か。いうまでもなく、多くの人が長久保赤水（名は玄珠 一七七一—一八〇二）を想起するであろう。玄珠を名乗った医者はほかにいるが、赤水玄珠となれば、これは長久保赤水である可能性が高いのではないだろうか。赤水は地理学者として著名だが、本職は水戸藩の儒者だった。当時、儒者は医者を兼ねており（儒医）、赤水も隣村の儒医鈴木玄淳に医学を学んだので、赤水が医学を講じていても不思議ではない。赤水の医学関係の資料を捜したが書簡の中に薬の処方を書いたものが少しある程度で、有力な資料は見出せなかった。年齢からみて如璋ではなく純の師とするのが自然だと思うが、詳細は不明である。長久保赤水と仙台藩との関係は注目し値すると思う。

### ○純の家族と晩年

桑原純の家族については明確な記録はない。



『唐後方』  
国立公文書館蔵

『むかしばなし』には純の妻、子の如則のほか、  
14)「養しゅん」という子どもが登場しており、  
16)「養純」が二十五の境で亡くなった、とある。「養しゅん」と「養純」が同一人物だとすると、純の子供が早世した可能性がある。忠敬の三人目の妻「お信」は純の長女であると推定されているが、この随筆には登場していない。純の妻は130)20)「谷田太郎左衛門の女」で、130)不幸な亡くなり方をしたらしい。『自家記録』から、谷田氏も仙台藩士であろうと推定される。

桑原純は文化七年（一八一〇）、六六歳で没した。一歳年下の忠敬が第七次測量で九州滞在中のことであった。世田谷伊能家伝存『伊能忠敬関係文書目録』（二三）に

「4 覚 文化八年十一月二日 一通

船賃・地代・町入用・桑原氏香典・秀蔵支度金等支出明細」

という記録があり、忠敬は文化八年五月に第七次測量から帰府後、香典を持って桑原家にお悔みに行ったようである。文化十三年二月朔日の純の七回忌には饅頭二百個を贈っている。

### 三代目桑原隆朝如則（一七七七一—不詳）

純の嫡子如則は初め季愿、養好と称し、のち叢庵、喜雨廬、久魯翁と号した。幼少期については



不明である。文化四年、三十一歳のとき堀田正敦の蝦夷地出張に随行し、三十三歳で侍医となった。文化七年父の死去に伴い、三十四歳で家督を継いで三代目桑原隆朝となった。四十一歳のとき堀田正敦を治療して賞を受け、五十七歳で御勤番を命じられて藩邸内に移った。六十歳で隠居。その後安政年間までは生存したが没年は不明である。如則は国元（宮城）の玉造郡川度温泉にたたび湯治に出かけ、天保七年、温泉滞在中に親類の谷田作兵衛（仙台藩御小姓頭、母の実家か）以下親類四名の連判で隠居願を提出した。温泉療治の際には十数人で行列を組み、先触を九か所に出して通行している。<sup>41</sup> 桑原氏は如則の時代に最も栄えたようである。桑原家は弘化二年に江戸常詰を免じられて国元に下り、以後は仙台に住んだ。

#### ○如則の活躍と著書

桑原如則は非常に優秀な人物だったようである。三十一歳のとき蝦夷地警備総督・堀田正敦の蝦夷地出張に蝦夷地警固御用医師として随行（従軍）し、四か月後に帰府した。二年後、三十三歳、まだ部屋住のうちに侍医となり、以後順調に昇進を重ねて天保五年の番医師近習医師の一覧表では筆頭となっている。

一方で如則は文筆家でもあり、多くの著作を残している。医学書では『養生説』を著し、桑原家に口授で代々相伝されてきた医学理論を文書にしたほか、工藤平助が著した『救瘟袖曆』を校閲し、工藤家の養子となった次男の名義で刊行した。また『喜雨盧隨筆』十巻、『叢庵雜記』三十巻など多数の随筆類がある。特に七十二歳の時の著作『賤のをたまき』五十五巻は、我が国最初の源氏物語

の全巻口語訳であるといわれる。また『田海録』二十九巻は如弘の『田海録 続編』三十三巻と併せて六十二巻にも及ぶ幕末（弘化から安政年間）の膨大な情報収集録である。南部領一揆の顛末、ロシア王やブリタニア女王の書翰、カピタン報告書、内密啓問録など、藩や幕府の機密情報を含んでいる。これらの文書を、なぜ、どのようにして閲覧・筆写できたのか、仙台藩における桑原氏の地位について考えさせられる著作である。

#### ○亀嶋の屋敷

文化十一年、八丁堀亀嶋に住んでいた桑原如則が新銭座の仙台藩邸内に移ることになり、かねてから八丁堀亀嶋あたりに家を探していた忠敬は、第八次測量帰着後の六月三日、黒江町の隠宅から引越した。地主は長田備後守組与力の藤田六郎左衛門熊太郎で、百五十坪のうち、とりあえず五十坪を借りて地代は月に金一両であった。この屋敷は黒江町の隠宅よりずっと広かった。『大日本沿海輿地全図』の枚数や大図の大きさを考えれば、作成場所はかなり重要な要素である。条件を満たす格好の物件が見つかったのは幸いだった。桑原如則がこの屋敷の借用に便宜を図ってくれたのかどうかは不明である。忠敬は三年十か月をこの屋敷で過ごし、文政元年に永眠した。

文政四年に地図御用が終わり、文政五年に妙薫が亡くなると、如則は忠誨に屋敷の明け渡しを強く求めるようになる。『忠誨日記』には「予、此度伯母死去に付、桑原御屋敷の御思召、早々引き払う様にとの事ゆえ、在所へ引き、折々稽古に罷出候」とある。忠誨が屋敷を退去した翌日には早速、家見（の者）や解家屋が来た。

#### ○如則の家族

『自家記録』によると、如則には妻と男子二人、女子三人があった。嫡子如弘は四代目を継ぎ、次男周庵は後継ぎが絶えた工藤平助家に養子に入って工藤家を継いだ。のち視力を失った。妻「なを」は忠敬の『江戸日記』に毎年虫干しに来る内室として登場する。手狭な藩邸長屋に入りきれない家財道具を亀嶋に残していたのであろう。弘化四年、如則に先立つて六十七歳で病没した。

#### 四代目桑原隆朝如弘（一八〇四―不詳）

桑原如弘は天保十三年、父の隠居により四十歳で隆朝と改名し近習となった。弘化二年には江戸常詰御免となり、両親とともに国元へ下って仙台の<sup>20</sup>「同心町玄貞坂行き当たりより西の方南側」に住んだ。『自家記録』はか多くの著作を残している。如弘は忠誨より二歳年長で忠誨とは兄弟のようにに親しんでおり、『忠誨日記』に頻出する。日記には如弘と秋（周）庵の兄弟が太田村の加瀬佐兵衛家を訪ねるために忠誨と一緒に佐原まで旅をする場面が綴られている。桑原家は加瀬家のみならず、佐原の永沢半十郎家とも親戚であったようだが、詳細は不明である。

#### ○太田村の加瀬佐兵衛家

桑原兄弟が訪ねていった太田村の加瀬佐兵衛家は、忠敬の次女・篠の嫁ぎ先である。篠は子に恵まれず、実家に戻って天明八年に亡くなった。その後<sup>62</sup>工藤あや子の妹つねが太田村の加瀬家に嫁いでいる。同じ家であろう。つねも二十歳代で亡くなったという。すなわち加瀬家は伊能忠敬の女と工藤平助の女が相次いで嫁いだ家である。あ



るいは同じ人物（加瀬修助・稠卿）に嫁いだのかも  
しれない。篠の没後十年以上経過した享和元年（一  
八〇二）七月一七日、第二次測量中の忠敬が太田  
村（現・旭市）の加瀬佐兵衛宅に泊まっている。

加瀬家は中世以来の名門だったが、現在は屋敷  
跡と墓地のみが残っているという。忠敬と隆朝と  
の接点について考えるとき、伊能家、桑原家、工  
藤家がどのような縁戚関係にあったのか非常に興  
味深い。加瀬家と永沢家についても調査を進めた  
い。

#### 五代目桑原如宣（一八三五—不詳）

如弘の嫡子は幼名三五郎、養泉、如宣（如言）と  
称した。三四歳で明治維新を迎え、隆朝を襲名す  
ることなく宮城病院及び宮城集治監の医員となつ  
た。如宣の子は如則と名乗り、宮城医学校卒業後、  
陸軍省に出仕して陸軍三等軍医正となった。『仙  
台人名大辞典』他

#### おわりに

諸資料から歴代の桑原隆朝を追ってみた。只野  
真葛の『むかしばなし』は著者の主観が強く入っ  
ているが、それでも忠敬と関係が深かった二代目  
隆朝純について、参考となる情報が多い。桑原隆  
朝純が堀田正敦の参与として、正敦が推進した文  
教政策の一端を担っていたとすると、その他の、  
例えば寛政の改暦等にも関与していたのではない  
かと考えられる。未解明、未整理、未消化の部分  
が多く残った。今後の課題としたい。（了）

#### 【参考文献】

- 『むかしばなし』 只野真葛 東洋文庫 平凡社  
『伊能忠敬』 大谷亮吉 岩波書店  
『伊能忠敬書状 千葉県史料 近世篇』 千葉県 講談社  
『天文曆学諸家書簡集』 上原久他 安藤由紀子  
『伊能忠敬研究』 第12、18号 佐久間達夫  
『伊能忠敬研究』 第31、39号 渡辺孝雄  
『伊能忠敬研究』 第26号  
『自家記録』 桑原如弘 宮城県図書館蔵  
『江戸の伊能忠敬』 伊能忠敬研究会 吉川弘文館  
『只野真葛』 関民子 吉川弘文館  
『桑原叢庵編「田海録」の盛岡藩三閑伊一揆情報』 岩手県田野畑村民俗資料館  
『角川日本姓氏歴史人物大辞典』 角川書店  
『国史大辞典』 吉川弘文館





【抜粋】『むかしばなし』 平凡社 「東洋文庫」

※数字は該当頁 ※現代語訳（大意）

【登場人物】

私Ⅱ工藤あや子（筆名・只野真葛）

父様Ⅱ工藤平助

母様Ⅱ平助の妻、如璋の長女、純の姉

工藤のじい様Ⅱ工藤丈庵（平助の養父）

工藤のばば様Ⅱ工藤ゑん（平助の養母）

桑原のじい様Ⅱ桑原如璋（初代隆朝）

桑原のばば様Ⅱ桑原やよ子（如璋の妻）

桑原のおじ様Ⅱ桑原純（二代目隆朝）

桑原のおば様Ⅱ純の妻（谷田太郎左衛門女）

・・・・・・・・・・・・・・・・

4) 桑原如璋・やよ子夫婦は、非常に行儀よく恵み深い人柄で召使をも後々までよく御世話した。娘（あや子の母）、息子（純）、末に妹が一人いた。この妹は聡明だったが五つの時に痘瘡で亡くなった。父の如璋が仙台勤務で留守の時だった。

5) 桑原夫妻は女の子が好きで娘を秘蔵したが、純明は男で言うことをきかなかったので大事にされなかつた。

6) 桑原の家風はあくまで行儀重視でしつけが厳しかった。

7) 桑原夫妻は行儀よく人柄よく、娘の服装もごく昔風でただただ人柄が大事、という方針で子供を育てた。

7) 母様は折々橘家に泊りがけで出かけた。

9) 桑原夫妻は子どもにきびしく手習いをさせた。

姉弟は「世の中にはじい様ばば様という者がいて

孫を愛すると聞いている。うらやましいものだ」と涙ぐんだ。

10) 古典の素読など気づまりな勉強の息抜きに姉弟は隣の長屋との境に蜘蛛が巣をかけるのを暗くなるまで二人で見るのが唯一の気晴らしだった。

10) 桑原夫妻は銭金などという言葉は人が言うのも聞いたことがなく、銭金には見ることも触れることもせず、まして手に取ることもなかった。

10) おじ様（純）ほどの才人でも、（中略）気づかないのは残念なことだった。

10) ばば様（やよ子）も長屋住まいで気が詰まるので、年に一、二度郊外へ出て気晴らしをした。

11) 母様は病身で月に十四、五日は安静にしていた。頭痛もちでそれがおれば二、三日絶食して寝ていた。偏食で小食、紅猪口ほどの椀で一、二膳食べるだけだった。

11) やよ子は縫物も髪結いも上手、書道、物語好き、手跡も巧みで『宇津保』の年立を研究した著作は、かの村田春海でさえも感心したということだ。

12) やよ子は感情が激しく癪癪持ちで面白そうなお人だったが、後年仏道を学んで悟りを開いてからは世の中の人は自分には合わないものと観念して堪忍を旨とするようになった。

14) 八つになった年の夏、桑原家に行って養しゅんと遊んでいると、

16) 司馬家の息子のもと次郎と養純だったが、いずれも二十五の境で亡くなったのは哀れなことだった。

24) 伊達家の御家中で藩邸外の居宅というのはじい様（工藤丈庵）が最初である。

40) 桑原のおじ様（純）おば様は世間の人によく親

しみ、使用人などにも恵み深い人だったが、工藤家に対しては（中略）あくまで卑しめおとしめて恥を与えて愉快に思っていた。その一つの例としては、余り物で腐りかけた魚のようなものばかりを送ってきた。

40) 今の隆朝（如則）の代となつてますます工藤家の衰えるのをうれしく思うのが本心である。

41) 隆朝（如則）は若さの勢いで人がどう思うかも配慮せず、工藤家の家財を売り払い金五十両に変えたのは無残なことだった。（略）に同趣旨の文

41) 今はますます桑原の富める世となりはてた。

43) 桑原のじい様（如璋）はどんな人の子なのか分からぬ。昔、一人の男が六歳ばかりの男の子を連れて木曾路を江戸のほうに向かって下っていたが、ふと風邪をひいたような心地がすると言つて床についたが、次第に病が重くなつて五、六日のうちに死んでしまった。懐中などに住所を書いたものでもないかと探したが、どこの人とも分からなかつた。子どもは幼くて何も分からず、仕方がないので遺骸を近くに埋葬して、子どもはお寺に預けた。それから二年ばかり経って、橘庵（幕府奥医）が何の用事があつてか木曾路を通つた際にその寺に泊まつた。八歳ばかりの子がお茶の給仕に出てきたのが目に留まり、可愛らしく思つたのでどういふ人の子か、と尋ねたところ、「これは不思議なこと、これこれの次第です」と和尚が語つたのを聞き、「そういうことならこの子を下さ

い、縁があるのでしよう、とても不憫で欲しく思う」と言つて連れてきた。橘庵はその子息子の遊び相手にしていたが、その子は少々人と異なつた性質だった。駆けずり回つたりすることなく、四書五経の『大学』を少し教えられると、夜昼な



く書物に向かっていたそうだ。無理に呼び出されて遊び相手をさせられるのを嫌って、物陰に隠れ隠れしているのをいつも捜すようだったが、ある日、どんなに探しても見つけれなかった。家の中にいないことはないだろうと隅々まで探したところ、風呂桶に入ってびったりとふたを閉めて書物を読んでいたそうだ。そのことを隆庵に申し上げたところ、「それほど書物が好きなら今後遊び相手をやめて書物を読ませなさい」と許された時の嬉しさは言いようもなかったそうだ。それ以後、みっちりと手習いや書物に取りくんでいるうちに、物をひき延べるように上達したということだ。これが桑原のじじ様である。

44) さて後忠山様（伊達宗村）の御世に橘家（橘隆庵、宗仙院ともいう。幕府奥医）に門弟のうちの然るべき人がいたら召抱えたいと仰せられた時、秘蔵弟子だった如璋を推薦した。そのようなわけで橘家を長らく親同様にしていた。

44) 忠山様（伊達宗村）が国元で重病になった際、如璋が差し上げてみたい薬法があると言って仙台下ったが、効果があつて快復されたので、二百石から四百石に増された。これが運氣上昇の始めであった。それ以後、奉養として参勤交代にお供して江戸と国元を往復した。宗村公の没後は御役御免になり、重村夫人在藩時の奥の奉養として十年あまり勤務したが、永井養安という同僚の山師医者にいじめをうけたので勤めかねて隠居願いを出し、築地に家を建てて移った。月に三度御機嫌伺いに参上したが、七十余りで死去した。あや子が十三歳の時だった。引き際は良くなかったが、その一生は幸せで栄えある人だった。面立ち柔らかく絶えず微笑んでいて、人柄よく少しも憎

らしいところのない人だった。隠居後は庭の世話を楽しみ、手ずから掃除をしていた。亡くなったのは六月十一日だった。御ばば様（やよ子）は朝顔の花に文をつけて娘（真葛の母）に贈った。

45) 工藤のじじ様（工藤丈庵）は獅山様（伊達吉村）の隠居に際して召し出された。桑原じじ様（如璋）は忠山様（伊達宗村）の治世時の奉養だったが宗村は四十歳ほどで早世したので吉村公没後間もなかった。父様（平助）は徹山様（伊達重村）の時代から勤めた。じじ様（丈庵）は吉村公の看病疲れがもとで亡くなった。

51) この頃が桑原おじ様（純）の大憂鬱の時代だった。おじ様は父様（平助）より十歳年少だったので母様（真葛の母）の婚禮の時は十五、六歳であつたろう。父様は世話好きだったので万事隔てなく、療治の具体的なやり方も高度な理念も、熱心に指導した。

51) おじ様（純）は殊の外病弱で、長生きはおぼつかないと言われた人だった。それを父様（平助）は丹精込めていろいろ療治し、流行病にかかった時も昼夜添い寝して世話をして快復させたり、この十年ばかりの間、並々ならぬ恩をうけたのに、後になってそんなことは口にも出さず、また人前では弟子に対するような憎々しい口のききようで父様が立腹したのもつともであった。それゆえ他所で同席するのを嫌った。桑原じじ様（如璋）が没した後は暮しも難しくなり、父様（平助）はだんだん勢いよくなったので、内々に世話もやいたのに、全く連絡もなしに謀判（にせはん）をして借金されてもめたことがあった。その時も世話した甲斐なく堪忍しがたかったが、近親で金のこと縁を切るのもどうかと思ひ、やつと堪忍したが愛想が

つきてしまった。その後、純の医業が少々はやり出してから、病家に父様の讒言してまわっていることが露見し、今回は我慢ならぬ、弟の側につくのなら母様をも離縁するといつて大いに立腹したことがあり、この時には平助の実兄が「重ねね隆朝が悪い。立腹するのはもつともだ。しかし子供もたくさんいるし、夫婦仲が悪いわけでもないのに妻の里方をとにかくいうのは人聞きが悪い。隆朝を人だと思ふな。大悪党の悪者だと思つて縁続きなのが災難だと思つて寛大に堪忍なさい。世間にはいくらでもあることだ、と仰つたので父様（平助）は堪忍されたので、私などもうわべだけ敬つているようにした。その末代（如則）に至つては、真の敵役になりきわまつたものである。

59) 築地で火事の類焼をうけた時分までは、田沼世界（田沼の時代）だったので人も陽気で金廻りも良かった。

60) とかくするうち白川様御世（松平定信の時代）に変わつて金廻りが悪くなり、

62) 私（あや子）が二十八の年、おつね（妹）が太田（太田村の加瀬佐兵衛家）へ嫁いだ。

62) この病は平安様（せんの隆朝）が常々父様（平助）に話されていた病氣だと仰つた。

68) 父様（平助）とおじ様（純）は得意とするところは違つていたけれども、凡人ではないぞと思う心の形は、言ってみればこうであろう。それがわかるのはおてる（妹）がおじ様の話を聞くと心に心もしめつて引っこむような気持がしたという。

「この世の行く末はどうなるものか。俺が出入りしない大名はないが、どこの若殿をみて、これが成人したらいい馬鹿だろうと思うような児ばかり。大納言様（徳川家斉）はどんな人かと旗本衆



の所へ行って聞いてみれば、御幼少の時は豆蟹をつぶすのが好きで、毎日毎日大納言様御用といつてたくさん取って来たのをおそばにまき散らして、お相手の子と押しつぶしていた。それが過ぎて九つ十ぐらいの時から、鶏が好きでいくらでも召し上がる。それも棒を持って追い回して追いつめてぶち殺すのが好き。お慰みに腰抜けになった鶏がいくらかも縁の下にひこひこしてかがんでいるということだ。そんな不仁の人が公方様になられたら、どんな世になるかわかったものではない。」というお話だったそう。父様はのめり死にすることはあっても、そんな気のつまるふさいだ話などされなかった。お話を聞けば心ものびのびとするようであった。「蝦夷地開けばおのずから仙台は日本の中央となるから、ゆくゆくは素晴らしい国になるだろう。(略)とおっしゃった。」

70) おじ様は素知らぬ顔をしているが、実は人に褒められたい気持ちでいっぱいだったので、凡人のレベルを脱しても下のほうを覗いているような心持ちだったと思う。父様とおじ様との得意とするところが違っていたというのは、例えば、おじ様がある病家を初めて往診した際、その家の飼鳥の鳴き声をきいて、餌が目前にあることを精妙に聞き分けた(という逸話の例)こういうことは、父様は全く不得手である。

79) この巻は特に父様(平助)とおじ様(純明)の間柄について詳しく書き記した。おじ様は他人にはおとなしい顔をみせていたが、実は昔からこまかに工藤家に恨み返しをしていた。私は(そのことが他人に分からないのが)くやしいので私の思いをのべたのである。

87) 私が十四の年、(略)その頃またまた土地を借り

足して家の普請をした際、摂津守様(堀田正敦)が早々に普請開きにおいでになった。

97) 例の敵役の桑原おじ様は同じ築地に住みながら、庭も家も狭く侘しい暮らしだったが、心の底では悔しく思っていて、いつもいつもふさいでばかり。内心では一生の内には時流に乗って時めいてみせようと思っていて、実際、そのように言ってもいた。(平助が)悪い道に引き込まれていくのを、心の底では可笑しく思いながら顔には出さず、工藤家が困れば壁に向かってほくそ笑むというふうであった。

100) 桑原家は毎年橘隆庵宅に年始の振舞に呼ばれていたが、明和九年二月二十九日、橘家の振舞に出かけている時に名代の火事(※目黒行人坂の大火)が起きた。焼け出されて逃げて来る人々を見物していると、女駕籠が三丁続けて通る。見れば桑原のばば様(やよ子)、おじ様(純)と母様(純の姉)であった。

106) むかし母様と桑原おじ様は運勢を見てもらいに大坂まで遣わされたことがあったが、鑑定人は母様だけ褒めて一生無事無難ですと言ったが、おじ様はいろいろ良くないことが書いてあったので、すぐに火中に投じて燃やしてしまつて人に見せなかった。母様が仰つたのだが、おば様(純の妻)の末期の有様など、さもありなんと思われることであつた。

136) さわばばと云う人は桑原おば様(純の妻)の乳母である。夫の谷田太郎左衛門は道楽者で田地も質入れして生活の途がないので、おば様の実家の谷田何とか云う人(中略)、またまたさわが流浪しているのを見て、本来は桑原家で雇うべきであるが、母様は律儀なもので役に立たなくなつてしま

つたさわを一生面倒をみるつもりで雇った。

120) 桑原家で居候をしていた佐七という男を伯父様が世話してその娘の婿に遣わされたが、手もなく追い出された。

180) 桑原の高弟に養丹という人がいた。この名前を付けた頃までは、おじ様も万事父様(平助)の真似ばかりされていた時であった。人の名前は書きやすく覚えやすいのが良いと言って、元丹という弟子がいたのにならって付けた名前であった。

196) 隆朝(如則)は若さの勢いで人がどう思うかも配慮せず、工藤家の家財を売り払い金五十両に変えたのは無残なことだった。(41)に同趣旨の文

214) 忠山様(伊達宗村)の治世、桑原じじ様が勤め中の時のこと、権太左衛門という大男がおり、力士になった。丸山権太左衛門は咽喉が太く、声をひそめても大桶の底を叩くような声なので、権太左衛門の密談はその長屋はいうに及ばず、隣の長屋までも知れわたってしまった。

## 220) 桑原氏系譜略

初代 桑原隆朝

女子 工藤平助妻

二代目 隆朝 妻谷田太郎左衛門娘也

三代目 隆朝

四代目 隆朝 玄貞坂行当りより西の方南側に住む  
周庵 工藤氏の養子となる



# 参考 江戸切絵図

『復刻古地図 御江戸大繪圖』人文社





## 品質管理的視点から 伊能測量プロジェクトを外観

戸村茂昭

はじめに

現役時代、勤めていた会社では全社的品質管理（TQC）運動が盛んで、全てのプロジェクトに対し「PDCAサイクルを廻せ！」というさく言われたものである。即ち、すべてのプロジェクトはプロジェクトとしての計画（P）を立て、その計画に沿って実行（D）し、実行段階では様々な品質データ（日程・費用・作業進捗・トラブル事象等々）をきちんと収集する。そして、プロセスの区切り毎に実績が計画に対してどういう状況か、データを元にしてオープンにチェック（C）し、差異の要因分析は統計学的手法で行う。そのことによって、当初の計画通りに進んでいない場合、新たなアクション計画（A）をオープンに立てて実行する。このPDCAサイクルを最終目標に至る各プロセスの内部で廻すことにより最終的にはアウトプットの品質だけでなく、プロジェクトの品質を高めようとする運動であった。

実感としては、「管理する／管理される」という就業規範に慣れていたことが、この運動を遂行するために使う治具に使い慣れていたなど、理由だらうけど、面倒くさいものだなあ、というのが実感であった。

ところで、天文暦学を隠居後のシニア世代になつてから学び、日本で初めて日本全国を実測し、精度の高い日本全国図を完成させたことから、「一

身にして二生を經る人生を全うした」として伊能忠敬はシニア世代の星とまではやされている。その伊能測量も現代用語でいえばプロジェクトであり、忠敬は現場におけるプロジェクト・リーダーであったといっても過言ではないだろう。では、その伊能測量というプロジェクトをTQC的視点、すなわち計画と実績との対比という科学的な品質管理の視点で検証して見た場合はどうなのだろうか？ そのようなことを「伊能忠敬測量日記解説決定デジタル版」の刊行作業をしている最中に「ふうつ」と感じたものであった。

本稿は、そのような思いつきから、伊能測量プロジェクトの品質管理の実態を眺めてみようと思ひ下ろして見たものである。何故ならば、手元に所持している図書や資料に限って見れば、伊能測量の実績については詳しいのであるが、計画との対比やPDCAサイクルの廻し方という視点で伊能測量を検証した論述には浅学故ではあるうが、お目に掛かっていなかったからである。

### 一、まずは忠敬のプロジェクト・リーダー振り

本稿に挑戦しようという動機をおこしたきっかけとは、第八次測量のルート図を伊能忠敬測量日記全二十八巻の巻別（十八巻～二十六巻）に色分けするということであった。各測量回次のルートについては「伊能忠敬の全国測量（渡辺一郎編著）」という図書に表現されていたのであるが、その図書では巻毎のルートではなく年度毎に色分けしたルート図であった（図1）。そのため色分け作業の起点としては参考にしたのであるが巻別の境を

見つけるためには測量日記をつぶさに紐解くという作業が必至になったのである。



図1. 第8次測量九州部分  
青線：文化9年 桃線：文化10年

しかし、東男の身の悲しさで九州の地名に対する土地勘が働かず、図1の上でどこが巻と巻の境なのかを見つけるのには誠に苦労したものである。そのような作業の中で、本稿の著者と同様に九州に関しては土地勘が働かない苦の忠敬先生が、幕府から指示された測量実行計画（測量範囲や完了期日や費用あるいは出来栄等）を遵守するために現場で決めた測量ルートや日程キープの方策や本隊と支隊を構成する隊員の組み替えなど忠敬先生のプロジェクト・リーダー振りを散見することが出来たのでまずは事例として例示してみた。

### 「事例とした現場の背景の外観」

本来、伊能測量は基本的には日本陸地の輪郭を捉えることにあったよう、第六次測量終了時点までに蝦夷地の北側と九州全域を除いた日本陸地の輪郭（沿海）測量と横切り測量は終わっていたようである（図2）。





また九州についても、第七次測量の結果を見る限り、日本陸地の輪郭を捉えるという本来の視点で測量していたようである。具体的には、九州の南部と東部の陸地及び屋久島・種子島を除く小島に対する沿海測量と測量精度を高めるための横切り測量であった(図3)。



ではなさそうである。  
ではどのような方針転換が暦局から行われたのであろうか？  
不思議に思っ測量日記を調べたところ、文化八年正月二日に「暦局急御用状届」というミステリアスなことが起っていたのである。筆者にはこの書簡を見つけ出すことが出来なかったのであるが、何やらこの時点から、



しかしながら、この第七次測量は何故か熊本・大分間の横切り測量で終わってしまい帰途についてしまっている。日本陸地の輪郭を明確に捉えるというこれまでの方針を前提に置けば、次は九州北西部の輪郭を捉えんがための沿海測量に進むというふうに見えるのが、このように思えるのであるが、不思議な事にこの大分からは江戸へ向かってしまい、その復路の測量ルートがダツチロールを始めたようなのである(図4)。



伊能測量の基本方針である「日本陸地の輪郭明確化」がガラリと変わり「内陸部の主要街道も測量の対象」になったように思えるのである。  
この時点で第七次測量は既に江戸出立以降一年三月にも及んでいたため、新たな方針の確認のため江戸に戻ることにし、その際、新たな方針の試行も兼ねて中国地方西部の内陸部及び中部地方の飯田街道・甲州街道など内陸部にも分け入ったのではないだろうか。そして改めて、方針の変わった測量地域に対する第八次測量が具体的に検討されたように思われるのである。そのことを裏付けているような証拠として、大牟田から鹿児島に至る西側の海辺測量は第七次で既に済んでいる(図3)にも拘わらず、第八次測量で小倉に到着してから鹿児島・屋久島に向かうに当たっては、無測ではなく、小倉から内陸部の街道を測量しながら熊本に至り(図5)、熊本からの西側の海辺寄りについても内陸を走っている街道を二手に分けて測量しながら(図6青線)鹿児島に至り屋久島・種子島の測量を実施したのである。



〔測量行程の事例一〕  
さて、このようにして屋久島・種子島の測量（三月十三日～五月二十二日）が苦勞しながらも第八次測量の前段階で終わって鹿児島に帰り、薩州侯の饗応を受けた。その後、船で濱市村（現霧島市隼人港）に渡った。これまでの「**日本陸地の輪郭明確化**」という測量方針ならば、ここから無測にて熊本経由大牟田に行き、時計回りにまだ測量していない九州西北部陸地の沿海を測量すればいいのであるが、前述までの考察から、内陸部街道のダツチロール測量という方針にかわっているようであるから、伊能測量の空白地帯である内陸部測量のため、濱市村から内陸部に分け入ることになったようである（図7）。

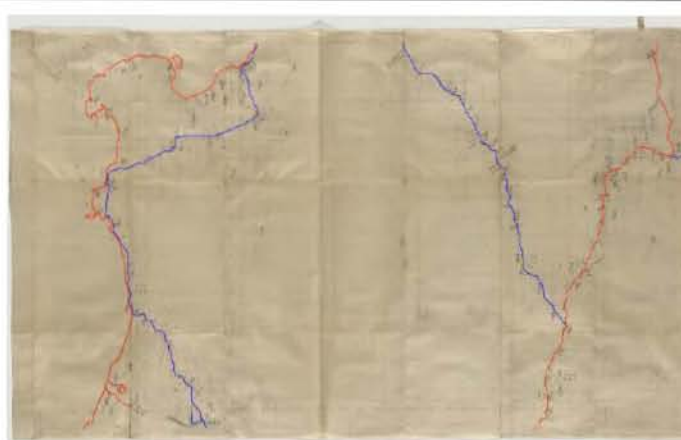


図6. 伊能大図#208 阿久根 測量ルート  
赤線：第七次測量 青線：第八次測量

文化九年五月二十八日は、濱市村から内陸に向かつて松永村（現霧島市隼人町松永）まで約七・五キロメートルを測量したのであるが、此処を忠敬先生は先手と後手とに手分けした。  
後手（忠敬、門谷、尾形、保木、佐助の五人）は濱市村から松永村までの中間地点にあたる国分八幡宮まで測り、参詣した後に無測にて松永村へ直行了した。  
先手（坂部、永井、今泉、箱田、甚七の五人）は無測にて国分八幡宮入口の内村辻まで先行し、そこから松永村まで測り、後手と合流。本陣には忠敬、坂部と下役と内弟子とはそれぞれ**身分**に**分かれて**三軒の郷士宅に分宿。  
プロジェクト・リーダーとしてのここでの采配ぶりをみると、当然のことであるが先手と後手との作業量が五分五分となるような中間点にあたる国分八幡宮入口を先手と後手との繋ぎ箇所にとめたことが測量日記から読み取れる。



図7. 浜市村～松永村間の測線  
（朱線：後手、青線：先手）

ここでメンバー構成を前日と対比してみると、  
後手は  
前日…忠敬、門谷、**尾形**、保木、**佐助**  
今日…忠敬、門谷、今泉、保木、**甚七**  
先手は  
前日…坂部、永井、今泉、箱田、**甚七**  
今日…坂部、永井、**尾形**、箱田、**佐助**  
ご覧のように、下役の今泉と内弟子の**尾形**をまた、棹取りの**佐助**と**甚七**とをそれぞれ入れ替えている。つまり、無策で済ませているのではなく、プロジェクト・リーダーの立場から、先手グループの前日の作業状況を先手のメンバーから把握しチェックしているようであり、まさにTQC視点か



図8. 松永村～霧島山間の測線  
（朱線：後手、青線：先手）

〔測量行程の事例二〕  
翌日の五月二十九日は、松永村から霧島山までの約十六キロメートルを測量したのであるが、こゝも先手と後手とに分けた（図8）。



ら見たアクションのようで評価できる采配である  
 と言える。そして、後手は、松永村から霧島山ま  
 での距離のほぼ**六割強**に相当する霧島山・紙屋道  
 追分まで測り、そこから無測にて霧島山へ。

先手はその追分から霧島山までの**登り道**を測つ  
 て後手と合流して二軒の郷土宅に止宿。

プロジェクト・リーダーとしてのここでの采配ぶ  
 りの今一つの特徴は、霧島山までの**登り道**での測  
 量という**重い負荷**に想いを致して先手の作業量が  
 軽減するように先手と後手の繋ぎ箇所を、やや遠  
 方の霧島山・紙屋道追分に定めたところにきめ細  
 やかな采配ぶりをしてしている様子が見えるのである。

### 〔測量行程の事例三〕

更に翌々日の五月晦日は、霧島山・紙屋道追  
 分から二十三キロメートルほど先の霧島山神徳院  
 までを測量したのであるが、ここでも次に示すよ  
 うに前々日及び前日とはメンバー構成を代えてい  
 る。

後手は

前前日…忠敬、門谷、**尾形**、保木、**佐助**

前日…忠敬、門谷、今泉、保木、**甚七**

今日…忠敬、門谷、**尾形**、**今泉**、**佐助**

先手は

前前日…坂部、永井、今泉、箱田、**甚七**

前日…坂部、永井、**尾形**、箱田、**佐助**

今日…坂部、永井、保木、箱田、**甚七**

このように忠敬先生は常にプロジェクトに対し  
 て木目細かく気配りするなどプロジェクトの品質  
 管理に徹底していたことが日本全国の実測をやり  
 遂げ精度の良い地図を完成させた要因だったよう  
 である。

そしてこの日

後手は、霧島山・紙屋道追分から霧島山神徳院  
 への分岐点の安永村字戸の口まで測り、そこから  
 無測にて霧島山神徳院へ。

先手は安永村字戸の口から霧島山神徳院までの  
 登り道を測つて後手と合流し、神徳院に止宿した  
 (図省略)。

### 〔測量行程の事例四〕

六月朔日は霧島山神徳院から麓村追分まで測量。

そして、六月二日からは大手分けして

本隊(忠敬、永井、門谷、尾形、佐助)は、  
 紙屋街道を佐土原城下に向けて測量、

支隊(坂部、今泉、箱田、保木、甚七)は、

肥後人吉を経由してから佐土原に向かうというダ  
 ッチロール行程を設定したのであった。

さらに、佐土原から先の美々津町からは再び大  
 手分けし、

先手は熊本までの九州横断街道の測量行程、

後手は延岡から阿蘇・日田を経由して中津城

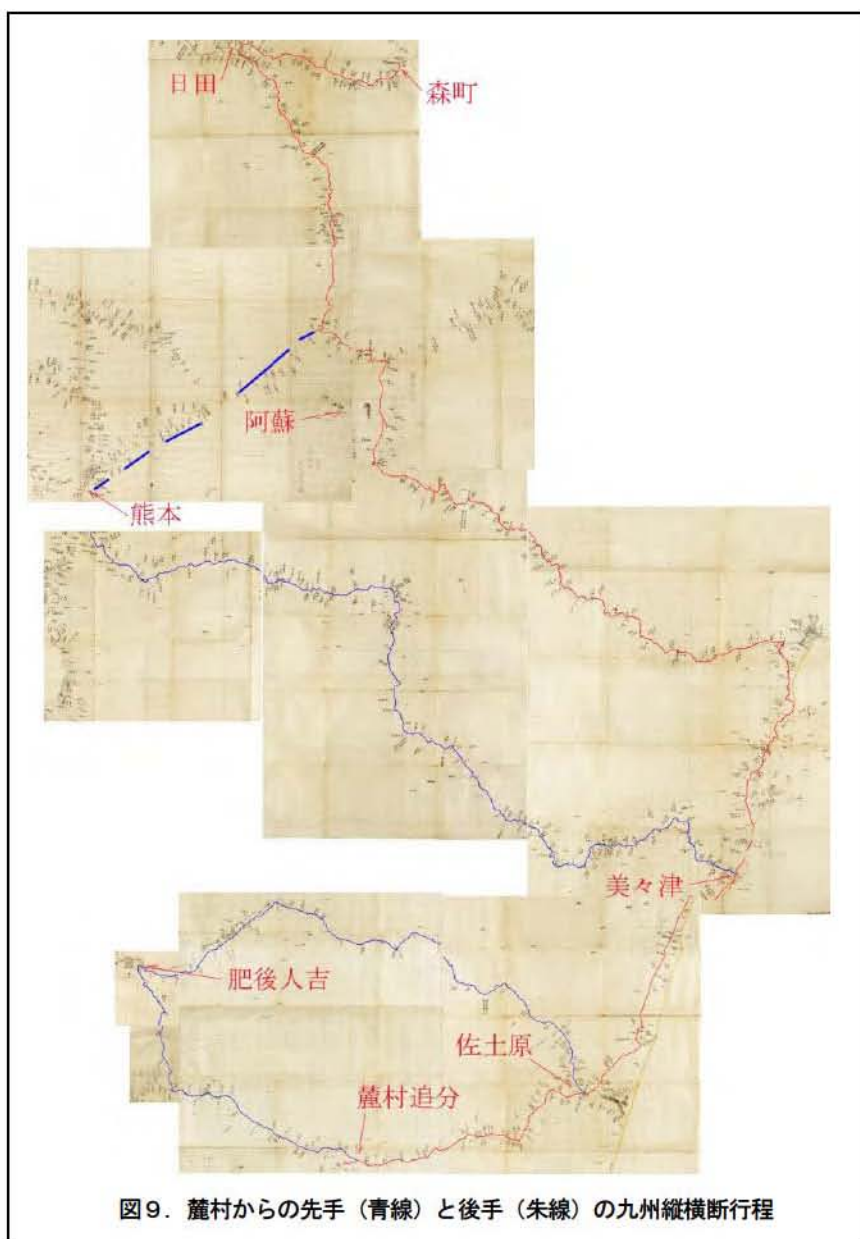


図9. 麓村からの先手(青線)と後手(朱線)の九州縦横断行程



に至る九州縦横断行程とに振り分け、合流地点をほぼ一月後の七月四日に豊後国森町とするという土地勘の無い者にとつては気の遠くなるような広範囲の測量行程を設定するという離れ業を策定したのであった(図9)。

## 二、計画及び計画と実績との差分は？

忠敬先生、九州には土地勘が無かった筈であるのによくもまあこのような測量ルートを現場で決めることができたものである。実際問題として筆者が、麓村からの九州縦横断行程の画像(図9)を作成するに当たって準備したアメリカ大図は南側から一九七小林、一八五宮崎、二〇八阿久根、二〇〇人吉、一八四延岡、一九四椎葉、一九五八代、一九三熊本、一八〇日田及び、一八二豊後高田の十枚に及び、そこには七次測量の往復の測線や八次測量の往路の測線がこれまた縦横に走っており(図2)、その中から事例一から事例四に対応する測線を後手(本隊)と先手(支隊)別に測量日記に記載の日付けと地名を頼りに探して色分けした(図10)のであるが、土地勘が働かない身にとつてはいやは大変であったから、同じく土地勘が働かない忠敬先生のこの離れ業には感心することしきりだったのであり、本稿執筆の動機でもあったのである。

実績だけを見ればプロジェクト・リーダーの類まれなる采配ぶりと隊員たちの粘り強い努力及び表面的には見えないがルート上の村々浦々などの支援活動があったからに違いなく(実際問題として、毎日毎日休むことなく、夜間は測量データの整理や天測、そして日中は測量できないほどの天候不順を

除く毎日毎日の見ず知らずの土地での測量行であった)、その結果として歴史に残る功績を挙げたの



図10. 第八次測量 巻別測量ルート

であろうが、本稿は計画と実績の対比という評価方法で伊能測量というプロジェクトを評価しようということであるから、伊能測量プロジェクトの計画というものを抜きにしては語れない。

そこで伊能測量プロジェクトの計画はどのようなものかを探すことにした。その手がかりとして、測量日記に忠敬先生がしばしば「御触」とか「前触」という言葉を残しているの、それを測量日記などから探すことにした。方法的には「伊能忠敬測量日記 解説決定デジタル版」をパソコンにセットして起動し、検索キーワードに「触」という文字をインプットすることによって「御触」や「前触」を抽出してみた。その結果、第四巻(第二次測量)の冒頭に、次のような「御触」が写しとして書かれていた。

### 第二次測量御触

覚

人足 式人

馬 壺正

長持 壺棹

天文方高橋作左衛門 弟子伊能勘解由

右は此度伊豆、相模、安房、上総、下総、常陸、陸奥国海辺測量為御用被差遣候に付、書面人馬、勘解由断次第お定め賃銭請取之可差出者也

この「御触」によれば、何処を測量するかについては、**国名**レベルと場所的には「**海辺**」という文言で計画が示されているようである。但し日程は明記されていないかった。



次に第五卷（第三次測量）の測量日記を見てみると次の通りであった、

### 第三次測量御触

測量御用 被仰渡

其許一昨年、昨酉年蝦夷地為測量御用被差遣、伊豆より蝦夷まで海辺地図仕立被差出候之所、右は陸奥出羽等全体形象不相備候故とても之儀、**陸奥三馬屋より西之方北海道出羽、越後、越中、能登、加賀、越前までの海辺、それより陸地通南之方尾張へ出、尾張、三河、遠江、駿河之間、海辺致測量、以前之地図相補い、尾張、越前より東之方諸国全体海辺地圖出来候様致し度目分勘弁を以相伺候所、即右国々海辺為測量其許被差遣候之旨、堀田摂津守殿被仰渡候付此段申渡候。早々致支度出立、入念御用相勤候様可被相心得候。以上。**

戊六月三日

これによれば、第三次の時点で幕府としての計画は、現在我々が知っている第四次の測量地域（越中、能登、加賀、越前までの海辺、それより陸地通南之方尾張へ出、尾張、三河、遠江、駿河之間、海辺致測量）も決定していたようである。なお、この「御触」に続いて次のような第三次測量の具体的な道筋も示されていたのだった。

### 第三次測量道筋

馬 三疋  
人足 五人  
長持 壱棹  
持人足 伊能勘解由

右は此度北国筋海辺浦々測量為御用被差遣に付、書面之通無賃之人馬被下候間、於宿々村々其旨相心得、往返共無滞可差出者也。

日光道中千住宿より

奥州道中白川宿、若松通、羽州 米沢、

上山、津軽 弘前より三馬屋迄

右宿村々 問屋 年寄 名主 組頭

右同文言

奥州三馬屋より出羽国

それより越後国高田迄

右国々海辺宿々 浦付村々 問屋 年寄

名主 組頭

右同文言

越後国 高田より新井

それより信州 善光寺より

中山道通 板橋宿迄

都合三通

問屋 年寄 名主 組頭

続いて、次の第六卷（第四次測量）の場合は次の通りであった、

### 第四次測量道筋

馬 三疋  
人足 五人  
長持 壱棹  
持人足 伊能勘解由

右は此度東海道其外北国筋海辺浦々測量為御用被差遣候に付書面の通無賃の人馬被下間、宿々村々において其旨相心得、往返共無滞可差出者也。

東海道品川より江尻迄 それより

海手に従い駿州田中 遠州相良

三州五十子崎 尾州師崎

南の方海手に従い 同国 熱田より

佐屋津嶋等陸地通り美濃国大垣 関ヶ原 越前

国 敦賀に向

若狭国境迄 それより 海手に従い

東の方 河野三国より

加賀国 能登国 越中国 すべて北海の浦々に

従い

越後国出雲崎 渡海佐渡国

越後国寺泊 長岡

上州高崎より 武州板橋迄

これによると、測量の行程は、もちろん師匠高橋至時や弟子忠敬も計画段階において相談つくであつたろうけれども、日程までは別にして測量すべき場所はかなり綿密に決定していたようである。



次の第七卷(第五次測量)以降についても、「御触」が発行されているように測量日記には「触」の文字は確認できたのであるが、残念ながら最も知りたいその触の実体は書かれていないように見つけられなかった。

これは参ったなあとと思案投げ首していたところ幸運なことに今回の「伊能測量を支えた人物の子孫探し」という活動の反応の中に、奇しくも第五次測量に対する「御触」が見つかったのである。それは岡山県旧矢掛本陣石井家文書「御用留帖」(岡山県立博物館所蔵)の中に、文化二年の先触状として添付されていたのであった。

御勘定御奉行小笠原和泉様御達御書之写、左之通  
天文方  
高橋作左衛門手附  
伊能勘解由  
作左衛門弟  
高橋善助  
同下役  
式人  
同内弟子  
四人  
右者此度測量為御用、東海道通、中国筋、四国、九州、老岐、対馬迄罷越候ニ付、当二月下旬頃江戸出立、別紙道順書之通、国々相廻り可致測量候間、其段可被相心得候一右ニ付他領并島々江渡海之節者、其所之領主より船を出し、差支無之様可被致候、尤測量道具為手入、止宿致候様も可有之間、是又差支無之様可被致候  
一廻国先より江戸領所江御用状差出し候義も可有之候間、領主便を以被相届、且江戸表より廻国先江御用状差出候節、心当之場所領主役人中江可相達候間、其処江至着以前ニ候ハ、着之上被届、出立後ニ候ハ、先々江相届候様可被致候  
右之趣可相達旨、采女正殿被仰聞候間申達候  
任二月

文化2年発行の御触写

江戸出立、芝高輪より測量相始メ、東海道通遠州舞坂江縣リ、今切、湖水相廻リ、夫より荒井江出、熱田より佐屋通大室新田へ罷越、右海辺ニ從ひ桑名江出、伊勢、志摩、紀伊、熊野浦通リ和ヶ浦江出、和泉郡・住吉ニ向ひ、大坂西川口迄、夫より天満川通リ、淀川より伏見江出、加茂川ニ從ひ、京都三条橋より改厩御用所跡迄測量致し、夫より大津江出、瀬田橋より手分致し兩手ニ相分、近江国湖水周リ測量いたし、夫より一手ニ相成リ、越前敦賀江出、又手分ケ致し、一手若狹越前国堺・立石より海辺通リ若狹国小浜江出、一手若本街道通リ若狹国小浜にて両手相揃ひ、丹後国橋立入、海相量リ、但馬・因幡より伯耆国米子へ出、出雲国湖水通リ相量リ、夫より隠岐国へ相渡リ全国相廻リ、又出雲国江立戻リ、夫より石見・長門、北海道赤間関江相越し、周防・安芸・備後・備中・備前・播磨惣而南海辺通リ、小島々共測量いたし、播州舞子浜江出、淡路国へ渡、全国相廻リ測量いたし、阿波国江相渡リ徳島江向ひ、南海辺通リ、土佐・伊予江罷越、同所小島々共相量リ、夫より豊後へ相渡リ、日向より大隅国惣而東海辺ニ從ひ、薩摩国鹿兒島江向ひ、南海辺より肥後国小島々共相量、筑後より肥前国海辺ニ從ひ、天草・長崎へ向ひ、西海辺五島并小島々共相量リ、同国北之方海辺通リ老岐国江相渡リ、全国相廻リ、夫より対馬国へ相渡リ、全国并小島々共相量リ、又老岐国江立戻リ、肥前国江相渡リ、北海ニ從ひ筑前・豊前・豊後海辺通リ、九州測量相済、伊予国江相渡リ、北海通同所小島々共相量リ、讃岐国より阿波国江立戻リ、是ニ而海辺通不残測量相済、淡路国江相渡リ、街道通リ播州舞子浜江相渡リ、大坂江向ひ、夫より伏見江出、宇治川ニ從ひ瀬田橋より草津宿江出、手分ケ致し、一手若本曾路中山道通リ、武州板橋宿迄致測量江戸着、若手若草津宿より東海道筋桑名迄測量いたし、同所より本曾川ニ從ひ起迄測量、夫より名古屋通リ伊保江罷越、飯田江越、高遠より甲府へ相越し、八王寺通リ測量いたし江戸着  
右順書之通国々相廻り候、尤其所之様子ニ而少し宛前後ニ度可相成事  
任二月

第五次測量の道順の触れ

文化二年にこの岡山矢掛本陣に触れられた道順の主要なところを以下に書き写してみれば次の通りである。

芝高輪→東海道→浜名湖沿岸→熱田→桑名→紀伊半島→大坂→京都→大津→琵琶湖沿岸→越前敦賀→小浜→丹後天の橋立→米子→隠岐→岩見→長門→赤間関→周防→安芸→備後→備中→備前→播磨→播州舞子浜→淡路→阿波→土佐→伊予までの海辺→豊後→日向→大隅→薩摩鹿兒島→肥後→天草→長崎→五島→老岐→対馬→肥前→筑前→豊前→豊後までの海辺→伊予→讃岐→阿波までの海辺→舞子浜→大坂→伏見→宇治川→瀬田橋→草津→手分け→一手→本曾路中仙道→板橋→江戸→一手→桑名→本曾川→名古屋→伊保→飯田→高遠→甲府→八王子→江戸

いや、これにはビックリポンであった。伊能忠敬研究に関しては浅学の徒であることは自覚している身の筆者ではあるが、まさか、五次測量の計画が実績としての五次・六次・七次そして八次測量の沿海部分の全てを一筆書きで一気にやっつしまえという幕府の計画であったとは。そしてまた、実績として行われた九州内部の街道筋、中国地方内部の街道筋をダッチロールのように測量するという計画は第五次の時点では計画には無かったのだ。やはり、第七次測量の大部分あたりで計画が変更になったのかも知れない。



そのような感慨に浸っている内に、「うつて待てよ。この計画では琵琶湖からは越前敦賀へ小浜経由で反時計回りに中国地方を回れとの道筋になっていることに気づいた。第五次測量の実態は時計回りで中国地方を測量しているのであるから、伊能測量プロジェクトとしては「計画と実績が違っているぞ」と気づき、ここを掘り起こせば伊能測量プロジェクトの品質管理(測量実績が計画どおりではなかった。その際、PDCAをどのように回したのか?)を検証できるかも知れないと思いついたのであった。何か参考になりそうな史料あるいは研究成果はないかな?と思案しながら伊能忠敬研究会会報総覧DVD(イノペディアをつくる会刊行)をパソコンに搭載して何気なく見ていたところ、景保の初仕事」と題する論考(会報三十二号、伊能家文書紹介二十三、安藤由紀子著)が目止まり読み始めてみたところ次のような日程計画と思われることが書かれていた。

即ち、第五次測量に忠敬先生一行が出発した三日後の高橋御用日記に、京都町奉行に次のような書簡を送ったと書かれていたのだった。

「此度私手付伊能勘解由、ならびに私弟善助外下役二人、西国測量のため出張につき、御地へ通達があったことと存じます。すなわち去る二十五日朝、内弟子も連れて上下十四人江戸を出発致しました。東海道を桑名へ出、南海道に従い紀州浦を通り大阪へ出、五月頃御地へ到着と存じます。(以下、省略)」

つまり、計画としては道筋だけでなく日程も忠敬先生には指示されていたようであり、それを忠敬先生は本稿末尾に後述しているように了承の上で出立したのである。では、計画通り五月頃京都に到着できたのであろうか?

そこで、測量隊が京都に何時着いたのか測量日

記で確認したところ、驚いたことに閏八月五日であった。すなわち、京都までの測量は二ヶ月強で終わるという日程計画であったものが、実績は倍の六ヶ月も掛かっていたのである。もしこの間、プロジェクトとしてPDCAを回していなかったとしたら、忠敬先生はTQC的にはプロジェクト・リーダー失格である。実態はどうであったのであろうか?

第五次測量からは幕府の公式プロジェクトとなつたことから、これまでのような気心の知れた内弟子だけのメンバー構成ではなく、身分が上位の武士(下役)が二人も参加して上下十四人という体制であるから、測量の進捗を捗らせるにはしばしば手分けする筈と気づき、「伊能忠敬測量日記解説決定デジタル版」をパソコンにセットして起動し、検索キーワードに「手分け」をインプットして調べてみた。その結果、当然かも知れないが、殆ど毎日手分けをしており、その際、二人の下役をそれぞれの隊長に指名して身分の違いをきちんと意識した体制で測量はしているようであり、特段、物見遊山しているわけではなかった。そのようにして一ヶ月半弱の四月八日には伊勢路に入っており、ここまでは特段遅延してはいないようである。ところが、海岸線の出入りが激しいリアス式海岸が続く紀伊半島に入った途端、測量は遅々然となつてきたようである。多分、計画ではそのような出入りが激しいリアス式海岸の海辺の長さの測量を意図した測量距離で日程を見積もったのではないのではなからうか?そのことは、前述の「景保の初仕事」にも忠敬から景保に送った次の書簡からも想像がつかうのである。

「(前略) 紀州一国すべて入海出崎多く、海岸絶壁大岩石、ことに波浪荒く、船による測量大変難しく、絶壁を伝いまたは岩石に取付き、上下と

もようやく測量のため、波浪を乗り巖石より落ちて、けが人も出ています。私はかねてより覚悟の上ですが、下役・内弟子の者まで難儀の上、紀州は南へ張り出している国のため、特別の大暑で病人も絶えず、手分けの測量も差し支えをきたしております。・・・大阪まで三ヶ月と見込んでいましたが、六ヶ月も掛かってしまいました。(以下、省略)」

つまり、測量効率の見積もりに落ち度があつたのである。また、「下役・内弟子の者まで難儀・・・手分けの測量も差し支え」とあるように、身分の違う者からなる混成プロジェクト体制の弊害も発生しているようである。この当たりの状況が気になったので、伊能測量のバイブルと言われている図書(「伊能測量隊まかり通る」渡邊一郎著)を紐解いてみたところ「忠敬、下役・市野金助を叱る」という節があつた。測量日記には「叱る」という生々しい言葉は使っていないけれども、「六月二十五日 市野此日より病氣」とあり、その日以降、市野は測量隊一行とは宿舎が別であるように書かれており、手分けした測量隊の名前から名前が消えてしまつていった。

このように、伊能測量プロジェクトは決して順風満帆で進んだのではなく、途中のプロセスにおいては様々な問題が頻発していたようである。しかし、忠敬先生はそのような問題を隠して致命的失敗に陥るようにはせずに、このように上司の景保に状況報告をし、増員要請や計画変更という対策を立てて相談するというアクションを起こしていたのである。ただし、PDCAサイクルを回した類まれなほど優秀なプロジェクト・リーダーだったことは間違いなかったようである。

### 三. 結び



伊能測量というプロジェクトをTQC的評価方法で検証してみようと勇んで書きおろし始めてみたのであるが、さすが二百年あまり昔のプロジェクトだけあって、データ不足で当初の思惑通りの評価はできなかった。しかしながら、この挑戦をしたお陰で西日本は一筆書きの測量計画だったこと、にも拘わらずその計画どおりには測量は進まず、その要因には測量能率の見積り甘さだったり、測量隊の要員の混成体制の問題だったり、と実は様々な障害が待ち受けていた様子の気配を感じ、それにも拘わらず、最終的には日本全国の実測をやり通すことが出来たその背景には、プロジェクト・リーダーである忠敬先生のプロジェクト管理に大変な努力と資質があったからであるだろうと認識を新たにできたのであった。

また、測量日記も実は無味乾燥なのではなく、このように一風変わった焦点を設定して日記の文言の背景を読み解いてみると、プロジェクトの様々な状況が炙りだされるといことが分かり、伊能ワールドに分け入ると思わぬお宝を発見できることを体験できたのであった（この副産物として、「四千万歩の男」という小説までも読みたくなってしまうのである）。

そこで、改めて「伊能忠敬測量日記 解説決定デジタル版」に収容されている第八巻（第五次）において「触」という文字で検索した際にはヒットしなかった第五次測量の道順計画が第八巻の冒頭に書かれていたのである。

「文化」二乙丑年、二月二十五日

西国・四国・九州・老岐・対馬迄測量の命を蒙り、（中略）八幡宮へ参詣し直に出立す。（中略）

直に大木戸より測量を初る。折ふし空も晴てひとしお有難く覚えける」。

忠敬先生、幕臣に登用された上、西国一円測量のプロジェクト・リーダーに任命された栄誉の嬉しさを正直に日記に書いてあったのだ。そして、参詣した八幡宮の靈験は確かだったようである。

「追記1」本稿執筆後、第六次、第七次及び第八次の測量地域を測量日記ではどのように出立日に書いていたかが気になったので調べてみたところ、次のような表現で書かれており、第五次までの晴れがましさが影を潜めてしまっているようであった。

・第六次…四国并大和路測量の命を蒙り

・第七次…蒙国々測量命

・第八次…九州測量日記

また、本稿執筆後になって、伊能測量のバブルと言われている今一つの図書「大谷亮吉編著・伊能忠敬」が二週間も掛かって図書館から届いたので、気になっていたので第五次測量の当初の計画における西国筋測量の所要月数を調べたところ「三十三ヶ月を期して一挙受命」となっていた。第一次～第四次までの本邦東半分測量の約二十六ヶ月の合計月数と比較すると、わずかに割増しの所要日数に過ぎず、瀬戸内海や五島列島などの測量を考えればやはり甘い計画だったようである。

「追記2」本稿を投稿後に追記1を執筆して再投稿した後、知人から電子メールが舞込み、そのメールの中に次のような神妙な文節が盛り込まれていた。

『世上歴家之机上腐臭之故態ヲ破シ、

精密之一家堅ク相建候モ、今コノ時ニ』

これは糸魚川事件の際の高橋至時師匠からの書状とのことであった。糸魚川事件について、その存在は耳にはしていたが、目で自分なりに紐解いて見たことはなかったのだ。改めて「伊能忠敬測量日記解説決定デジタル版」で調べてみたところ、この糸魚川事件における高橋至時と忠敬との師弟間の言動こそ、伊能測量プロジェクトを成功に導いたTQCの実態そのものであることに気づいたので、その一端を最後に以下に追記することにする。

先ず、改めて気づいたことは、このプロジェクトに取り組む忠敬の価値観である。

「この測量に儀スル者ハ、神武天皇以来無之事ニ而、」（糸魚川日記より）。

次に、気づいたことは、プロジェクト・マネージャー高橋師匠の忠敬に対する愛情と期待感の大きさを感ぜさせる以下の勘定・道中奉行六名連署の書付とは別の内書を添えたその文面。

『先頃御持病気の由にて御察兼申候。弥御全快に候哉。日々日々風土も替り候間、別て御用心専要御事に候。扱、今便は別紙一件に付、態々書状出し申候。』（中略）

「元来御存知の事にて申迄は無之候えども、即今、天下の曆学者各眼を拭い、足下の地図成就の期を日を算え待候事にて、後世永々英名を御残し候事、此時に候て、又是を以て、

世上歴家の机上腐臭の故態を破し、精密の一家堅く相建候も、今この時に、実に足下の一身、天下の曆学の盛衰に係ると可申候。加程の大事業の将に成んとするの間、一小事にて万々一中絶に成候はば、何程の残念と思召候哉。」（了）



# 高橋至時 町見図

前田幸子

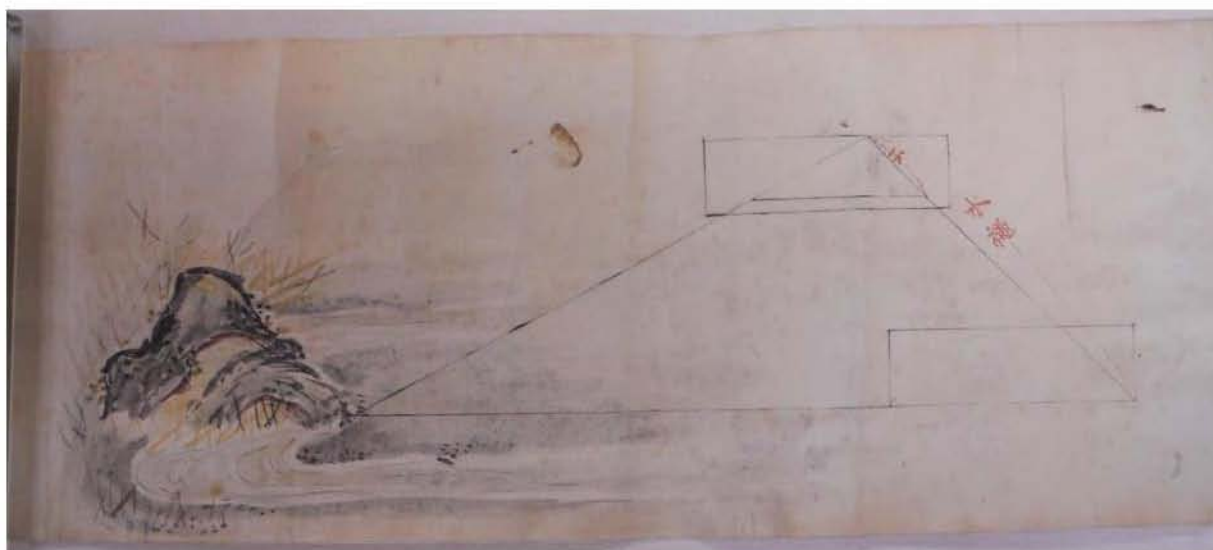
高橋至時作とされる一軸の巻物が国立公文書館に所蔵されている。測量術の指南書か印可書のようなものである。日付から至時十八歳当時のものと思われる。伊能忠敬の測量術を考える上で興味深い。なお、本図は公文書館のサイトで詳細を閲覧できる。  
※国立公文書館デジタルアーカイブ（「町見図」で検索）



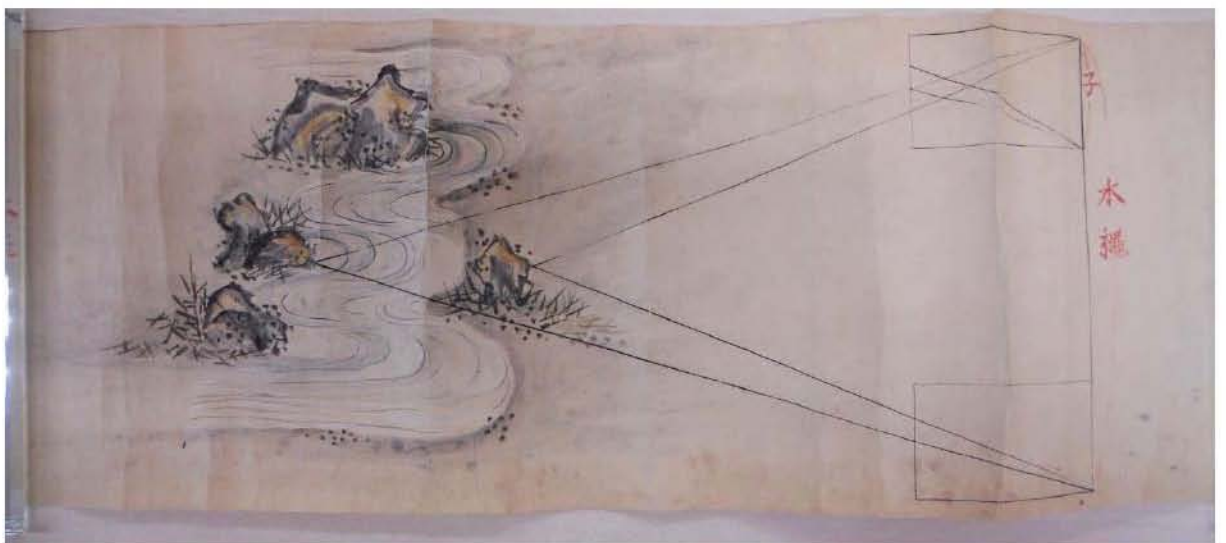
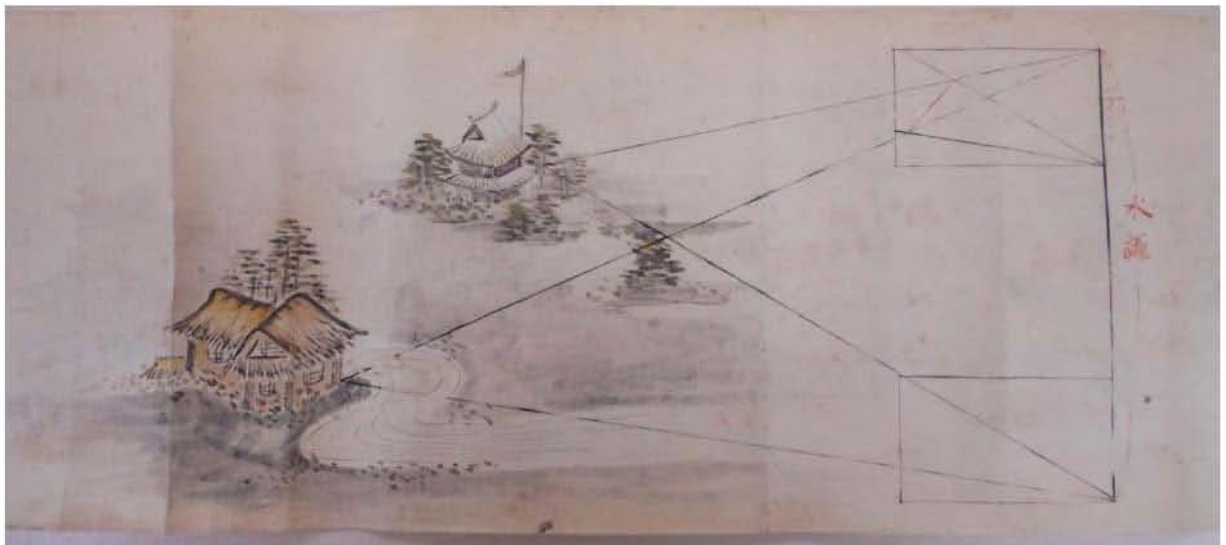
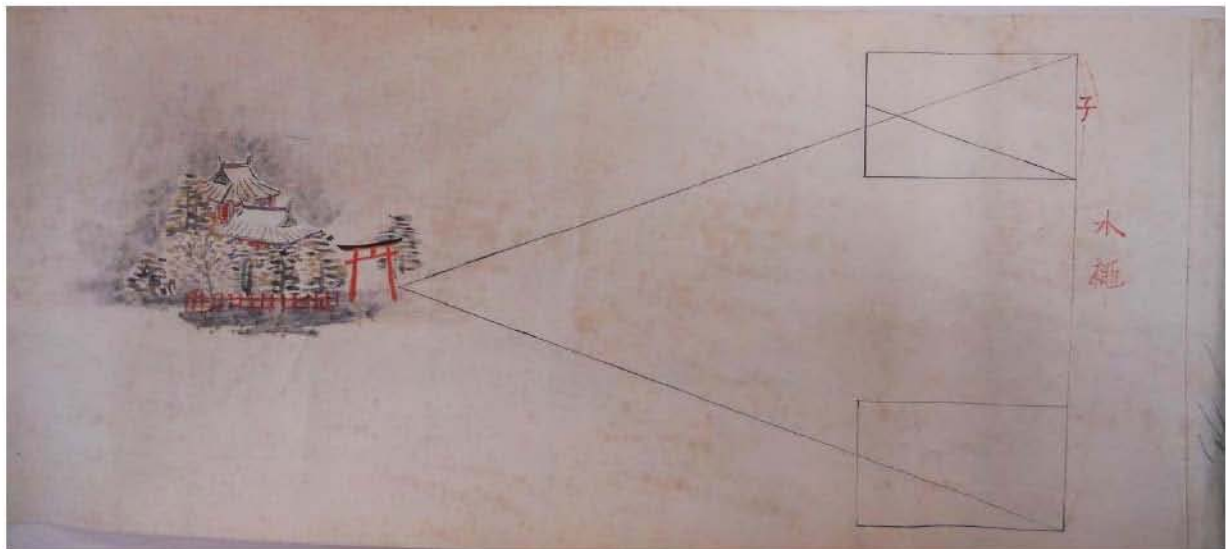
蔵書印 編修地志備用典籍

浅草文庫

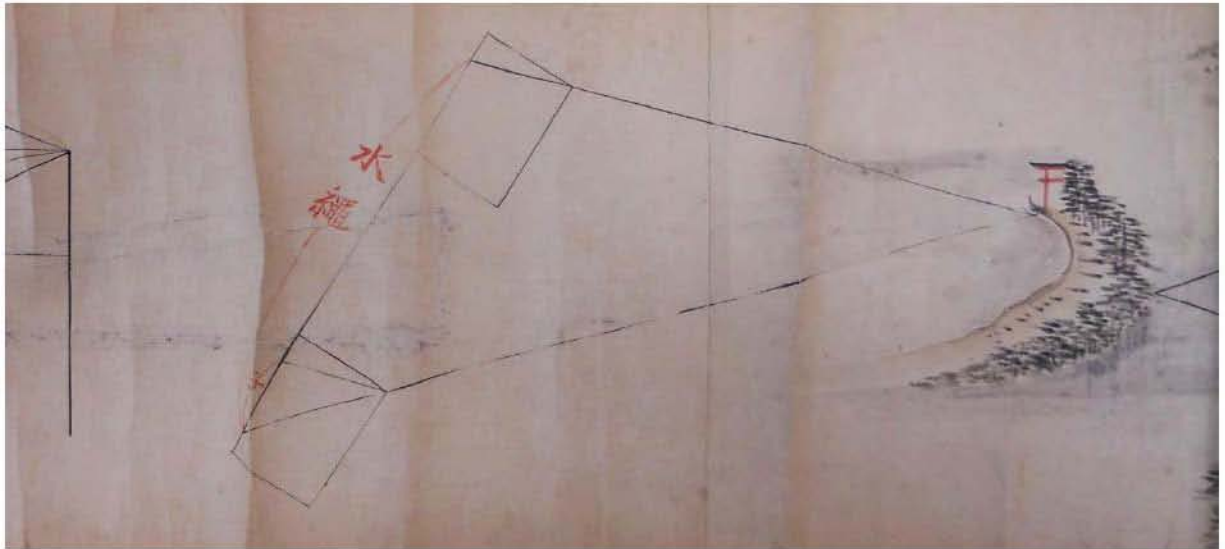
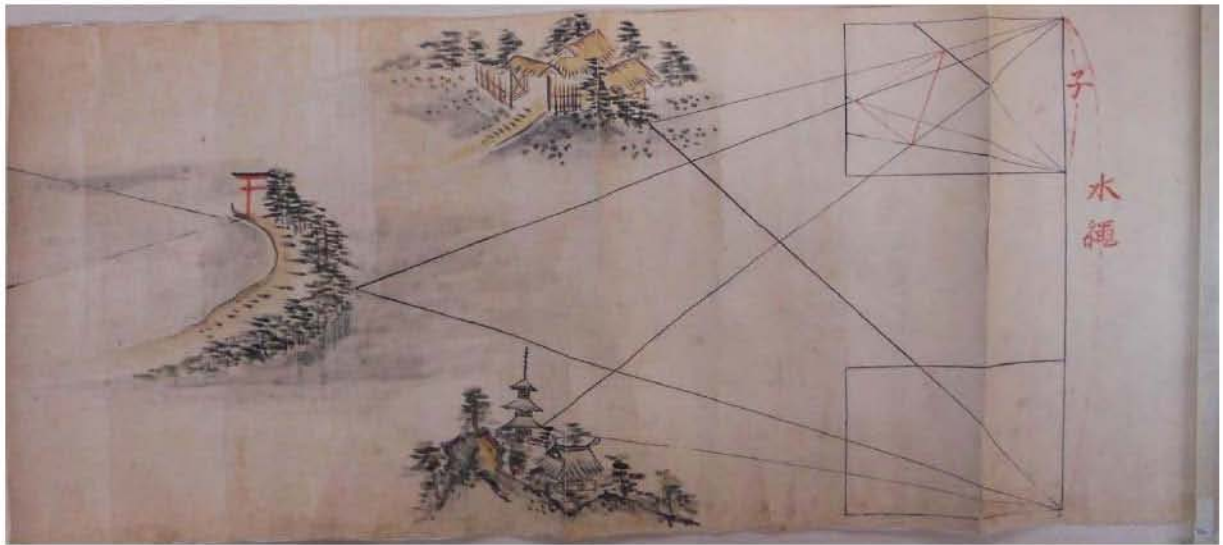
日本政府図書















天明元辛丑年 高橋小太郎  
 六月巳亥日 至時之印 子春  
 安政庚申 昌平坂

※小太郎は至時の幼名、子春は至時の字。  
 至時は明和元年（一七六四）生まれな  
 ので天明元年（一七八一）には数え年  
 で十八歳だった。  
 朱印が押してあるが、写本とされる。

（国立公文書館蔵）



## 補遺

伊能一族と

宮本茶村

宮内 敏

77号で「伊能一族と宮本茶村」と題して書かせていただいたが、事前の調査不足とページ数の制約から、書き残しがでた。  
本号で若干のスペースを頂き、書かせていただくことにする。

### 吉田松陰碑について

吉田松陰が東北遊日記の中で宮本茶村宅に泊まり交流したことを77号で紹介した。

執筆するにあたり、事前に松陰碑の計画があることを耳にしていたので潮来市教育委員会に電話を入れ確認した。担当者から市としてそのような計画は無い、そういう話も聞いていないとのことであった。

ところが77号完成後に潮来を訪れたところ碑



「吉田松陰 宮本茶村を訪う」の碑

はあったのである。それも昨年の3月に建立されたばかりであった。

碑は写真のように立派なもので宮本家の菩提寺浄土宗・大永山浄國寺の宮本茶村先生顕彰碑の隣に並んであった。

建立主体は筑波山拳兵・元治元年甲子ノ変殉難百五十年記念実行委員会とあり、潮来市は関わっていないようである。

碑は御影石製で、下部に「吉田松陰、宮本茶村を訪う」と題し、碑文は銅板に刻まれ上部の石に嵌め込まれている。

碑文には

幕末期、進んだ外国から国を守るため、水戸藩の儒学者彰考館総裁会沢正志斎は新論で尊王攘夷を表した。これは長州に広まり嘉永三年（1850）杉百合之助は新論を知り、子の吉田松陰に伝えた。松陰は嘉永四年（1851）十二月水戸を訪ね鹿島、牛堀、潮来、息栖、玉造を回遊し水戸に戻り東北遊に出た。（以下略）とある。

松陰先生著東北遊日記によると松陰は水戸に着くと最初に会沢正志斎を訪ねている。その後も会っている。松陰の東北旅行の意図を窺い知ることが出来る。

松陰は潮来宮本家を訪れ、茶村（家督は1856年長男千蔵に譲る）・千蔵と会談し宿泊した。翌日、息栖を経て銚子を訪れ海防の状況を視察し水戸に戻っている。（会誌77号P5参照）

### 水戸藩旧延方郷校の孔子聖堂

延方郷校は伊能忠敬の盟友で漢学の師であった久保木清淵と共に清淵より十七歳若年ながら宮本茶村が招聘され郷党子弟の教育に尽力した場所



ある。（関連記事77号P6参照）

この聖堂は潮来市延方内田山の現潮来高校の場所にあったが、明治十一年に潮来市辻の住民により買い取られ現在の場所に移設された。（現潮来市辻196）

郷校は茨城県における学校の始祖である。

聖堂の建築様式は本格的中国式唐様で孔子聖堂として現存するのはここだけといわれている。

屋根の左右のしやちほこは中国式で外向きである。他の造りも普通の神社仏閣では見られない様式になっているという。

現在、この聖堂は月読神社（つきよみじんじや）の本殿となっている。神様としては月読命を祀り、女の仏様としては勢至菩薩（せいしぼさつ）を祀り二十三夜尊のご本尊としている。

全国にもめずらしい神仏混淆の社で、特に女性のための神仏として子授け、安産、子育て等の願いを成就させる社として地元の人々により大切に維持されている。毎月旧暦二十三日に例祭を行っているという。私もその際配られたというお菓子を頂戴した。（茨城県指定有形文化財 二十三夜尊堂、昭和49年指定）

（案内板及び神社近くにお住まいの神社役員の方からの聞き取りによる）



茶村から佐藤一斎への交流漢詩

伊能忠敬・忠誨（忠敬の孫）と佐藤一斎との関係だが浅草源空寺の伊能忠敬墓碑に碑文（忠敬の生涯）を書いたことで一般に知られている。

宮本茶村には雙硯堂詩集と名付けられた漢詩集がある。「雙硯堂詩鈔序」は茶村の弟子の吉川三兄弟（天浦、（宮内）君浦、松浦）の宮内確（君浦）の撰である。上中下三巻からなり、その数五百六十四首である。

左図は四年前の水雲宮本先生没後一五〇年祭において宮本泰男氏が配布した資料にあった「茶村から佐藤一斎への交流漢詩」である。

ここでは地元潮来市の研究家秋永穀堂先生の注解・通訳を紹介したい。

注解

- ① 佐藤一斎…安永元年10月20日（1772）～安政6年（1859）儒学者。諱は坦。通称は捨蔵。号

宮本茶村先生から佐藤一斎先生への交流漢詩  
秋永穀堂 註解 雙硯堂詩集 卷之中  
乙未冬日、霞浦鯉魚、製魚凍一壺、遠寄裕兒、  
託以呈一齋先生、因作詩寄意、并以誠裕兒、  
寒魚出釜、亦神通、琥珀玲瓏、凝不融、莫笑中厨多技、  
擘琴高、今始詣壺公、  
列第講經、歲月悠、湖山舊夢、九年秋、對縣憑、問侯輔、  
味亦似曾、遊風雨、不、  
風雷何復、問飛騰、須記公家芳餌、恩、點額同儕、是商、  
鑑、莫詩容易、上龍門、

は一斎、美濃国岩村藩（現岐阜県恵那市）の家老の次男として江戸で生まれる。

林家の塾長となり、大学頭・林述斎と共に、多くの門下生の教育にあたる。（佐久間象山、山田方谷、渡辺崋山、横井小楠など。孫弟子には勝海舟、坂本龍馬、吉田松陰など）

② 乙未…天保六年（一八三五）茶村四三歳、佐藤一斎二十七才、千歳十七才

③ 漁冷凍…魚を特殊な方法で煮詰めて凝固させたにこりのような物

④ 裕兒（宮本千蔵）…茶村の長男、文政元年戌寅3月2日生まれ。

⑤ 琥珀玲瓏凝不融…にこりの色は琥珀色で透明でしかも融解しないという意。

⑥ 琴高…鯉に乗って昇天せりという仙人。「列仙伝」

⑦ 壺公（ここう）…中国の説話に登場する仙人。菓を売る方術の士、方術は神仏の術のこと。

通訳

乙未の年（1855）の冬の日、霞ヶ浦産の鯉をもつて壺（つばい）の魚凍（にこり）のようなものかを製し、江戸留学の伴裕（千蔵）に託して、その師、佐藤一斎先生に差し上げた。よって詩を作り心のうちを示し、そして勉強中の裕に対し訓誡を行った。案中にとれたこの鯉は料理を終わって釜から出されると、これはいかに、まさに神通力にでもあったように忽ち（たちまち）琥珀色の透明な魚凍となり、にこりて融けないものに様変わりしてしまった。台所とはなんと巧妙でずるがしこい手品のようなことをするものだと思わなくて、かの鯉魚に乗って昇天したという仙人琴高もこれからは

きつと壺公の許に向いてこの神仏の術を習うことであろうよ。

本会誌77号P3で茶村の商人としての厳しい一面を「茶村と伊能節軒のエピソード」として紹介したが、この交流漢詩からは試験に合格し入塾する茶村の長男裕兒（千蔵）に対し学問の厳しさを語り、同時に我子への期待を述べる普通の父親を見ることができないだろうか。

塾中心得添書

配布された資料には塾規三條と塾中心得添があったが、ここでは「塾中心得添書」について宮本泰男氏による解説・注解を紹介したい。

塾中心得添書

- 一、塾中一統不行儀の起居これなきやう心得肝要のこと
- 一、修行中飲酒禁断の事。
- 一、外出の節、出先申し聞かせおかれ帰塾の節早速面謁致さるべき事。
- 一、門限四ツ時過べからず。万一抛なき子細これある節は其旨断らるべし。
- 一、同塾にも申し聞、置かるべき事 但し寄宿中に候へば抛なき事たりとも度々は無用たるべき事
- 一、塾中口論が間敷義これなき様心得らるべき事 但し学問切磋につき候事は別段たるべし。



- 一、朝夕定省の外 年始八朔 歳暮、五節句は礼服にて祝儀申述らるべき事 但し四ツ時廻り候バ直ちに手間とらす夕定に句は礼服にて祝儀申述らるべき事 但し四ツ時廻り候バ直ちに手間とらす夕定に出らるべき事
  - 一、書堂塾中の掃除来客の取次茶烟盆出し候事相互に心得らるべき事 但し掃除並水鉢取り換え等は萬を立置かるべし兎角能々申し合わせ不都合なきやに致し病氣又ハ外出の節等は相互に助合るべき事
  - 一、食事の節、銘々手盛りに致さるべし、其外自用の事は都て自身にて致さるべき事
  - 一、下男女に物事申し付けられ或は町遣等頼まれ候節は其旨家内へ申し聞けられの上にて申し付らるべく候事油炭等自用品、銘々別段に調置或は申合され最合にても苦しからず候事
- 右の瑣事にも涉里候へどもこれまで仕来里の定めゆへ崩れ申さず候程に心得らるべく候
- 寛政十一己未年九月
- 此書は塾法にて候間、ご両親様御安心此れ被成候様と存写差上申候

注解

・申聞希置かれ…告げ知らせるの意  
 ・定省…昏定晨省（礼記）夕べに父母の寢床を定め、朝に父母の安否を顧みること。親孝行の意。  
 ・瑣事…些細な事。  
 ・最合…他の人と共同で物事を行うこと  
 この心得添書は長男を入塾させる茶村の親心察して「どうぞご安心してください」と直筆で書かれたものだという。  
 心得添書は実に細かいことまで丁寧に書いている。おそらく若年者から年長者まで幅広い年齢層の塾生が共同生活を送っていたのであろう。  
 「塾中口論が間敷義これなき様心得らるべき事」としながらも「但し学問切磋につき候事は別段たるべし」とある。学問においては自由で活発な議論があつたのではなからうか。

耻不若と君子小人相反図

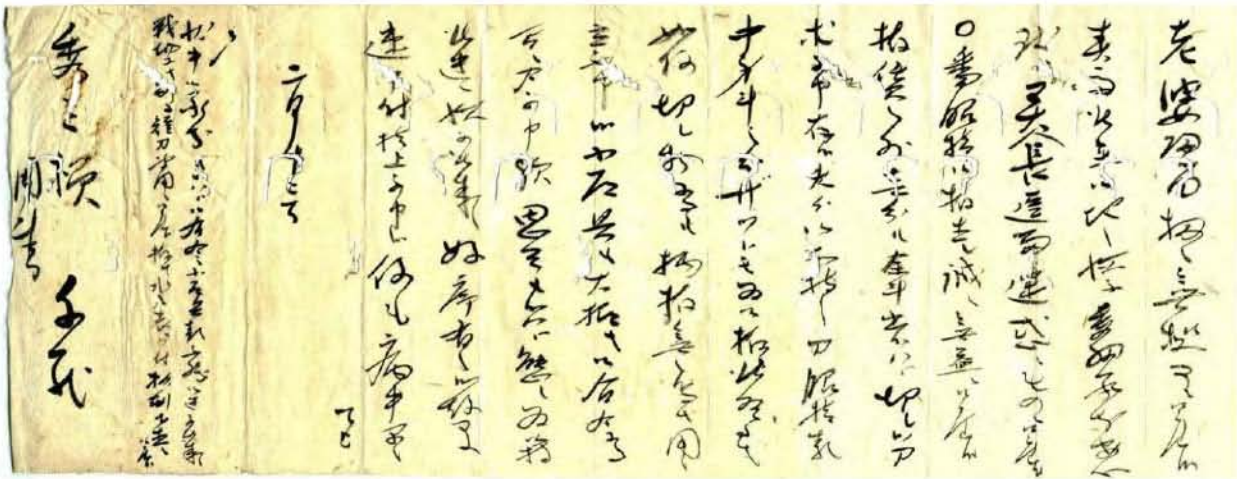
茶村の私塾耻不若（ちふじやく）には学徳を慕つて来る者多く、前出の吉川3兄弟（天浦、君浦、松浦）、伊能節軒（伊能茂左衛門家）等々、塾生は常陸・下総に広く及んでいた。  
 その塾の壁間に「君子小人相反図」を掲げていたと言われている。軸には長門縣周南撰と書かれており、縦200cm横80cmの大きな軸である。  
 萩と水戸のつながりの強さ深さを感じさせる。  
 ・山県周南（一六八七〜一七五二）は萩藩の儒学者で、荻生徂徠に師事し、享保2年（一七一七）に萩藩主毛利吉元に侍読した。また藩校明倫館の創立に参画し二代学頭となった。  
 ・藩校明倫館 長州藩の藩校。水戸藩の弘道館、岡山藩の閑谷堂と並び、日本三大学府の一つとされる。



君子小人相反図 筆者所蔵



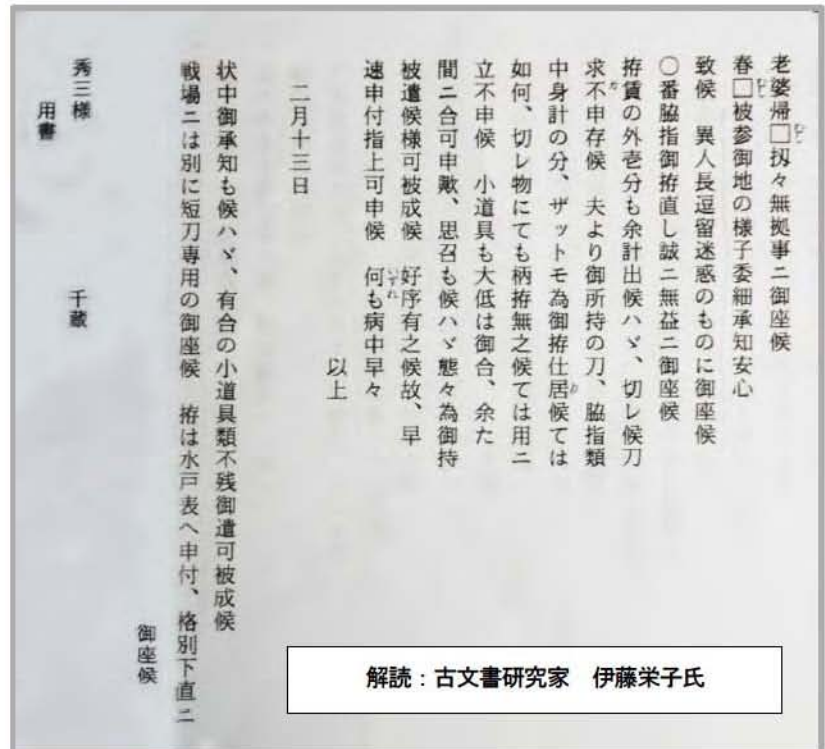
宮内秀三宛て宮本千蔵書簡



宮本千蔵書簡（宮内秀三宛て）筆者所蔵



常陸国絵図（越川氏所蔵）に加筆  
白線は慶喜水戸・銚子湊ルートへの推測



解説：古文書研究家 伊藤栄子氏

書簡は脇差の拵直し依頼に対する返書である。千蔵は刀を実用的なものとして見ていたようだ。

宮内秀三（母は茶村の姉、千蔵は従兄弟、筆者の高祖父）

宮本千蔵（茶村長男）

戊寅3月2日生、慶応3年10月没

嘉永2年3月家を継ぐ、賜俸二

嘉永6年丑、御徒士

宮本寛太郎（千蔵の長男）

函館戦争の時、水戸藩小隊長として出征し一番槍を任される。初代県会議員。

函館戦争の中心人物である榎本武揚は伊能測量隊の箱田良助の息子である。

榎本艦隊八隻の内の一隻、美香保丸は函館へ向かう途中、暴風雨に遭い銚子黒生沖で座礁し十三名の死者をだした。遭難碑は地元民により黒生海岸に建っている。

榎本は徳川慶喜の駿河移封を見届けた後、函館に向かったとされている。

その慶喜だが移封は極秘裏に行われ、謹慎先の水戸弘道館から那珂川・大洗・銚子・銚子・波崎を経て明治元年7月21日蒸気船蟠竜で清水港へ向かった。上図（白線）は慶喜の移動ルートを資料から推定したものである。

銚子は幕末史と関係が深いようだ。

（主に、田山家文書（銚子）、玄蕃日記（銚子）を参考にした）



## シーボルトの息子達とオーストリア貴族との係わり

田野 圭子

シーボルトがヨーロッパで開きたかった日本博物館が千葉県佐倉市の国立歴史民俗博物館の企画展示「よみがえれ！ シーボルトの日本博物館」(6月12日～6月14日)として開催され、東京、長崎、名古屋などの巡回が予定されています。私はヨーロッパの文化とハプスブルグ家のファンなので、知り合いになったオーストリアの元貴族とシーボルトの息子たちとの日本にかかわった交流について想い出すままを記してみます。

### 一、シーボルトの子孫

シーボルトの末裔は日本にもいらつしやつて、次男・ハインリッヒの末裔がシーボルト研究家の関口忠志氏です。また、シーボルトと楠本たきには楠本いねという娘がおり、こちらの系統は楠本姓で続いています。

シーボルトは日本を追放され、オランダに居を構えてからヘレーネと結婚。長男・アレクサンダー、次男・ハインリッヒ、他に1男2女をもうけます。

末娘(次女)のマチルデ・アポロニアはドイツの陸軍将校スタッフ・フォン・ブランデンシュタインと結婚しました。現在、ヘッセン州のブランデンシュタイン城に居住するブランデンシュタインⅡツェッペリン家はその流れです。夫のスタッフ・フォン・ブランデンシュタインは退役時、歩兵師



ブランデンシュタイン城 (ギーブ氏提供、Thomas Esch 氏撮影)

団を率いる陸軍大将でした。この一族は東デュリンゲンのオルガウの出身でブランデンシュタイン城とは約800年も離れていましたが、ブランデンシュタイン城が偶然にも自分の姓と同じ名を持つのが気に入って購入したそうです。

長男のアレクサンダーが飛行船で有名なツェッペリン伯爵の一人娘と知り合い結婚、ツェッペリン伯爵に男児がなかったため世襲の伯爵の爵位とツェッペリンの姓を名乗ることを認められました。ブランデンシュタイン城は1959年に亡くなったアレクサンダーの三男コンスタンティンが引き継ぎシーボルトの文書資料も保管されています。

シーボルトは1889年オランダに帰国し、それま

での日本研究をとりまとめ、集大成して全七巻の「日本」刊行を企画します。自費出版のため計画は難渋を極め、1891年に一旦中断します。そして追放令が解除されたので1899年日本に再来日しました。著書完成のため努力しましたが、ヨーロッパに移住した日本での執筆原稿や収集品の未着もあり、三度目の来日を望みながら1899年ミュンヘンで亡くなりました。

二人の息子は父の大書「日本」完成のために努力し、ハインリッヒは当時欧州で人気の欧州王家の日本観光に随行して、資料集めに関わりました。結果的に後のジャポニズムブームの引き起こしに貢献します。

長男アレクサンダーは1899年父と一緒に十二歳で初来日。英国公使館で通訳を勤め1891年徳川昭武に随行してパリ万博を訪れています。その後、明治政府にお雇い外国人として四〇年間雇用されました。オーストリアハンガリー帝国の男爵にもなっています。

次男ハインリッヒは兄のアレクサンダーが徳川昭武使節団のヨーロッパ派遣に同行して帰国、アレクサンダーだけはしばらく欧州にとどまったため、兄の再来日に同行して初来日しました。オーストリアハンガリー帝国公使館で通訳、書記官を経て代理公使を務め、功績を称えられて、同国の国籍、男爵位を賜りました。

兄のアレクサンダーは父の外交的才能を受け継ぎ、弟のハインリッヒは父の研究分野における才能を受け継いだようです。ハインリッヒは考古学の分野で、エドワード・S・モース博士との大森貝塚発掘やアイヌ民族研究などの競い合いは日本の考古学研究を飛躍的に発展させました。



## 二、オーストリア貴族との出会い

私は今田美奈子先生の食卓芸術サロンに通ってヨーロッパ伝統のお菓子や文化を習っていたので、あるお邸で開かれたオーストリアをテーマにしたパーティーに招待されました。「オーストリアの伝統菓子を何か・・・」と頼まれていたので、カルデナルシュニッテンなどを作って持参します。

その席で「ウイーン菓子を作れるなんて・・・」と驚かれ、日本ハプスブルグ協会の事務局長をしているギーブ・ヘルムトさんを紹介されました。ギーブさんは奥様が日本人なので日本語が上手で、名前も日本式に姓を先に書きます。

日本ハプスブルグ協会はオーストリア皇帝フランツ・ヨーゼフ一世と皇后エリザベートのひ孫にあたるマルクス・サルバートル・ハプスブルグ・ロートリンゲン大公が名誉会長を務められる由緒ある協会です。

オーストリアのハプスブルグ家は男子がいなかったので長女のマリア・テレジアが1740年に相続し、その夫のロレーヌ家(ロートリンゲン家)のフランツ・シュテファンが1745年帝位を継承しました。そのためマリア・テレジアの子供の世代以降現代に至るまで正式な家名はハプスブルグ・ロートリンゲン家です。フランス国王ルイ一六世の王妃マリー・アントワネットはこのマリア・テレジアとフランツ・シュテファンの子です。この時代は漫画ベルサイユの薔薇でご存じの通りです。ギーブさんからシーボルトを知る日本在住の元貴族に声をかけ、2003年2月10日東京のパレスホテルに集まっていたとき、ヨーロッパと伊能図のかかわり等について話し合いました。新情報はありませんでしたが、なかなかお会いできない

方々とお話が出来て印象的でした。お集まりいただいた方々は右から次の通りです。

- ・伊藤隆夫さん(日本ハプスブルグ協会会員でシーボルト、ハプスブルグ家コレクター)
- ・クーデンホーフ・カレルギー伯爵
- ・ダウブレブスキー・シュテルネック男爵
- ・田野圭子(筆者)
- ・ギーブ・ヘルムトさん(日本ハプスブルグ協会事務局長)
- ・渡辺一郎さん(伊能忠敬研究会名誉代表)
- ・山村増代さん(伊能忠敬大河ドラマ化推進協議会副会長)



東京パレスホテルにて

## 三、お集まりいただいた欧州の方の説明

・マクシミリアン・ダウブレブスキー・シュテルネック男爵

オーストリア・ハンガリー帝国駐日公使ビーゲレーベン男爵のひ孫にあたります。(日本ハプスブルグ協会の名誉会員)

・ミヒャエル・クーデンホーフ・カレルギー伯爵  
オーストリア・ハンガリー帝国代理公使ハインリヒ・クーデンホーフ・カレルギー伯爵の孫にあたります。

ミヒャエルさんのクーデンホーフ・カレルギー家は、名門中の名門です。カレルギー家は10世紀前後からのヨーロッパ最古の貴族家系であって、ハインリヒは母方のカレルギー姓を加えて最初のクーデンホーフ・カレルギー家になりました。

その名家に青山みつ(光子)が嫁いだのです。ミヒャエルさんの祖母にあたります。オーストリア・ハンガリー帝国駐日代理公使として東京に赴任してきたハインリヒ・クーデンホーフ・カレルギー伯爵に見初められた青山みつ(光子)は日本人として初めて正式な欧州貴族の妻になりました。

1860年オーストリア・ハンガリー帝国へ渡る際に明治天皇の皇后美子から「異国にいても日本人の誇りを忘れないでください」と激励されたという逸話の持ち主です。また、日本人でただ一人オーストリア皇帝フランツ・ヨーゼフ一世と会話した人物でもあります。

尋常小学校を卒業した程度の学力しかない光子は18ヶ国語を理解する夫に尽くそうと歴史、地理、数学、語学(フランス語、ドイツ語)礼儀作法など家庭教師を付けて猛勉強しました。夫の死後、光



子は財産を巡り親戚に訴訟を起こされますが勝訴し、財産を処分してウィーンへ移り、子供達に十分な教育を受けさせました。

未亡人、東洋人への偏見と戦いながら光子は子供達を立派に育てます。次男リヒャルトは1933年「パン・ヨーロッパ」を発表、今のEUの思想的礎を築いたので、欧州連合の父の一人に数えられています。そのため光子はパン・ヨーロッパの母と言われます。ハンフリー・ボガードとイングリッド・バーグマン主演映画「カサブランカ」でイングリッド・バーグマン演じるイルザの夫ラズロはリヒャルトがモデルと言われています。

光子の孫ミヒャエルは、日本研究者の父ゲオルフ博士（光子の三男）から薫陶をうけ、幼少期より日本に親しみました。そしてウィーン美術アカデミーを首席で卒業します。ナチス総統アドルフ・ヒトラーが二度受験して失敗し入学できなかった学校です。

ミヒャエルはオーストリアでは有名な画家で、オーストリア政府から2012年に教授の称号を授与されました。駐日オーストリア大使館にはミヒャエルの絵がたくさん飾られています。オーストリア皇太子フランツ・フェルデナントが1889年8月世界一周旅行中に日本に立ち寄った時、お二人の祖父、曾祖父が随行しています。ハインリヒ・フォン・シーボルトも横浜、東京、日光等を案内しています。

まさに、今回お集まりいただいたお二人の祖父、曾祖父は、シーボルトの息子達とオーストリアⅡハンガリー帝国公使館で一緒に働いていたのです。

#### 四、ハプスブルグ＝ロートリンゲン大公に挨拶、他



ウエステンホテルにて（右から2人目がハプスブルグ＝ロートリンゲン大公）

2013年4月3日、ハプスブルグ家のマルクス・サルバートル・ハプスブルグ＝ロートリンゲン大公が来日した際、ギープ・ヘルムトさんの紹介で伊能忠敬大河ドラマ化推進協議会会長の木内志郎さん、副会長の山村増代さんとともに、滞在中のウエステンホテル東京に表敬訪問しました。ボン大学の名誉教授のペーター・パンツァー先生もこ

一緒にした。パンツァー先生は2015年1月に国立歴史民俗博物館の「ドイツと日本を結ぶものー日独修好150年の歴史」展でもブランデンシュタイン・ツェッペリン氏、青木周蔵氏の子孫サルム伯爵とともに来日し協力しています。

さて「よみがえれ！シーボルトの日本博物館」は長年にわたり、シーボルト収集品を調査し、史料にもとづいて、シーボルトがヨーロッパの人たちに見て欲しかった日本を再現した展示といわれています。シーボルトの収集品は、ビュルツブルグの記念館、ミュンヘン五大陸博物館、ライデン大学日本語科、ライデン大学植物園、ライデン民族学博物館、ブランデンシュタイン城、ライデン・シーボルト記念館等多岐にわたって收藏され、現地でも簡単に見て廻るわけにはいかない巨大なものです。

まとまって、効率的に拝見できるのはまことに喜ばしいことです。

ついですが、忠敬先生没後二百年記念となる2018年には香取市で記念行事にブランデンシュタイン氏を招聘しています。珍しい展示品を伊能忠敬記念館のために御持参いただけるそうで、楽しみにしています。

シーボルトについては、色々な見方があって、ヨーロッパでも評価は分かれています。ただコレクションは膨大、多岐にわたるので、研究対象としては絶好で、多くの研究者が手をつけておりま

す。したがって見方も様々になるのでしょう。ヨーロッパに伝えようとしたシーボルトの日本研究では「恵まれた島国に住む、注目すべき民族」と日本を紹介しています。日本文化の多様性や国民性がよほど魅力的に映ったのでしょう。



伊能忠敬没後二百年記念誌発行に向けて

## ―各地の記念碑・標柱等紹介(九)―

二〇一三年秋より、全国の市町村『伊能忠敬測量日記』中の宿泊地)に、伊能忠敬関係の記念碑・案内板・標柱・史料・文献・宿所情報などを問う調査書を送り、多大なるご協力をいただいたてきました。厚くお礼を申し上げます。

今号でも、伊能忠敬と郷土の関わりに思いを寄せる多くの方々の熱意や尽力を感じつつ、北海道から九州まで、様々な記念碑・標柱・案内板等を紹介することができました。

記念誌には、すべての記念碑・案内板・標柱等を一覧表にして掲載する予定ですが、写真は一部掲載になります。そこで、会報に随時紹介することになりました。旅行や仕事で現地にお出掛けの際は、是非とも訪ねてみてください。

### 一、北海道虻田郡豊浦町

豊浦町は冷涼な北海道にあつて比較的気候が温暖な道南胆振(いぶり)管内の西端に位置している。噴火湾(内浦湾)に面して大きく南に開けた海岸線には、巨岩や断崖からなる変化に富んだダイナミックな景観がつづいている。

対岸に駒ヶ岳と渡島連山、北に蝦夷富士の異名を持つ羊蹄山やニセコ連山を眺望する風光明媚な豊浦の風景と、背後を田園と緑深い森に囲まれた豊かな自然環境は、訪れる人の心をなごませ、リフレッシュさせてくれる。

(豊浦町ホームページより)

### (1)

#### ①名称 「豊浦町歴史の道モニュメント」

#### ②碑文

#### ・正面 「伊能忠敬測量200年記念碑」

・裏面 「伊能忠敬(1745~1818) 延享二年 上総

・国山辺郡小関村生まれ(以下、省略)」

#### ③設置場所 豊浦町宇高岡 噴火湾展望公園

#### ④設置年月日 平成十一年四月二四日

#### ⑤設置者 豊浦町

#### ⑥設置の背景・経緯 伊能忠敬測量二〇〇年を記念して

#### ⑦見学の可否 随時可能

### (2)

#### ①名称 案内板 「豊浦町歴史の道彫刻公園」

#### ②説明文

・正面 「(前略)当時、開拓の途についたばかりで道路もほとんど整備されていない未開

の地を、福島町吉岡(五月一九日)から

別海町本別海(八月八日)まで約八〇〇km

の行程を八二日間で踏破しました。その困難な行程の中で、ここ豊浦町にも訪れてお

り、六月一〇日礼文華に到着してから三日

間滞在し、礼文華から虻田町に至る道が非

常に険しく難儀したと「測量日記」には記

述されています。(後略)」

③設置場所 (1)と同じ噴火湾展望公園

④設置年月日 平成十一年三月

⑤設置者 豊浦町

⑥設置の背景・経緯 伊能忠敬測量二〇〇年を記念して

⑦見学の可否 随時可能



(豊浦町教育委員会生涯学習課提供)

### 二、千葉県山武郡九十九里町

町の中心である片貝の地名は、紀州加太浦(現在の和歌山県和歌山市加太)の漁民によつて開かれたことに由来し、九十九里浜いわし漁の中心地として有名である。

「伊能忠敬出生地」として千葉県の史跡に指定されている。また、享保二〇年(一七三五)、青木昆陽によるサツマイモの試作が関東で初めて成功し、「青木昆陽不動堂甘藷試作地」として千葉県の史跡に指定され、「関東地方甘藷栽培発祥の地碑」がある。

(九十九里町ホームページ、ウィキペディア等)

### (1)

#### ①名称 記念碑 「伊能忠敬先生出生之地」

#### ②碑文前面 「伊能忠敬先生出生之地」

側面 「建設片貝町 賛助 伊能家姻戚 千葉市 稻生勘兵衛 東金町 高宮三雄」



③設置場所 九十九里町小関288 伊能忠敬記念公園

④設置年月日 昭和十一年

⑤設置者 当時の片貝町長 故高柳直吉氏、伊能忠敬研究者 中村城氏等

⑥設置の背景・経緯 世界的な偉人である伊能忠敬揺らんの地を後世に伝えるため。徳富蘇峰の筆による「伊能忠敬先生出生之地」と刻まれた記念碑が建てられた。

⑦見学の可否 随時可能



※会報三十二号で紹介済。

## (2)

①名称 銅像「伊能忠敬銅像」

②碑文 なし

③設置場所 (1)と同じ伊能忠敬記念公園

④設置年月日 平成八年二月十一日

⑤設置者 九十九里町

⑥設置の背景・経緯 伊能忠敬生誕二五〇周年記念と町制施行四〇周年の記念事業として、小関の生家跡に忠敬の銅像が建立され、公園として整備された。

⑦見学の可否 随時可能



## (3)

①名称 案内板「千葉県指定史跡 伊能忠敬出生地」

②説明文 「(前略)先生は延享二年(一七四五年)二月十一日上総国山辺郡小関村の旧家小関五郎左衛門の家に生まれる。(中略)三治郎七才のとき(宝暦元年)母は病死し、父貞恒は長男貞詮、長女フサを伴って神保家に帰り三治郎は小関家にとどまった。たまたま、小関家は漁業を営んでいたので小関納屋の小関家納屋番として起居し三治郎苦境の少年時代であった。のち宝暦十二年(一七六二年)佐原の伊能長由の養子となった。十一才までこの地で磯の香に親しんで少年時代を送ったゆかりの地である。(後略)」

③設置場所 (1)と同じ伊能忠敬記念公園

④設置年月日 昭和六十年二月十二日

⑤設置者 千葉県教育委員会

⑥設置の背景・経緯 伊能忠敬が誕生から十一歳

までを過ごしたゆかりの地であることから、昭和四四年一月十日に千葉県指定史跡となり、その後案内板が設置された。

⑦見学の可否 随時可能



(九十九里町教育委員会社会教育係提供)

## 三、福岡県みやま市

福岡県の南部に位置し、東部には御牧山、清水山などの山々が連なっている。西部には有明海の干拓によって開かれた広大な低地が広がり、全体として平坦な田園地帯となっている。

市の北東から南西へ向けて一級河川の矢部川が流れており、支流を含む河川がもたらす肥沃な土壌と豊富な水に恵まれ、自然豊かな農業のまちとして発展してきた。

(みやま市ホームページ、ウィキペディア等)

①名称 石碑「伊能忠敬測量基点之地」

②碑文 「伊能忠敬は寛政十年(西暦一八〇〇)より十七年の歳月を費して全日本地図を完



成した人で、当地方を測量して廻った砌り  
この地点を測量基点と定めた」

- ③設置場所 みやま市瀬高町下庄 新町
- ④設置年月日 平成四年五月
- ⑤設置者 瀬高町教育委員会・瀬高郷土史会
- ⑥設置の背景・経緯 薩摩街道等の調査、伊能忠敬の顕彰。
- ⑦見学の可否 随時可能



(みやま市教育委員会社会教育課提供)

#### 四、大分県別府市

九州の北東部、瀬戸内海に面した大分県の東海岸のほぼ中央に位置し、由布岳・鶴見岳の裾野がなだらかに別府湾へとつづいている。

市内には、別府八湯と呼ばれる八つの温泉エリアが点在し、日本一の湧出量と源泉数を誇り、医療、浴用などの市民生活はもとより、観光、産業などにも幅広く活用され、古くから日本を代表する温泉地として賑わう国際観光温泉文化都市である。現在は、官民協働で進める「ONSENツーリズム」の新しいまちづくりを推進している。

(別府市ホームページ、ウィキペディア等)

#### (1)

- ①名称 標柱「伊能忠敬測量史蹟」(円柱)
- ②設置場所 別府市流川四丁目交差点角地
- ③設置年月日 昭和四十六年二月十八日
- ④設置者 別府中央ライオンズクラブ
- ⑤設置の背景・経緯 不明
- ⑥見学の可否 随時可能



#### (2)

- ①名称 石碑「伊能忠敬測量史蹟」(角柱)
- ②碑文 「往時この街角に高札場あり徳川幕府禁制を掲ぐ 文化七年(一八一〇年)二月十一日伊能忠敬来りて測量をなし この処に国道元標を建つ 江戸日本橋より二百六十三里(二〇五二km) この元標より西一丁目に庄屋宅あり」と
- ③設置場所 (1)の円柱と同じ
- ④設置年月日 平成九年六月
- ⑤設置者 流川通り会
- ⑥設置の背景・経緯 不明
- ⑦見学の可否 随時可能



#### 五、佐賀県鹿島市

佐賀県の西南部に位置し、東に有明海が広がり、西は多良岳山系に囲まれ、自然環境に恵まれた地である。

二〇一二年の「伊能忠敬来鹿二百年」に際し、パンフレット「伊能忠敬でつながる鹿島と香取の不思議な縁」を作成し、様々なイベントが行われた。道の駅鹿島のポスターには「忠敬が歩いた七浦の道実測ウオーク」、「伊能御膳の再現」、「伊能太鼓の披露」といった興味深い催事が並ぶ。

さらに今年四月二三日、千葉県香取市と「友好都市協定」を締結し、災害時における相互協力を約束した。両市の縁は約四百年前にさかのぼる。佐賀藩の支藩であった鹿島藩は、鍋島忠茂が徳川秀忠に忠勤を尽くしたことから、現在の香取市上小川一帯五千石を与えられ、その後、佐賀藩より二万石分与され、計二万五千石で立藩した。

香取市上小川の円通寺には鹿島藩ゆかりの墓所があり、初代鹿島藩主である鍋島忠茂をはじめと



交通の要衝、流川通りに設置された円柱と角柱 (前田幸子会員撮影)

(別府市教育委員会生涯学習課提供)



する五基の墓石が建っている。

(鹿島市・香取市ホームページ・ウィキペディア等)



〔道の駅鹿島〕ブログ 2012.9.24より

# (1)

①名称 看板と案内板「伊能忠敬一行宿泊の地」

②看板 「多良海道 旅籠 諸国屋 伊能忠敬卿御一行宿泊の地」

案内板 「伊能忠敬」一行宿泊の地

「江戸時代の測量家で、近代日本地図を作製した伊能忠敬一行は、文化九年(一八二二)十月二十五日、鹿島村本町「徳人屋忠右衛門、諸国屋茂平、小間物屋庄五郎」宅に到着してわらじを脱いだ。(後略)平成元年十月吉日 諸国屋亭主敬白」

③設置場所 鹿島市大字中村 16-1

④設置年月日 平成元年十月

⑤設置者 諸国屋

⑥設置の背景・経緯 諸国屋が旅館として営業していた時代に設置したもの

⑦見学の可否 随時可能



# (2)

①名称 「伊能忠敬測量隊音成浦村宿舎跡」

②説明文 「(前略) 文化九年(一八二二)十月二十六日、浜方面から七浦に入った伊能隊は、音成浦村字中門のここ音成公民館付近に宿泊しました。(後略)」

③設置場所 鹿島市大字音成5-1 音成公民館

④設置年月日 平成二十四年八月

⑤設置団体 伊能忠敬来鹿二百年記念事業実行委員会

⑥設置の背景・経緯 伊能忠敬来鹿二百年記念事業の一環として設置

⑦出費団体等 伊能忠敬来鹿二百年記念事業実行委員会

⑧見学の可否 随時可能

# (3)

①名称 「鹿島宿継場跡」

②説明文 「江戸時代、この辺りに鹿島宿の継場がありました。文化九年(一八二二)十月二十五日、有明方面から鹿島に入った伊能隊は、ここ北鹿島本町に宿泊しました。(後略)」

③設置場所 鹿島市大字中村28 本町公民館

④⑤⑥⑦⑧ (2)に同じ





(4)

①名称 「浜番所跡」

②説明文 「江戸時代、この辺りに番所がありました。文化九年(一八二二)十月二十六日、鹿島方面から沿岸部を測量しながら浜に入った副隊長の坂部貞兵衛は、右手にこの番所を見ながら通過し、浜川を渡っています。(後略)」

③設置場所 鹿島市浜町981 大明神  
④⑧ (2)に同じ



(鹿島市教育委員会生涯学習課提供)

六、熊本県阿蘇市

熊本県東北部、阿蘇地域の中央に位置する市。阿蘇カルデラの中心に位置し、北外輪山の大観峰から阿蘇五岳の眺望は、四季を通じ好評で、特に雲海に浮かぶ阿蘇五岳は必見である。

坂梨宿は、熊本から豊後街道を十三里程大分へ向かった、三番目の宿場町。阿蘇東外輪の麓に位置し、昭和初期まで宿場町として栄えた面影を今も残す。常夜灯や軒灯の並ぶ格子戸や鎧壁、大矢来を持つ建物、生け垣や板塀、清水の流れる水場もある。  
(阿蘇市ホームページ、ウィキペディア等)

①名称 石碑「伊能忠敬宿泊の地」

②碑文 「文化七年(一八一〇)十二月十六日、内牧から小池野まで測量して、本陣として宿泊。この夜晴天で天文観測を行う。翌十七日も大利村界まで測り寄宿。文化九年六月二十四日には上色見から日尾峠を越えて再び宿泊する。」

③設置場所 阿蘇市一の宮町坂梨1985 上町公民館付近  
④設置年月日 平成二十二年四月十三日  
⑤設置団体 坂梨宿場會  
⑥設置の背景・経緯 坂梨宿場會十一周年記念、くまもと県民文化賞受賞記念(平成十八年三月二十四日)  
⑦出費団体 坂梨宿場會  
⑧見学の可否 随時可能



※「高山彦九郎」、「伊能忠敬」、「勝海舟と坂本龍馬」の三基の記念碑が街道筋に並んで建っている。

(阿蘇市教育委員会教育課提供)

七、鹿児島県南九州市

薩摩半島の南部に位置し、平成十九年十二月に、穎娃(えい)町、知覧町、川辺町が合併し誕生した。海岸線からは、水平線はるかに屋久島、竹島、硫黄島、黒島などの島影を一望におさめることができる。内陸部では水田と茶畑が広がり、「知覧茶」を産出している。

武家屋敷庭園で知られる知覧には、太平洋戦争末期、陸軍の特攻基地が置かれていた。現在、「知覧特攻平和会館」を訪れる人も多い。

(1)

①名称 石碑「伊能忠敬先生絶讃の地碑」

②碑文

・正面 「伊能忠敬先生絶讃の地 内閣総理大臣 鳩山一郎書」  
・裏面 「伊能忠敬先生は千葉県佐原市の生れで全国を測量して最初の日本地図を完成した人であるが、此の地には今から百六拾年前 文化七年七月に來られて此所長手崎(番所)の雄大明燭なる風光に驚嘆し「蓋し天下の絶景なり」と称讃されたと言ふことである 後世先生の偉業を讃え此の碑を建てるものである

昭和三十一年二月 別府区観光委員会  
③設置場所 南九州市穎娃(えい)町別府 番所鼻自然公園  
④設置年月日 昭和三十一年二月  
⑤設置者・設置団体 別府区観光委員会  
⑥設置の背景 伊能忠敬がこの地で「けだし天下の絶景なり」と賞讃したことを記念して建立



⑦見学の可否 随時可能



開聞岳(薩摩富士)を望む「絶景」の地  
番所鼻



番所鼻からの大パノラマ(右端に案内板がある)



伊能忠敬先生絶讃の地碑」裏面  
(鷺沢淑子氏撮影)

(2)

①名称 案内板「伊能忠敬・絶景の碑と開聞岳」

②説明文 「江戸時代、徒歩で全国を廻り日本地図を作成した伊能忠敬は、番所鼻より望む東シナ海に浮かぶ開聞岳と岩礁の曲線美がおり成す景勝を見て「けだし天下の絶景なり」と称賛したとされます。この地に立つ石碑はこれを記念し昭和三十一年に建立されたもので、当時の首相・鳩山一郎の書による「伊能忠敬先生絶賛の地」との文字が刻まれています。」

③設置場所 (1)と同じ番所鼻自然公園

④設置年月日 二〇一二年三月

⑤設置者 鹿児島県

⑥設置の背景・経緯 二〇一一年以降の番所鼻自然公園の再整備事業で来訪者が増加しつつあったため、地元で語り継がれる「天下の絶景」のエピソードと合わせ、石碑の由来を説明する看板を設置することとなったもの。「海の池」と称される付近の自然景勝スポット説明の案内板も同時に設置されている。

⑦出費者 鹿児島県(魅力ある観光地づくり事業)

⑧見学の可否 随時可能



南九州市教育委員会文化財課提供

※鳩山一郎内閣総理大臣の揮毫の経緯は不明だが、『頼娃町郷土誌』には、石碑建立を提案した人物として蓮子休次郎の名が記されている。

※「けだし天下の絶景なり」の根拠となる文献はないが、『三國名勝図絵第一巻』(昭和五十七年八月発行)には、伊能忠敬が当地を称賛したと書かれている。『測量日記』には「天下の絶景」という記述はないが、測量の際に忠敬が感嘆し、それが地元で語り伝えられてきたということも考えられる。

風景については、『測量日記』文化七年七月一五日の項に「坊津岬は九州一の絶景と云伝。八景あり。眺望するに九州一とも云難し。」と、忠敬の私感が記載されている。(河崎)

八、鹿児島県熊毛郡南種子町

大隅諸島の一つである種子島の南端に位置し、温暖な気候に恵まれ、稲作が盛んに行われている。一五四三年(天文十二)、ポルトガル人が乗った明国船が最南端の門倉岬に漂着し、日本に初めて鉄砲が伝えられたことで知られる。

現在は、国内で唯一の商業ロケット打上施設「JAXA 種子島宇宙センター」があり、歴史と未来が共存する町といえよう。島間港は南種子町の海の玄関口として、またロケットの荷揚げ港として重要な役割を果たしている。伊能忠敬もこの港から種子島測量を開始した。

(南種子町ホームページ、ウィキペディア等)

①名称 石碑「伊能忠敬種子島測量上陸の地の碑」

②碑文 「島間港は伊能忠敬の種子島測量開始の地である。文化元年(一八二二年)四月二十九日屋久島を経て来島しこの島間に上陸して、五月一日から南北領両隊に分かれて測量を開始した。測量隊員は伊能忠敬以下十六名、島津家役人一〇七名、種子島家役人八六名、総数二〇九名であった。種子島の測量には十六日を要した。この測量の結果、初めて種子島の里程や地形が明らかになった。

平成七年一月 南種子町」

③設置場所 南種子町島間一帯地 道路敷地

④設置年月日 平成七年一月



- ⑤設置者 南種子町
- ⑥設置の背景・経緯 不明
- ⑦見学の可否 随時可能



(南種子町教育委員会社会教育課提供)

あとがき

今回は、八市町の記念碑・案内板等十七点を紹介しました。

豊浦町教育委員会生涯学習課の渡邊様、九十九里町教育委員会社会教育係の古川様、みやま市教育委員会社会教育課の東様、別府市教育委員会生涯学習課の塚崎様、阿蘇市教育委員会教育課の入江様、鹿島市教育委員会生涯学習課の加田様、南九州市教育委員会文化財課の大山様、南種子町教育委員会社会教育課の石堂様には大変お世話になりました、ありがとうございます。

宮崎県国富町に天保八年建立の石碑があります。その碑文に伊能測量のことが刻まれているという情報をいただきました。それが確かなら、岩手県釜石市唐丹町の「測量之碑」(文化十一年に葛西品丕が建立)に次いで古い記録ということになります。現在、次号で紹介すべく碑文を解説中です。ご期待ください。

(没後二百年記念誌編集担当 河崎倫代)

## 渡辺名譽代表の世界紀行 地球を歩く

### ビクトリアの車マナー(カナダ)

カナダの西海岸、バンクーバー島の南端にあるBC州の首都ビクトリアは、美しい町として有名であるが、車のマナーがすごくいい。横断歩道で待っている車は必ず止まって歩行者を渡してくれる。歩行者はThank Youを示す何らかの会釈をして渡る。当然のマナーだが、これがすごく良く守られているのに感心する。こちらが渡りかけていないのに、大きな市バスがスーツと止まって渡れ、というのには恐縮してしまう。文化の違いなのか、社会教育というか、習慣といえいいのか、恐らく子供のころから、そうして育っているから、至極当然と思っているらしい。

それから、市バスに乗って降りるとき、乗客は必ずサンキューといって降る。入り口から降りる人は勿論だが、中央の出口から降りる人もサンキューといって降る。運転手は、中央出口から降りる客に、いちいち、前を向いたまま、グッバイまたはバイと返事をする。入り口から降りる人には勿論である。市民の足、公共サービスを



ビクトリアの  
2階建ての市バス

利用させて貰うという考えからなのだろう。提供側と利用側の気持ちが良い合っている。

然らば料金は、となると全市を2区間にわけ、1区は2カナダドル(約300円) 2区だと3.75カナダドルだから300円弱になる。正規料金はそう安いわけではない。しかし、たびたび乗って見ていると、料金を入れている人はほんの一部である。大部分は磁気カードの定期をリードに通すだけだ。私達は旅行者なので、一日パスを求めたが、大人で一日6ドル、シニアは4ドルである。往復乗れば元が取れる計算だ。1ヶ月ならシニア37ドルとなる。というわけで、実質運賃は大変安い。やっぱり公共サービスなのだと思う。そして、サンキュー、バイでバスは走り廻っている。

狭い日本で、どうして同じようなことができないのかは、全く分からない。また、行き先とか乗り換えのことをよく聞いたが、運転手は皆、親切で気がいい。ビクトリア大学で広大な敷地内にある庭園にゆくため、学内終点でバスの乗り方を、休憩中の運転手に聞き、乗るバスを教えてもらってそこに行き、庭園に行きたいのだが降りる場所を教えてくれといっていると、そこえ前に教えてくれた運転手がやってきて、このお客さん○○Cardにゆきたいといっているからと引き継いでくれた。

地名の発音は難しい。いつも地名は印刷物またはメモを示して尋ねるのだが、うまくゆくか、気にして説明に来てくれたらしい。そんなことから、運転手に降りる停留所を教えてもらおうとか、道を聞くなどは、いくらでも付き合ってくれる。分かるまで聞けばいい。決していやな顔はしなかった。

(06.8.16.)



## 忠敬先生没後二百年記念事業

渡辺一郎

研究会の河崎チームが二百年記念誌の刊行にむけて精力的に準備を進めています。その他の事業はなかなか固まりません。

そうはいっても、心の準備も必要なので、わかっている範囲で状況をお知らせします。

一、香取駅前に忠敬銅像を建立 会員の木内志郎さんが委員長になって寄付を募って建立することが決まっています。作家は勝海舟像を作った木内さんが想定されています。

二、観福寺で墓前祭 五月十七日に観福寺で催行されます。

三、佐原にシーボルト子孫のプランデンシュタイン・ツエッペリンさんを招聘してシンポジウムを開催 その際に同家に伝わる秘宝の一部が記念館で公開されます。時期は未定ですが、上期に墓前祭に引き続き催行の見込みです。

## 四、伊能測量協力者顕彰大会

右各項のタイミングで考えると、私共が提案している、伊能測量の現場で大変お世話になった地元の方々にお礼を申し上げる会は、二〇一八年の秋、一〇月ころがいいかと考えています。

七月二七日に香取支部長の伊能敏雄市議と市長さんのところに伺い、御了解をいただいた大綱は次のとおりです。

## 伊能測量協力者顕彰大会開催要領

### 1. 概要

香取市に設ける伊能忠敬没後二百年記念事業推進組織の下に、香取市と伊能忠敬研究会、大河推進協議会、その他有志団体により伊能測量協力者顕彰会を組成し、報道機関を通じて全国的に周知して、伊能測量協力者子孫に呼びかけ、名乗り出を待ちます。

集まれる方々には東京の然るべき会場にお集まりいただき、二百年目ながら伊能測量協力者顕彰式をおこない、御子孫の方々に先祖に対する功績感謝状等を差し上げます。

都合の悪い方々は代理参加、あるいは名簿参加とし、名簿に掲載のうえ、同じように功績感謝状を贈呈或いは郵送します。

### 2. 講演会、シンポジウムの開催

東京の然るべき会場で講演会・シンポジウムを二・三回開催し、その打ち上げとして顕彰式を開きたいと考えています。

### 3. 関係自治体その他の関係者への呼びかけ

伊能隊が宿泊した町村浦方を現在の行政区画になおすと、83市町村となります。これらにも声をかけ関係者の出席をお願いしたいと思います。

同様に、測量隊員の子孫、幕府の伊能測量関係者の末裔、忠敬縁故の自治体（九十九里町、横芝光町、東金市、多古町）にも広く声をかけた

### 4. 伊能忠敬研究会

会員の方は出来るだけ御出席いただき、ホスト役として顕彰大会の運営に御協力いただきたい。ただし会費制です。また、あらためて寄付金も募りますので御協力をお願いします。

研究会香取支部の皆様には、格段の御援助をお願いします。

### 5. 一般参加

一般の方々もどなたでも歓迎です。友人、縁故者など、忠敬ファン

をお誘いください。

### 6. 伊能測量協力者顕彰大会会場

東京の便利な場所に設定し、二日目は希望により香取市・九十九里浜等の見学を組み込む。

### 7. 経費

子孫の方の参加費は無料とする予定。香取市に経費の助成をお願いしている。香取市では、ふるさと納税の対象項目に忠敬没後二百年記念事業を加えている。

### 8. 広報活動

伊能忠敬研究会とイノペディアが中心となって、東京の報道各社に働きかけ、PR活動をおこなう。

### 9. その他

源空寺墓前祭は残念ながら未検討です。どなたか、手をあげて旗を振っていただけませんか。源空寺には立派な仏殿があります。そこで、回向、追悼講演のあと食事会といった段取りだと思います。



平成二十八年度  
九州支部例会報告

九州支部長  
石川清一

恒例の九州支部例会が平成28年6月18日(土)午後1時から福岡市立南市民センターにて、遠くは長崎県、山口県から会員15名、ゲスト参加7名(伊能測量関係者子孫の方2名、入会予定者等5名)計22名の出席を得て開催しました。

開会の初めに石川支部長より鈴木純子代表理事からの伊能忠敬没後200年記念事業への協力をお願い



と、九州支部への激励のメッセージを披露した後、支部長より先般6月4〜5日熱海市で開かれた本部総会及び関連行事の概略を報告した。

続いて講演(1)として九州支部が本部と共同で取組んだ4月18日(月)福岡市で開催の「伊能測量旅程・人物全覽データベース紹介と講演の集い」の経緯や当日の模様の報告を井上事務局長、馬場良平会員が行った(本件については伊能研究79号61頁掲載の九州支部報告を参照ください)。

続いて講演(2)中野登会員による「海賊と言われた男、富永傳次兵衛と伊能忠敬」があり、更に中野会員の多彩な趣味の一端の披露があった。

休憩後講演(3)として池田一樹会員による「山陰浜田、庄屋斎藤家訪問について」があり経緯等も含め詳しい話をされた。次いで卓話として特別参加の「伊能忠敬測量200周年の会(おんが、むなかつ、かすや)」代表石津宏介氏による福岡

県福津市における活動の紹介があった。

日程も順調に進み井上事務局長による会計報告、遠藤薫会員の監査報告、最後に支部長より会員動向、事務連絡を行い閉会した。

終了後恒例の懇親会を会場近くの「木曽路」で開き、近況スピーチ等盛り上がり大いに懇親が深まりました。お忙しい中、丸一日お疲れさまでした。



平成28年度 伊能忠敬研究会九州支部例会  
H28.6.18 福岡市立南市民センターにて

伊能忠敬の原寸大復元大図

フロア展

菱山 剛秀

8月6日(土)と7日(日)の二日間にわたり、専修大学生田キャンパスで「伊能忠敬の原寸大復元大図フロア展」が開催された。

展示会場の第1体育館の床には、東北から九州が、体育館に入りきらなかった北海道地区は、9号館5階のアトリウム床に合計二百十四枚分の伊能大図が敷き詰められて展示されていた。

展示されていた伊能大図は、国内に現存するもののほか、米国議会図書館に所蔵されている明治初期に陸地測量部が模写した非彩色の図をコンピュータグラフィックスで着色復元したもので、全体が作成当時の伊能図を再現するよう調整されたものである。

また、第1体育館の伊能大図を展示した空白域には、フランスで発見された伊能中図6枚と東京国立博物館が所蔵する伊能小図3枚の複製図が展示され、フロアの周囲には、伊能図や伊能忠敬の測量に関する説明パネルも展示されており、伊能図を理解するうえで非常に分かりやすい展示であった。







資料

「伊能忠敬測量隊の足跡をたどる」連載第十五回

伊能忠敬銅像報告書「伊能忠敬の足跡」の改訂増補版

監修 渡辺一郎

編著 井上辰男

【第七次測量】（九州第一次） 甌島列島く天草諸島 自 文化7年4月22日 至 文化7年9月29日

文化7年8月	宿泊日 旧暦	宿泊地	現市町村名	宿泊宅	特記 天体観測	大図番号
1	(8. 30)	上甌島里村	鹿児島県 薩摩川内市	本陣浄土宗 旭宝山西昌寺 郷土原田五郎兵衛	市来湊村浦町より 乗船 着後直に明二日夜木星小星 凌犯測量の用意を成す。恒星測定	二二二
2	( 31)	同	同	同	同所逗留測 里村測所より番所前 字松原 飛切浜を 歴て松島崎迄測る。射手崎 近島 野島一周を測る。此 夜木星と二小星凌犯あり一星は測る。一星は曇り濛 氣にて不測 宵より曉迄測る	二二二
3	(9. 1)	同	同	同	同所逗留 終夜測量に付一同休息 此夜亦晴天 恒星 を測る	
4	( 2)	同	同	同	同所逗留測 番所前より字簗懸崎を歴て里村字茅牟田 迄測る。此夜木星と小星凌犯測る。木星出地濛氣おお く不測	二二二
5	( 3)	同 小島村	同 薩摩川内市	本陣甚左衛門 郷兵衛 嘉左衛門	里村字松原より 横切字園山西ノ浜を歴て字松原迄測 る。字園山より長目浜を歴て瀬上村字魚待崎迄測る。長 目浜より浜切瀬上村字キス河原を歴て字二子迄測る。	二二二
6	( 4)	同	同	同	同所逗留測 字二子より字上ヶ鞍を歴て瀬上村字魚待 崎迄測る	二二二
7	( 5)	同 平村	同	本陣利右衛門 千助 徳左衛門	瀬上村字キスコより 中甌村字中河原を歴て縄立ノ帆 より中島北側迄渡 東側を中島南側迄測る。それより 平村小池鼻迄渡 それより平村本陣を歴て矢崎迄測 る。恒星測定	二二二
8	( 6)	同 平村	同	同	同所逗留測 中島北側より西側を中島南側迄測る。中 甌村辺田串より字鞍妻崎を歴て里村界茅牟田崎迄測 る。平村字矢崎より字葵崎を歴て字都々迄測る	二二二
9	( 7)	下甌島伊牟田村	同 薩摩川内市	本陣郷土 梶原八郎左衛門 郷土梶原五兵衛 百姓伝治衛門	平村字下津々より 字平河内を歴て字沖ノ串迄測る。 恒星測定	二二二



宿泊日 旧暦	(西暦)	宿泊地	現市町村名	宿泊宅	特記 天体観測	大図番号
21 *	(19)	羽島村羽島浦	同 串木野市	浦人由右衛門 伝蔵	串木野浦より五反田川南縁を歴て 羽島浦を過ぎ 羽島村字宮田越迄測る 恒星測定	二一〇
20	(18)	同	同	同	同所逗留 曆辰 書状渡す。薩州贈物あり 琉球袖等 外に野元嘉三治より元平鍛の差小刀 忠敬 坂部 二本 宛被送	
19	(17)	串木野村串木浜	同 串木野市	本陣辰右衛門 伝之助	里村より一同乗船 恒星測定	二一〇
18	(16)	上甕島里村	同 薩摩川内市	本陣浄土宗 旭宝山西昌寺 郷土原田五郎兵衛	里村 向乗船の所 北風弥強 通船難成 中甕島村 着 船 それより陸路 木星小星を測る	二一二
17	(15)	同 青瀬村	同 薩摩川内市	本陣青瀬村会所 百姓銀左衛門 百姓周左衛門	瀬々浦村本陣前より青瀬峠を越え青瀬村本陣前迄横 切りを測る	二一二
16	(14)	同	同	同	片野浦村海辺より 海辺の山を越え字早崎手前迄測る 瀬々浦村本陣より海辺際の際の山越 字内ノ河内を過ぎ伊牟田中ノ浦の山上迄測る 恒星測定	二一二
15	(13)	同	同	同	同所逗留測 手打村字大串より片野浦村字早崎前迄 測る	二一二
14	(12)	同 瀬々浦村	同 薩摩川内市	清八 庄助 仲兵衛	片野浦村海辺より本道を瀬々浦本陣迄測る	二一二
13	(11)	同 浜市浦	同 薩摩川内市	本陣織右衛門 金兵衛	青瀬村瀬尾崎より 手打村字浜ノ浦を歴て手打崎を回 り字石垣迄測る 字浜ノ浦より横切 手打村を過ぎ字 大串迄測る 恒星測定	二一二
12	(10)	同 青瀬村	同 薩摩川内市	本陣青瀬村会所 百姓銀左衛門 百姓周左衛門	長浜村字芦浜より青瀬村字江崎 青瀬村海辺測所を 歴て瀬尾崎迄測る	二一二
11	(9)	同	同	同	同所逗留測 止宿前下浜より字東引切 字シゲ浦を 歴て長浜村字芦浜迄測る	二一二
10	(8)	同	同	同	木星測量に付 同所逗留測 明六ツ前より測る 夜明 不測 止宿前下浜より津布羅を回り 字下り山後を歴 て字中ノ浦迄測る 西引切より東引切迄測 恒星測定	二一二



宿泊日 旧暦	(西暦)	宿泊地	現市町村名	宿泊宅	特記 天体観測	大図番号
22 *	(20)	網津村枝京泊浦	同 薩摩川内市	浦人小倉平兵衛	羽島村字宮田越より字土川を歴て 久見崎村字黒崎迄測る 恒星測定	二〇八
23 *	(21)	同	同	同	同所逗留測 京泊浦止宿前より川内川口北端を歴て川内川を渡り久見崎村字黒崎迄測る 京泊浦止宿前より川内川北側を字月屋鼻迄測 船間島を一周を測る	二〇八
24 *	(22)	西方村	同 薩摩川内市	村会所 亭主分浦人庄八	川内川口北端より西方村を歴て 阿久根村字尻なし迄測る	二〇八
25 *	(23)	阿久根村浦町	同 阿久根市	本陣源兵衛 吉右衛門	阿久根村字尻なしより字クビレの松迄測る	二〇八
26 *	(24)	同	同	同	同所逗留測 大島一周を測る 桑島半周測 字クビレの松より岬を回り字クビレの松に繋ぐ それより海辺岩の上迄測る	二〇八
27 *	(25)	同	同	同	同所逗留測 昨日打留の岩の上より海岸際の山上を倉津迄測る それより海岸を阿久根浦町下浜を歴て字波留黒崎迄測る 恒星測定	二〇八
28 *	(26)	脇元村	同 始良町	百姓李之助	黒崎より字赤瀬川を歴て脇元村迄測る 恒星測定	二〇八
29 *	(27)	知識村字西目黒	同 出水市	源左衛門 喜太郎	脇元村浜辺より知識村字西目黒を歴て仕越測る 無名島一周を測る 此村と長島の間甚狭し 隼人の瀬戸 世人黒の瀬戸共い	二〇八
30 *	(28)	蔵島字中村	同 出水市	久兵衛 善太郎	昨日の仕越より知識村字江内迄測る それより蔵島渡る 恒星測定	二〇八
文化7年9月 (1810)						
1 *	(9.29)	蔵島字中村	鹿児島県出水市	久兵衛 善太郎	同所逗留測 桂島二島 蔵島共に一周を測る 字江内より字尾野島迄測る	二〇八
2 *	(30)	米ノ津浦町	同 出水市	善六 長十郎	字尾野島より知識村字福之江を歴て米ノ津浦町薩州旅館角迄測る 恒星測定 暦局書状熊本より持参	二〇八
3 *	(10.1)	同	同	同	同所逗留測 米ノ津浦町薩州旅館角より薩州切通村肥後神川村界迄測る 国界に小川あり 境川という	二〇八
4 *	(2)	長島塩追浦	同 長島町		米ノ津浦町より一同乗船	二〇三



宿泊日 旧暦	(西暦)	宿泊地	現市町村名	宿泊宅	特記 天体観測	大図番号
5 *	( 3 )	同 加世堂浦	同 長島町	本陣与左衛門 新蔵		二〇三
6 *	( 4 )	同 唐隈村	同 長島町	本陣市郎 戸左衛門		二〇三
7 *	( 5 )	同 城河内村	同 長島町	禅宗長光寺	恒星測定	二〇三
8 *	( 6 )	長島 蔵本村	同 長島町	百姓住助 佐五右衛	恒星測定	二〇三
9 *	( 7 )	同 浦底村	同 長島町	百姓主左衛門		二〇三
10 *	( 8 )	長島 三船村	同 長島町	早左衛門	恒星測定	二〇三
11 *	( 9 )	同	同	新右衛門 新次郎	同所逗留測 クツワ島 野島共に一周を測る	二〇三
12 *	( 10 )	同	同	同	同所逗留測 三船村より臼井村迄測る 竹島一周を測る	二〇三
13 *	( 11 )	伊唐島 和行浦	同 長島町	長右衛門 長五市	臼井村より赤崎鼻を歴て塩追浦迄測る 伊唐島 渡湊入江を測る 恒星測定	二〇三
14 *	( 12 )	同	同	同	同所逗留測 伊唐島一周を測る	二〇三
15 *	( 13 )	獅子島字 堀ノ串	同 長島町	吉兵衛 戸右衛門	所島一周測 獅子島鷹之口前より字片側の前迄測る 鷹之口前より字立石鼻迄測る	二〇三
16 *	( 14 )	同	同	同	同所逗留測 獅子島字立石鼻より字御所浦迄測る 無名島一周を測る	二〇三
17 *	( 15 )	同	同	同	同所逗留測 獅子島字片側の前より字御所浦迄測る 江戸暦局行書状を渡す	二〇三
18 *	( 16 )	下島 大多尾村	熊本県天草市	庄屋武部利左衛門 百姓宇多治	獅子島より一同乗船 恒星測定	二〇三
19 *	( 17 )	同	同	同	同所逗留測 太田尾村より北高根字丸瀬迄測る	
【支隊】						
8月21日	( 9 19 )	市来湊村 浦町	同いちき串木野市	浦人善吉 十右衛門	串木野浦 五反田川南縁より串木野市来湊村界迄測る	二一〇
22	( 20 )	寺脇村 苗代川	同 日置市	李欣磧		二一〇
23	( 21 )	犬迫村 枝横井村	同 鹿児島市	領主仮館		二〇九
24	( 22 )	鹿児島城下 車町	同 鹿児島市	上町会所		二〇九
25	( 23 )	同			同所逗留	
26	( 24 )	段土村	同 加治木町	新茶屋有馬七左衛門	鹿児島より乗船 脇本村上陸 それより陸路に至る	二〇九
27	( 25 )	有川村 枝石原	同 霧島市	百姓太四郎		二〇八



宿泊日 旧暦	(西暦)	宿泊地	現市町村名	宿泊宅	特記 天体観測	大図番号
28	(26)	中ノ村	同 霧島市	百姓喜惣治	中ノ村より小羽村を歴て北ノ名村迄測る	二〇八
29	(27)	小羽村	同 湧水町	百姓庄右衛門	北ノ名村より中津川村を歴て日州亀沢村界迄測る	二〇八
30	(28)	中津川村字麓	同 湧水町	郷土石神友助	日州亀沢村界より中福良村を歴て加久峠迄測る	二〇八
9月1日	(9.29)	中福良村	宮崎県えびの市	庄左衛門	加久峠字中谷より大畑村迄測る 始良候より贈物あり別記	二〇八
2	(30)	大畑村	熊本県人吉市	酒屋仁兵衛		二〇〇
3	(10.1)	人吉城下九日町	同 人吉市	会所		二〇〇
4	(2)	一勝地村字辛川	同 球磨村	領主仮家		二〇〇
5	(3)	神瀬村	同 球磨村	領主仮家		二〇〇
6	(4)	久多良木村 字鎌瀬	同 八代市	百姓友吉		二〇〇
7	(5)	下松球麻村字段	同 八代市	百姓治兵衛		一九五
8	(6)	八代城下	同 八代市	町年寄宮崎鐸平	下松球麻村字段より萩原村を過ぎ千檀渡を歴て麦島村回り徳印迄測る	一九五
9	(7)	日奈久村	同 八代市	領主仮家	麦島村徳印より千檀渡を歴て球磨川渡り字新地を過ぎ日奈久村迄測る 大嶺蔵島一周測	二〇〇
10	(8)	田浦村	同 芦北町	大庄屋田浦助兵衛	日奈久村より田浦村小田浦村境迄測る	二〇〇
11	(9)	佐敷村	同 芦北町	領主仮家	田浦村小田浦村境より小田浦村字海浦を歴て鶴木山村字蛸瀬浜迄測る	二〇〇
12	(10)	同	同	同	同所逗留測 佐敷村より逆測 字乙千屋を歴て木山村字蛸瀬浜迄測る	二〇〇
13	(11)	湯浦村	同 芦北町	大庄屋赤沢牛右衛門	佐敷村字乙千屋より寺河内村を歴て湯浦村迄測る 字乙千屋より寺河内村字京泊迄測る	二〇〇
14	(12)	平国赤崎村	同 津奈木町	足軽平野弥平太	寺河内村字京泊より平国赤崎村迄測る	二〇〇
15	(13)	津奈木村	同 津奈木町	大庄屋斎藤利吉	平国赤崎村より津奈木村字桜戸迄測る	二〇〇
16	(14)	陣内村	同 水俣市	大庄屋水股吉左衛門	津奈木村字桜戸より小津奈木村字塩屋を歴て浜村大崎迄測る	二〇〇
17	(15)	袋村	同 水俣市	郷土城山伝之丞	浜村大崎より本川を歴て陣内まで測る 本川より字丸島を歴て字明神崎迄測る 小路島一周を測る	二〇〇
18	(16)	同	同	同	同所逗留測 袋村入江を測る	二〇〇



宿泊日 旧暦	(西暦)	宿泊地	現市町村名	宿泊宅	特記 天体観測	大図番号
19	(17)	同	同	同	同所逗留測 浜村字明神崎より袋村字月浦を歴て入江迄測る 入江渡より字神川薩州境迄測る	二〇〇
9月20日	(1810)	支隊中食	下島大多尾村	同	同	二〇三
21	(19)	同	同	同	北高根字丸瀬鼻より中田村字彦坊迄測る 支隊 肥後国より帰着	二〇三
22	(20)	同	同	同	同所逗留測 止宿前より立石村字大丸を歴て津留村迄測る 下田村より横切の半測 恒星測定	二〇三
23	(21)	同	同	同	中田村新田堤より宮河内村字泊浦を歴て宮野河内村中網代迄測る	二〇三
24	(22)	同	同	同	宮野河内村中網代より深海村字二股を歴て深海村本陣前迄測る 産島一周を測る	二〇三
25	(23)	同	同	同	深海村本陣前より浅海村字越路を歴て久玉村字古田迄測る 赤島一周を測る 恒星測定	二〇三
26	(24)	同	同	同	久玉村字古田より字黒岩を歴て久玉村測所迄測る 戸島一周を測る 恒星測定	二〇三
27	(25)	同	同	同	同所逗留測 桑島 矢島 黒島 一周を測る 下須島字瀬戸脇より字涼松まで測る 恒星測定	二〇三
28	(26)	同	同	同	同所逗留測 筑島 宝島 牛島 一周を測る 下須島字瀬戸脇より字源松まで測る 恒星測定	二〇三
29	(27)	同	同	同	同所逗留測 久玉村測所より牛深村字鍛冶屋町に繋ぎ 宮崎を歴て字鶴首迄測る 字鍛冶屋町より宮崎鬼塚迄横切	二〇三
		同	同	同	銀杏山 遠見番所あり 登り山島を測る 恒星測定	二〇三
		同	同	同	牛深村字鶴首より字浦ノ新田を歴て茂串 魚貫村下を過 福津入江南側迄測る 福津入江東側片打	二〇三



## 『伊能忠敬研究』投稿要領

### ①原稿の長さ

論文、報告、紹介、などは、本文・写真・図などを含めて一件につき刷り上がり八頁まで、各地のニュース・お知らせなどは刷り上がり一頁以内を原則とします。

\*刷り上がり一頁に入る文字数は約2000字(704字×3段または480字×4段)です。長い原稿の場合は連載として分割していただくことがあります。

### ②原稿のかたち

・本文(テキスト) 原則として、マイクロソフト社のワードなど一般的なワープロソフトで作成された電子ファイルとします。

・写真 一般的なJPEG形式またはTIFFまたはフォトショップのPSD形式でフォーマットされた電子ファイルとし、印刷サイズで350dpi程度の解像度のよい鮮明なものを用意してください。

\*印刷サイズが100mm×75mmで350dpiのカラー写真の場合、1MB前後のファイルになります。通常のデジタルカメラによつて5Mモード以上で撮影された画像ファイルで問題ありませんが、カメラ付き携帯電話で撮影された写真は無理な場合があります。わからない場合はL判(127mm×89mm)程度にプリントアウトした鮮明な写真でも結構です。

・図 写真に準じます。原図をコピーする場合は、なるべくスキヤナで撮った電子ファイル(JPEG形式またはTIFF形式)にしてください。

### ③原稿の送り方

左記まで電子メール添付か、CDなどのメディアにコピーしたものを郵送してください。その際、挿入する写真・図がある場合はその位置、およびそのサイズを本文中に編集者がわかる形で記入しておくか、概略を記入した割付用紙を添付してください。また、題名、著者連絡先、原稿区分、刷り見込みページ数などを記入したメモ、または原稿整理カードも同時に送付してください。(詳しくは本誌六七号および六八号を参照)

#### 送り先

・電子メール添付の場合 [kaho@inoh-ken.org](mailto:kaho@inoh-ken.org)

・郵送の場合 〒153-0042 東京都目黒区青葉台4-9-6 日本地図センター2階

伊能忠敬研究会「伊能忠敬研究」編集部

### ④注意事項

- ・編集途中での大幅な追加修正はお受けできません。完成原稿として投稿してください。
- ・図や写真の引用について、必要な場合は投稿する前に執筆者が責任を持って許可を取っておってください。
- ・引用した文献等については本文末尾にリストや注記等で出典を明らかにしてください。
- ・原稿内容を編集委員会で検討し、不明な点や内容的に不備な点があった場合には執筆者に連絡し、修正または掲載を見送る場合があります。
- ・受理した原稿は原則として執筆者にお返しいたしませんので、必ずコピーをとっておいてください。

次号(第81号)は2017年2月発行

原稿の切は12月30日の予定です。

皆様からの投稿をお待ちしています！

## 伊能忠敬研究会 御案内

一、本会は伊能忠敬に関心をお持ちの方はどなたでも入会できます。

二、つぎのような活動を行っております。

- ①会報の発行 研究成果・会員活動情報など 原則として年三回発行
- ②例会・見学会の開催
- ③忠敬関連イベントの主催または共催
- ④その他付帯する事業

三、入会方法等 入会を希望される方は郵便振替で住所、氏名、電話番号、通信欄に専門、趣味、入会の動機、御意見などを書き添えて、年会費五千円を左記にお送り下さい。会計年度は、四月から翌年三月ですが、年度途中より御入会の場合は、当該年度の会報のバックナンバーをお送りします。

### 四、伊能忠敬研究会事務局所在地

〒153-0042 東京都目黒区青葉台4-9-6 日本地図センター2F

電話・FAX 03-3466-9752

事務局メール [mail@inoh-ken.org](mailto:mail@inoh-ken.org) (留守の場合は録音テープに吹込んでください。)

郵便振替口座 00150-60726100

ホームページ <http://www.inoh-ken.org/>

### 伊能忠敬研究会関係ホームページ

○伊能忠敬e資料館 「Inopedia (イノペディア)」伊能忠敬と伊能図の大事典  
<http://www.inopedia.tokyo/>

○「伊能忠敬研究会・資料室」現存する伊能図の所在一覧、アメリカ伊能大図など地図および史料  
<http://members.jcom.home.ne.jp/i-sakamo/>

○「伊能忠敬図書館」忠敬関係の文献、画像資料  
<http://www.tlrm.or.jp/~koko>

**編集後記** ◇前号より中綴じから無線綴じに変わった。それにより最大60ページという縛りが無くなった。とはいえ大幅増ページになれば予算も編集の手間もかかる。なにより原稿が常に集まるかという心配がある。◇無線綴じになっても、「全ページ数は4の倍数」という制約は変わらない。だから一ページもの、二ページもの、一ページに満たない一段(三分の一ページ)の囲み記事も必要になる。◇会員便りや談話室も充実したい。投稿はいつでも大歓迎だ。上段の「伊能忠敬研究」投稿要領をご覧の上、是非トライして頂きたい。◇背表紙に字を書くとなると最低でも60ページは必要のようだ。背表紙に字が書けるかが気になった。◇常に、全体の三分の一程度の原稿がストックされている状態なら担当者として心強い。だが実際はそうじゃない。だから書いて頂けそうな方をお願いする。◇今回は締切日近くになって予想を上回る原稿が集まった。嬉しいことだが、それはそれで悩ましい。◇心配性の私だ取りあえず「背表紙字書けるか病」にならずに済んだ。(S・M)